

部 瀬 名 南 遺 跡

—市道・部瀬名線道路改良事業に伴う緊急発掘調査報告—



2002年3月

名護市教育委員会

部 瀬 名 南 遺 跡

—市道・部瀬名線道路改良事業に伴う緊急発掘調査報告—

2002年3月

名護市教育委員会

序

『部瀬名南遺跡発掘調査報告書』を発行することができ、たいへん喜ばしく思います。本報告書は平成11年度に実施しました部瀬名南遺跡の緊急発掘調査の成果をまとめたものであります。発掘調査は市道部瀬名線改良事業に伴うもので、名護市建設部建設課からの依頼により、名護市教育委員会社会教育課文化財係が分任事業として実施致しました。

近年、本市におきましては公共事業に伴う発掘調査が増加しており、平成10年度から継続中である大堂原貝塚、平成10年度の部瀬名貝塚、そして今回の部瀬名南遺跡発掘調査と続いております。なかでも屋我地の大堂原貝塚の発掘調査は県内外の考古学関係者に大きな関心を寄せて戴いています。そのため、2001年（平成13年）7月には沖縄考古学会が本市の屋我地支所において開催され、研究発表とともに大堂原貝塚の調査内容を紹介することができました。

今後も大堂原貝塚と屋部前田原貝塚の発掘調査が実施されますが、調査体制の強化を図るとともに、地域の皆様にはより一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

最後になりますが、部瀬名南遺跡の発掘調査および報告書の作成にご協力戴いた関係各位の皆様、ならびに2001年度の沖縄考古学会開催にご尽力くださった事務局の皆様に深く感謝申し上げますとともに、本書が文化財愛護思想の高揚はもとより地域の歴史学習、研究等多くの方々に活用されることを願い、発刊のあいさつといたします。

平成14年3月

名護市教育委員会
教育長 山里全用

例 言

1. 本報告書は2000年から2001年（平成12年度）にかけ実施した部瀬名南遺跡（ぶせなみなみいせき）の発掘調査の内容を記録したものである。
2. 発掘調査は「市道・部瀬名線道路改良事業」に伴うもので、名護市建設部（名護市長 岸本建男）より依頼を受け、名護市教育委員会（教育長 山里全用）が実施した。
3. 発掘調査は平成12年10月2日から平成13年3月9日まで行った。
4. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行1/50,000地形図と名護市役所発行の1/25,000、1/10,000地形図を使用した。
5. 発掘調査および資料整理にあたり、下記の方々の指導・助言を戴いた。記して謝意を表します。
土 器：上原 静（沖縄国際大学）
宮城弘樹（今帰仁村教育委員会）
石 質：神谷厚昭（沖縄県立博物館）
大城逸朗（沖縄県立石川高等学校）
6. 各章の執筆は下記のように分担した。
仲宗根 禎（第Ⅰ章～第Ⅳ章、第Ⅵ章）
新城 卓也（第Ⅴ章）
7. 発掘調査において得られた出土遺物および実測図・写真等の記録は、すべて名護市教育委員会社会教育課文化財係の資料室にて保管している。
8. 発掘調査および資料整理の調査体制については、第Ⅰ章第2節に記している。

報 告 書 抄 録

ふ り が な		ぶせなみなみいせき						
書 名		部瀬名南遺跡						
副 書 名		市道・部瀬名線道路改良事業に伴う緊急発掘調査報告						
巻 次								
シ リ ー ズ 名		名護市文化財調査報告						
シ リ ー ズ 番 号		第15集						
編 著 者 名		仲宗根 禎・新城卓也						
編 集 機 関		名護市教育委員会社会教育課文化財係						
所 在 地		〒905-0014 沖縄県名護市港一丁目1番1号 Tel 0980-53-5429						
発 行 年 月 日		平成14年（2002年）3月29日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぶ せ なみなみい せき 部瀬名南遺跡	おきなわけん 沖縄県 な ご し 名護市 あざ き せ 字喜瀬 ぶ せ なばる 部瀬名原	47209	6-17			2000.10. 2 2001. 3. 9	265	市道・部 瀬名線道 路改良事 業に伴う 緊急発掘 調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
部瀬名南遺跡		沖縄貝塚時代 前期 縄文時代後期 相当期	集 石	土 器				

目 次

序
例 言
報告書抄録
目 次

第Ⅰ章

第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査体制	3

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 名護市の位置	5
第2節 部瀬名南遺跡の位置と環境	5

第Ⅲ章 調査経過

第1節 調査経過	7
----------	---

第Ⅳ章 層序と遺構

第1節 層 序	11
第2節 遺 構	12

第Ⅴ章 出土遺物

第1節 土 器	17
第2節 石 器	23

第Ⅵ章 総 括

附 章 自然科学分析	63
------------	----

図 目 次

第1図 名護市の位置図	1
第2図 部瀬名南遺跡の位置図	2
第3図 部瀬名南遺跡周辺の小地名図	4
第4図 部瀬名南遺跡周辺の遺跡・文化財分布図	5
第5図 試掘調査実施区域図	6
第6図 試掘調査出土資料	8
第7図 試掘調査出土資料	9
第8図 グリット設定及び調査範囲図	10
第9図 調査区層序断面図	13
第10図 集石遺構及び礫分布状況図	15
第11図 集石遺構平面及び断面図	16
第12図 土器出土分布図	20
第13図 第1類土器、第2類土器 瘤状突起部	33
第14図 第2類土器 瘤状突起部、第2類土器	34
第15図 第2類土器	35
第16図 第2類土器	36

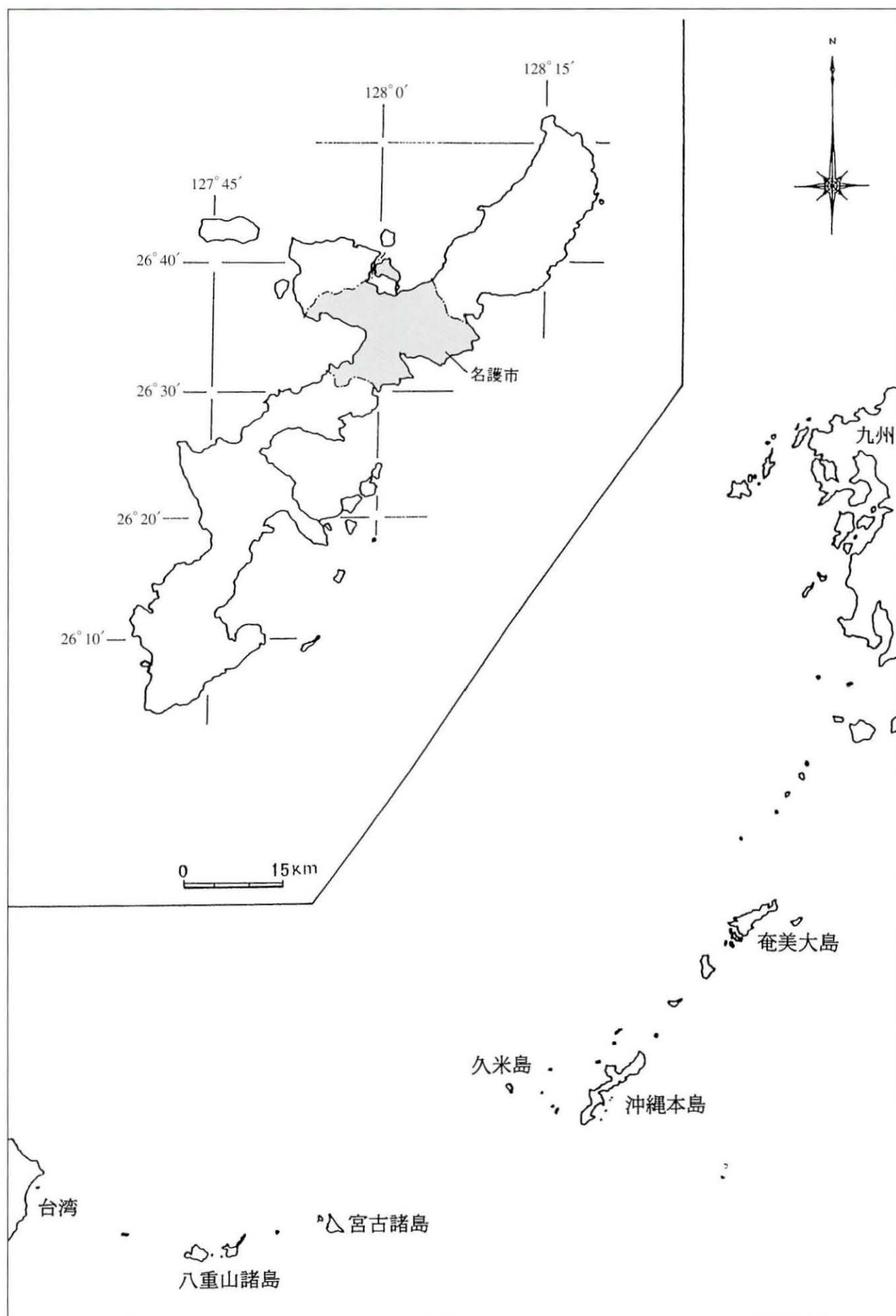
第17図 第2類土器	37
第18図 第2類土器	38
第19図 第3類土器	39
第20図 第3類土器	40
第21図 第3類土器、第4類土器	41
第22図 第4類土器、第5類土器	42
第23図 類不明土器、底部資料、石器	43

図 版 目 次

PL.1 1.部瀬名南遺跡遠景/2.B-13グリット 第6層検出集石遺構	46
PL.2 3.集石遺構半截状況/4.C-13グリット 東側断面図及び土壌サンプル採取状況	47
PL.3 5.集石遺構断面/6.B-11グリット東側断面/7.B-16 グリット東側断面/8.C-13グリット南側断面	48
PL.4 9.B-15グリット北側断面及び礫出土状況 10.C-15グリット北側断面	49
PL.5 11.D・E-14グリット北側断面 12.B-15・16グリット東側断面	50
PL.6 13.発掘調査風景/14.第6層土器出土状況 15.発掘調査区域鳥瞰	51
PL.7 第1類土器/第2類土器 瘤状突起部	52
PL.8 第2類土器 瘤状突起部/第2類土器	53
PL.9 第2類土器	54
PL.10 第2類土器	55
PL.11 第2類土器	56
PL.12 第2類土器/第3類土器	57
PL.13 第3類土器	58
PL.14 第3類土器/第4類土器/第5類土器	59
PL.15 類不明土器/底部資料	60
PL.16 石器・試掘調査出土資料	61

表 目 次

表1 土器出土状況一覧	18
表2 重量比における集計資料の割合	18
表3 部位別出土状況	18
表4 層別出土状況	18
表5 土器観察一覧	24



第1図 名護市の位置図



第2図 部瀬名南遺跡の位置図

第Ⅰ章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

平成10年度名護市建設部により喜瀬地内において、市道・部瀬名線道路改良工事区域における埋蔵文化財等の有無を確認する照会がなされた。これを受け名護市教育委員会は、平成11年度（1999年）6月に埋蔵文化財等の確認を行う試掘調査を実施する。ところが、「2000年九州・沖縄サミット」の開催にあたり、会場の部瀬名岬に隣接する国道58号・部瀬名線道路線形改良事業が計画され、急遽国道部分も併せて試掘調査を行うこととなった。

平成11年6月8日から実施した試掘調査は、当初国道部分における周知の遺跡である部瀬名貝塚の範囲を確認することを目的としていたが、上記の理由により市道部分も併せて行った結果、新たに埋蔵文化財の包蔵地が確認された。新たに発見された埋蔵文化財包蔵地は、周知の遺跡である部瀬名貝塚とは遺跡の広がりとしての連続性がなく、出土する資料（土器）の年代が異なることから新発見の遺跡であることが確認された。

翌12年の5月15日から6月5日にかけては、平成11年度に試掘調査を行えなかった部瀬名原1906・1907・1908番の谷間部分を中心に6地点で調査を行ったが、埋蔵文化財（土器や貝類等）は確認されなかった。

第2節 調査体制

発掘調査（平成12年度）から資料整理および報告書の刊行（平成13年度）まで、下記の体制で実施した。

調査主体・・・名護市教育委員会

調査総括・・・名護市教育委員会教育長 山里全用

調査責任者・・・社会教育課長 平良芳一（平成12年度）

〃 上地圭子

総務責任者・・・文化財係長 島福善弘

総 務・・・渡口 裕（平成12年度）

岸本久美（平成12年度）

比嘉文子

調査員・・・仲宗根 禎

調査補助員A・・・新城卓也、赤嶺信哉（平成13年度）

調査補助員B・・・仲村美代子、平 貢、大城洋平

資料整理員・・・神谷祐子

発掘作業員・・・稲嶺盛功、伊藤 文、岸本 勝、呉屋太郎、平良昌也、平良幸男

比嘉善助、比嘉厚夫、山城キヨ子、山城正則、屋部仲夫、喜屋武敏治

和田泰明、近村安朗、港川和哉、市川和弘、友利 豊、文谷 剛

資料整理作業員・・・津波米子、野口 恵

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 名護市の位置

名護市は沖縄本島の北部に所在し、那覇から北に約64kmの距離にある。1970年（昭和45年）に名護町・屋部村・羽地村・屋我地村・久志村の1町4村が合併し名護市が誕生した。名護市の総面積は210.21km²を有し、その約60%は山林が占めている。名護岳（標高345.2m）を中心に北に多野岳（383.2m）、南に辺野古岳・久志岳と山々が連なるため、名護岳一帯は起伏の大きい丘陵地で構成されている。市街地及び集落はこれらの山地を避け、名護湾沿岸地域と羽地内海地域、太平洋に面した東海岸地域に分けることができる。名護市における遺跡の立地状況も同様であり、海に面した「カネク」と称される浜堤や低地にその多くが分布している。

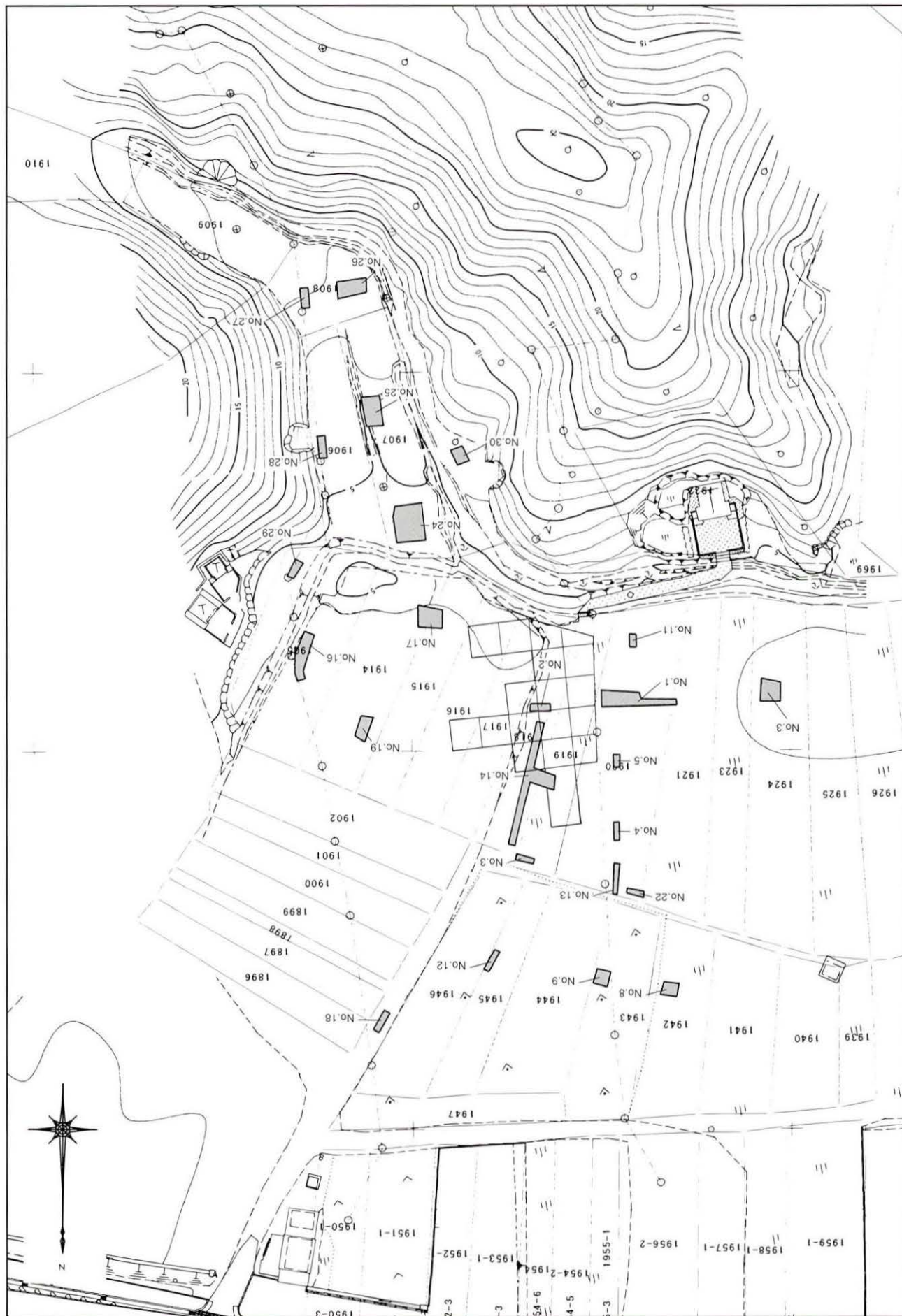
第2節 部瀬名南遺跡の位置と環境

部瀬名南遺跡は、沖縄自動車道許田インターから南西に約2km、喜瀬集落の西側に位置する。国道58号線を挟んだ遺跡の北側には部瀬名岬が突出しており、海中展望塔や大型リゾートホテルが立地している。また、岬の突端には2000年九州・沖縄サミットの会場となった万国津梁館がある。

岬の先端は先新第三系の千枚岩類および第四系の段丘堆積物からなり、最高標高は33.7mである。岬の基部には沖積層（砂層）からなる海岸低地がひろがり、沖縄貝塚時代後期の遺跡である部瀬名貝塚が位置する。部瀬名南遺跡は、その部瀬名貝塚の南側約120mに位置し、背後には山地の急斜面が迫る後背湿地に立地している。



第5図 試掘調査実施区域図



第Ⅲ章 調査経過

平成11年度（1999年度）

平成10年度、名護市建設部建設課により名護市喜瀬地内において市道部瀬名線道路改良工事区域における埋蔵文化財等の有無を確認する紹介がなされたことにより、平成11年度（1999年）6月に名護市教育委員会が埋蔵文化財等の確認を行う試掘調査を実施することとなった。ところが、「2000年九州・沖縄サミット」の開催にあたり、会場の部瀬名岬に隣接する国道58号線の部瀬名線道路線形改良事業が計画され、急遽国道部分も併せて試掘調査を行うこととなった。

平成11年6月から約1ヶ月間にわたり実施された試掘調査の結果、両工事予定地内において埋蔵文化財が確認された。その後、本発掘調査の対象は市道部分から国道部分に移り、平成11年度は部瀬名貝塚の発掘調査を行うこととなる。

平成12年度（2000年度）

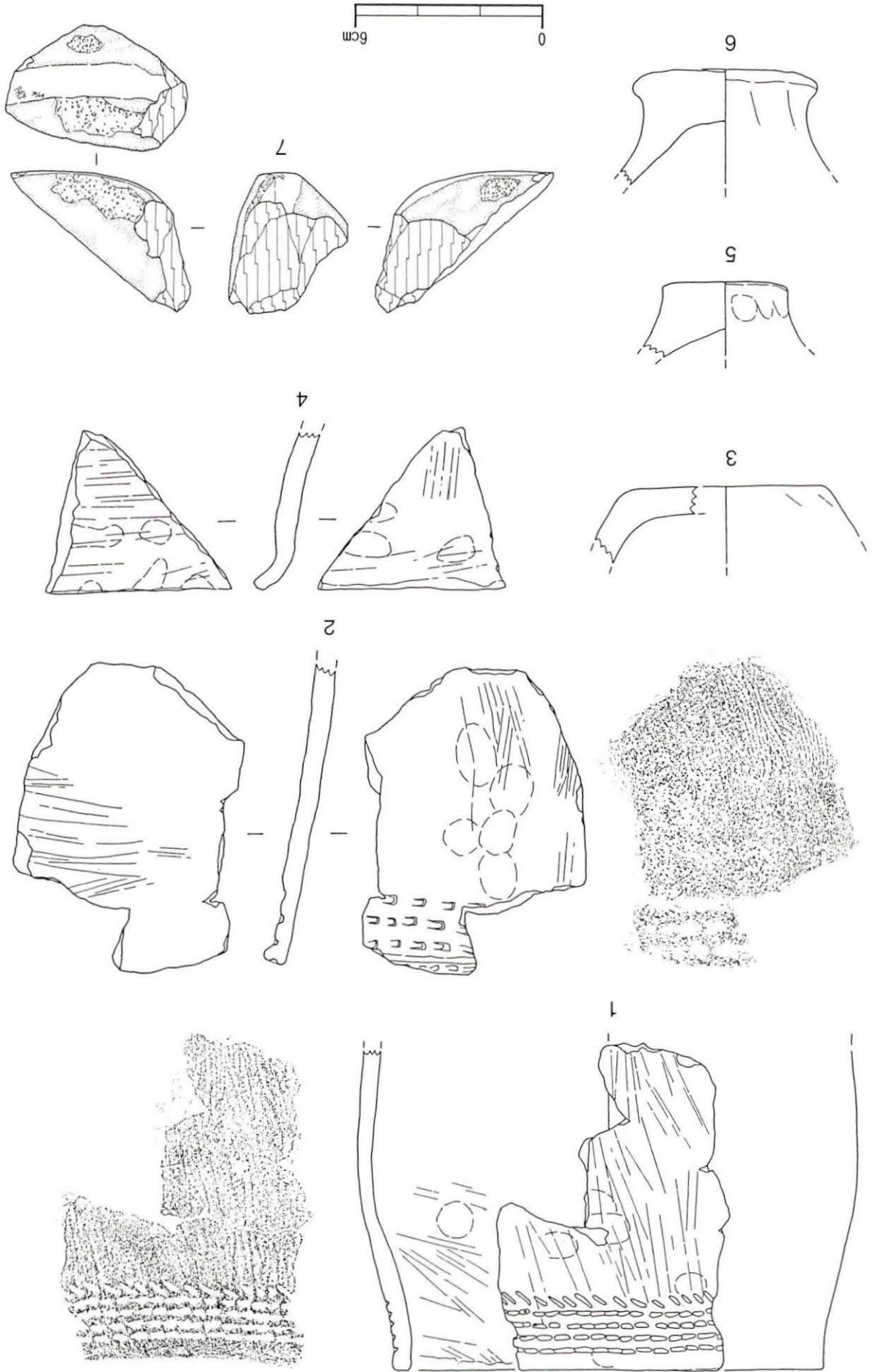
部瀬名南遺跡の本発掘調査は、平成12年（2000年）10月2日から平成13年（2001年）3月9日までの約5ヶ月間にわたり実施された。調査対象地域はサミット開催にあたり、駐車場として利用されたため、約1mの高さで造成されており、その部分をバックホーによる除去作業を行った後、遺跡の南側斜面下を流れる小川の流水が調査地に入り込むのを防ぐため「L字状」に8mの鋼矢板を設置した。その後、道路改良工事のために20m間隔で設置されている工事杭（No.2・No.3）を基点に4m×4mを単位とするグリットを設置した。

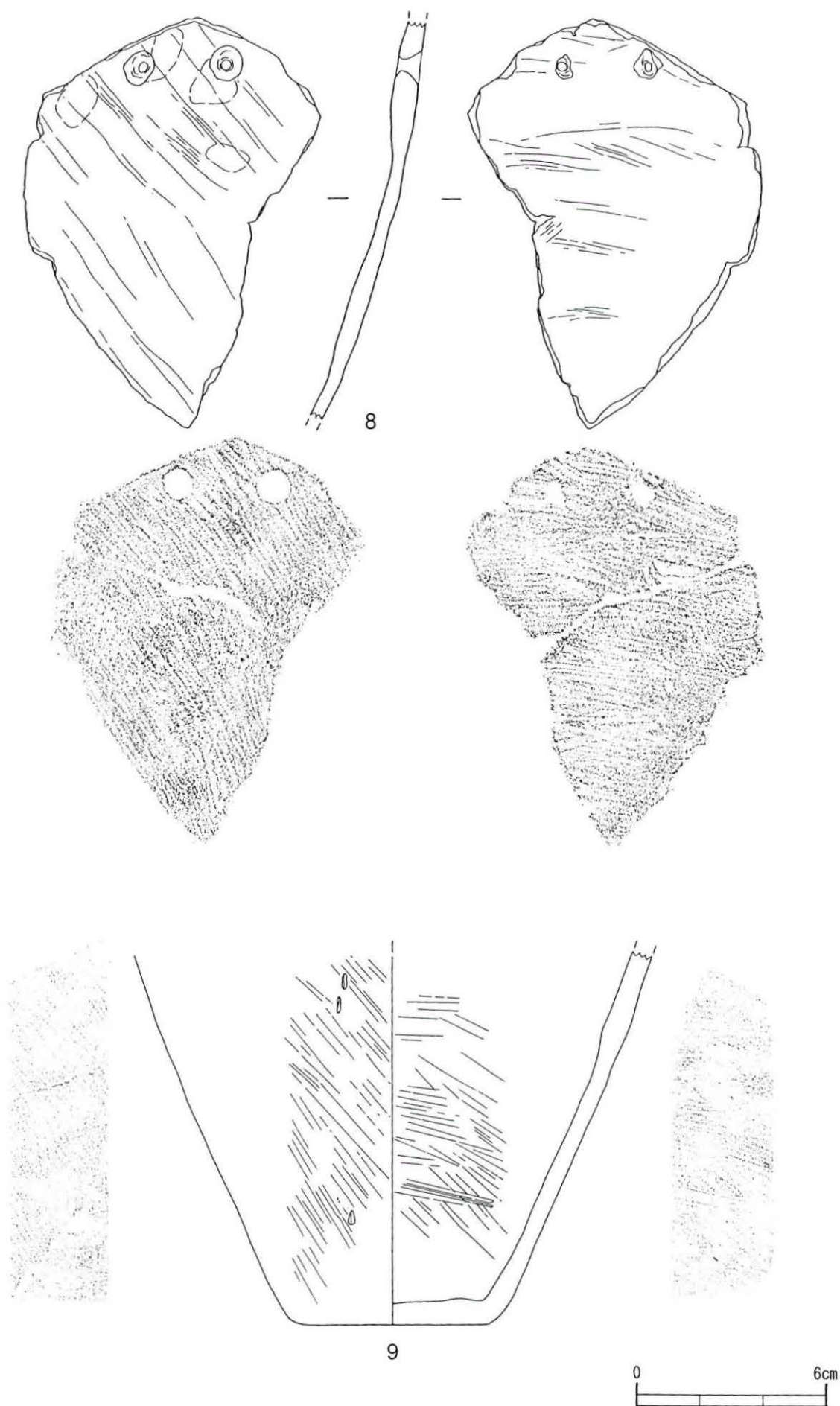
調査は鋼矢板を設置した角の部分（A・B-11～13グリット）から着手した。同グリットを手掘りにより掘り下げていくと、地表面から約1.2m下のレベルから沖縄貝塚時代前期の土器が確認された。埋蔵文化財の出土範囲を確認するため、調査地を東側のC-11、D-11へと拡張し、北側へはB-14～17グリットへと調査範囲を拡大していったが、遺跡の東・北側へ行くに従い土器の出土量は減少し、B-16・17グリット、D・E-14グリット、D-11グリットでは土器の出土は確認されなかった。

平成13年度（2001年度）

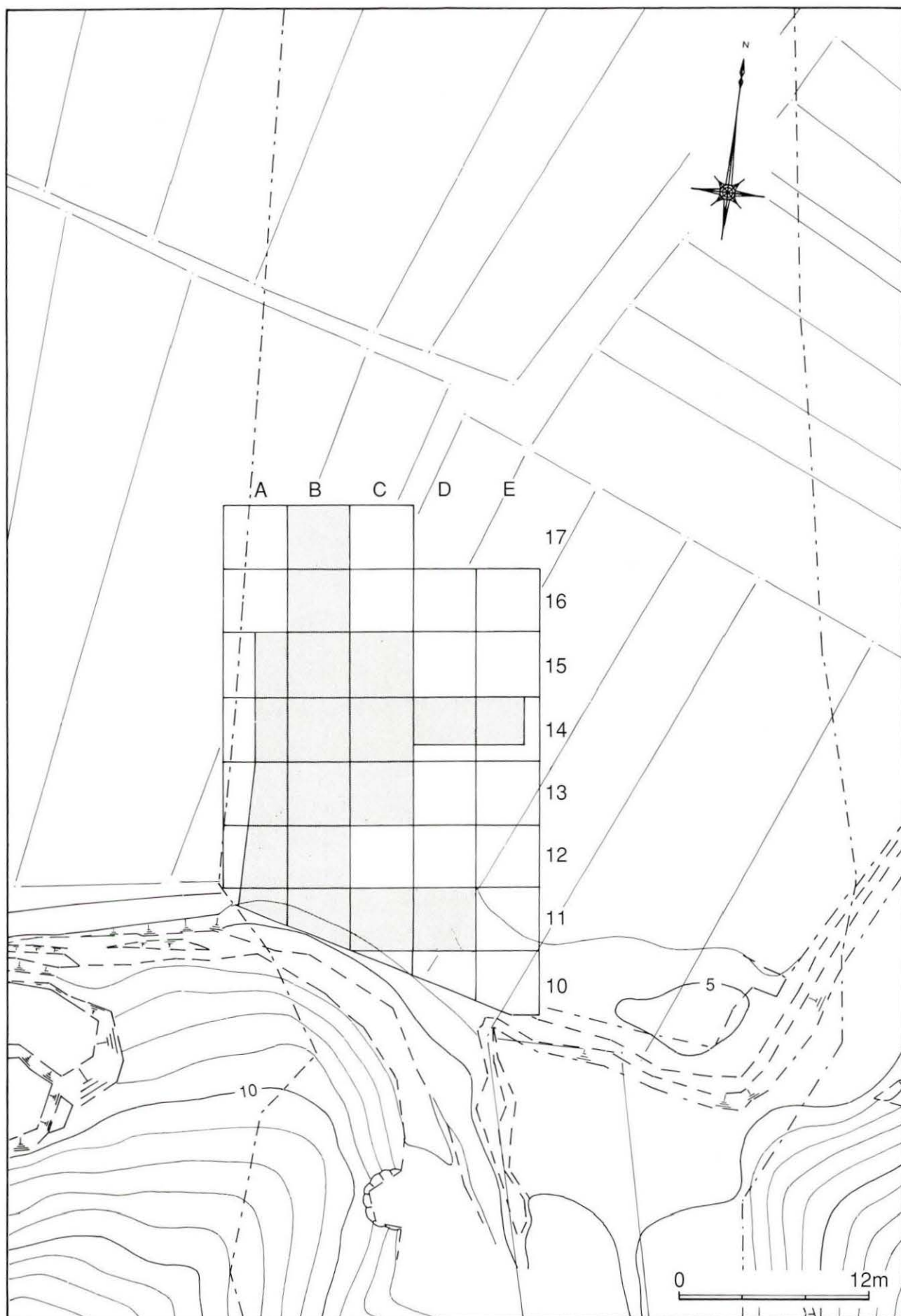
平成13年度は、協定書に基づき4月1日に年間の覚書を締結した。本年度は、昨年度の発掘調査により出土した資料を洗浄・注記・接合を行った後、実測作業を行い発掘調査の成果をまとめた報告書の作成を行い、部瀬名南遺跡発掘調査全体の業務を完了する。

第6図 試掘調査出土資料 (部瀬名南遺跡範囲内1~3、部瀬名貝塚範囲4~7)





第7図 試掘調査出土資料（部瀬名南遺跡範囲内8・9）



第8図 グリッド設定及び調査範囲図

第Ⅳ章 層序と遺構

第1節 層序

調査は第1層の客土をバックホーにより除去した後、旧地表面を形成していたと考えられる黒褐色腐植土層より手掘りによる調査を行った。その結果、下記の9枚の層序を確認した。本遺跡での文化層は第6層（縄文時代後期相当）を主体とするが、それ以下の層位における人工遺物の有無を確認するため、可能な限り掘り下げること努めた。A-11・B-11グリットにおいて標高0.5mの深度まで掘り下げを行ったが、土器片等の人工遺物は確認されず、調査の安全上第9層の確認までにとどまった。

基本層序（土壌層位）

- 第1層： 表土層（客土）。駐車場整備の際に搬入されたものであり、石灰岩や粘板岩片の礫が多く混入する。数度にわたり敷き詰められているのが確認される。
- 第2層： 黒色腐植土層。旧地表面を形成していた土層であり、そこに生育していた植物が未分解の状態で堆積しているのが確認できる。現代から近代にかけての遺物が出土する。
- 第3層： 茶褐色土層。耕作土として攪乱を受けており、第2層との層界（境界）は不明瞭である。出土遺物は第2層と同様に現代から近代にかけてのもので、僅かに検出された陶磁器片はスンカンマカイと称されている砥部産の磁器片や壺屋産の陶器片が見られる。
- 第4層： 灰白色シルト質土層。礫の混入がほとんど見られない無遺物層。層厚は5～10cmと薄く広がっている。
- 第5層： 灰黄色シルト質土層。粘性のある土層が主体となるが、帯状に粘板岩片の礫が集中して堆積している層位が存在するため、第5a層と第5b層に細分される。第4層と同様に貝類・人工遺物を含まない層であるが、C-11グリットにおいては最下面（6層直上）より伊波式土器の口縁部が出土した。
- 第6層： 灰色砂層。最も多くの土器片が出土した遺物包含層。下位方向に砂の粒子が粗く、礫の混入が多くなる。
- 第7層： 暗灰褐色砂層。上位の6層に類似するが、色調が暗く褐色を呈し砂の粒子が更に粗くなり、礫の混入が増える。
- 第8層： 青灰色砂礫層。粗い砂礫が主体であるが下位方向にシルト質の土が多く混入する。本層からの人工遺物の出土はない。
- 第9層： 灰褐色シルト質粘土層。

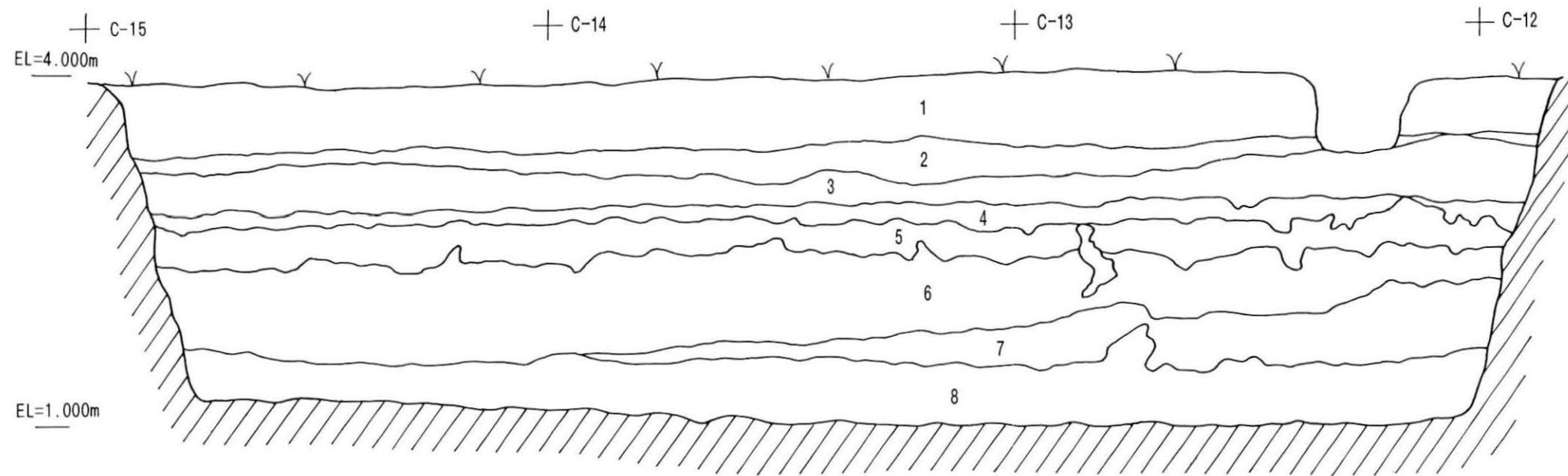
以上、基本層序は上記に示したとおりであるが、現場での調査時に1層の客土を層序に含めず2層と3層を攪乱層として併せて取り扱ったため、資料整理後の基本層序とズレが生じてしまった。そのため、本報告書の末尾に掲載された自然化学分析結果に現れる層序にもズレが生じているため、次に層序の対応関係を明らかにする。

現場における調査時の層序	資料整理後の統一基本層序
第1層：近代・攪乱層・・・・・・・・→	第1層：表土層（客土）
	第2層：黒褐色腐植土層（旧表土層）
	第3層：茶褐色土層
第2層：灰白色シルト質粘土層・・・・→	第4層：灰白色シルト質粘土層
第3層：灰白色シルト質粘土層・・・・→	第5層：灰黄色シルト質粘土層
第4層：灰色細粒～中粒砂層・・・・→	第6層：灰色砂層
第5層：褐色中粒～粗粒砂層・・・・→	第7層：灰褐色砂層
第6層：青灰色粗粒砂層・・・・・・・・→	第8層：青灰色砂礫層
灰褐色シルト質粘土層・・・・・・・・→	第9層：青灰褐色シルト質粘土層
（6層下位相当層）	

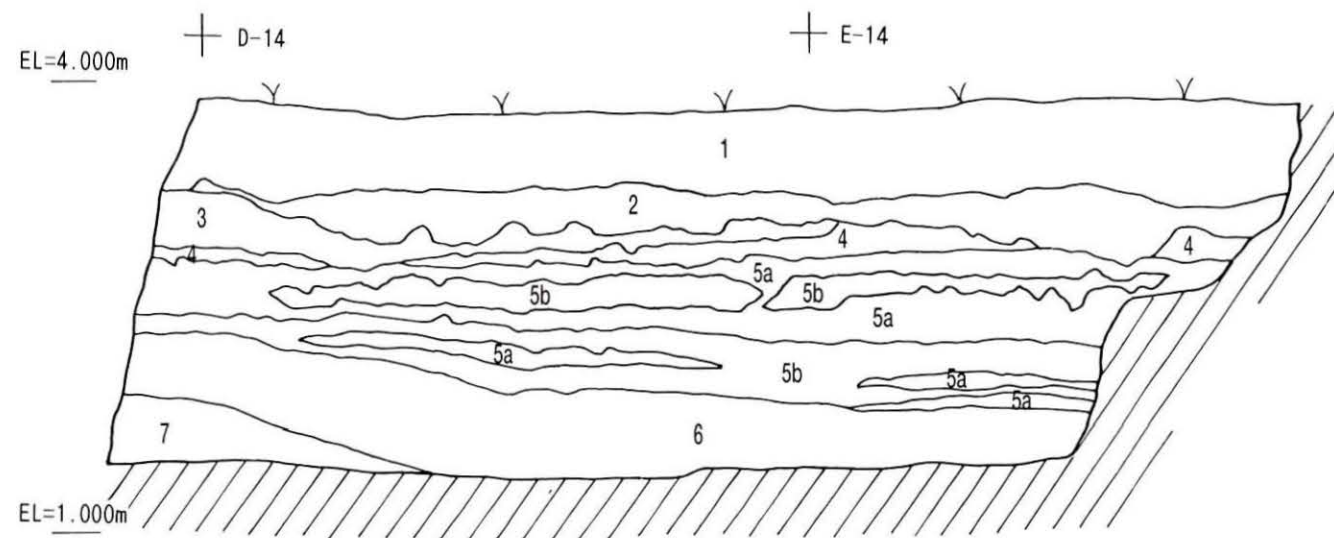
第2節 遺構

今回の調査区内において確認された遺構は、B-13グリットの第6層（EL＝220cm付近）から検出された集石遺構1基のみである。遺構が検出されたレベルでは、集石を構成している礫と同質の礫が散布していたが、礫の密度が異なることや砂層が黒色を帯びていたため遺構として取り扱った。北西方向に伸びていたと考えられるが、発掘作業を進める際に調査区縁辺部を掘り下げ排水を行っていたため遺構の一部を破壊してしまった。集石は主に砂岩や千枚岩から構成され砂層は黒色を帯びていが、遺構内には肉眼で観察できる炭化物はなく土器の出土も数点と他の地区に比べ少なかった。平面図と破壊部分の断面図を記録したのち、集積の半分の礫を取り除くと礫の出土は減少していった。断面観から礫を含む黒褐色砂層の落ち込みが見られるため、人為的な掘り込みの可能性が考えられるが、遺構としての性質を判断できなかった。

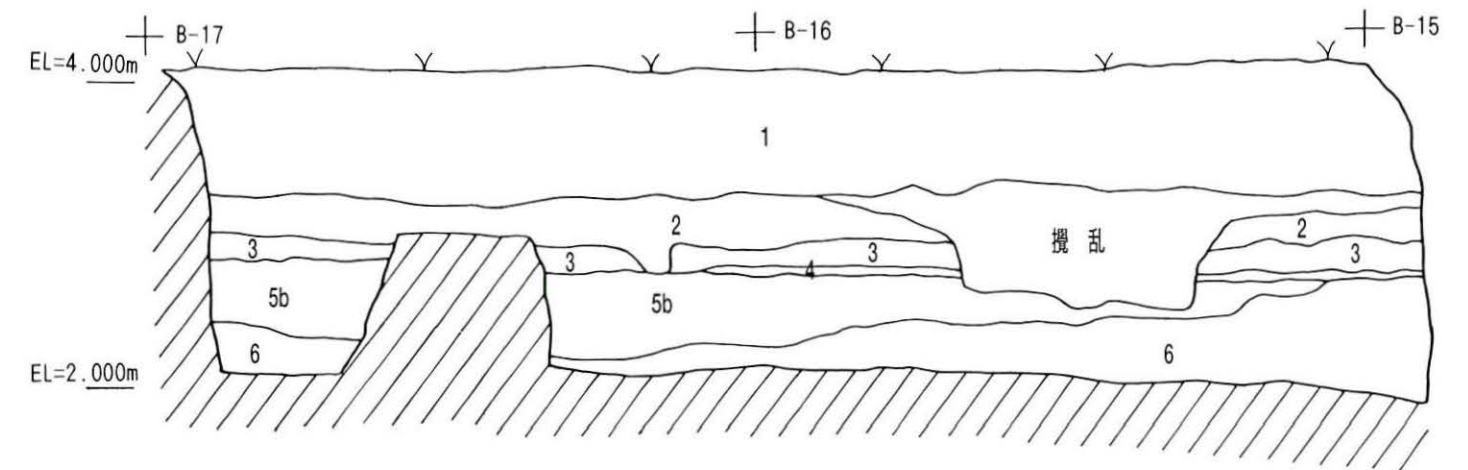
C-13~15 グリット東側断面図



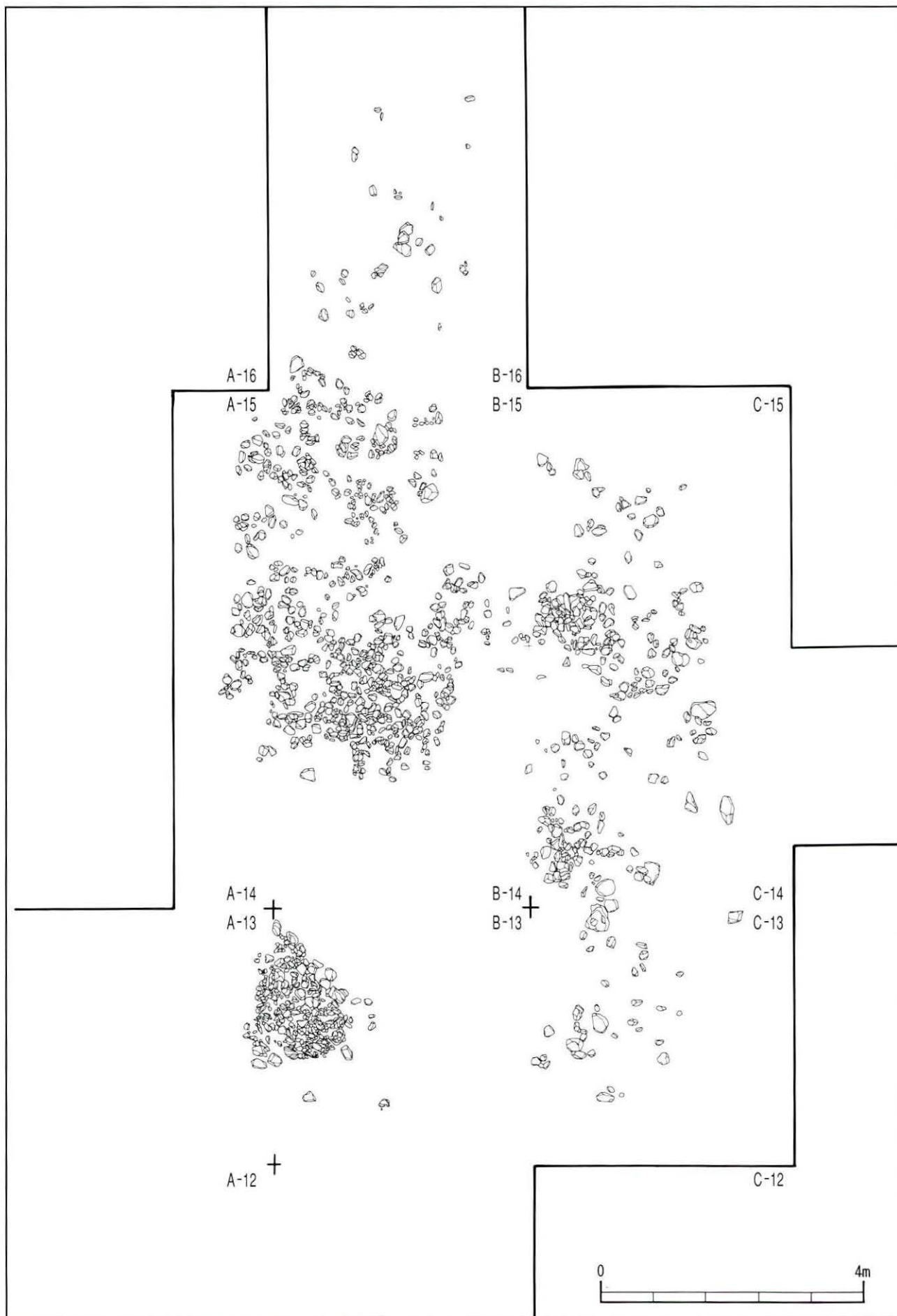
D・E-14 グリット北側断面図



B-16・17 グリット東側断面図



第9図 調査区層序断面



第10図 集石遺構及び礫の分布状況図



第11図 集石遺構平面図及び断面図

第V章 出土遺物

本遺跡から出土した人工遺物は、主に第6層から検出された土器群が主体であり、沖縄貝塚時代前期または高宮暫定編年Ⅳ期（縄文時代後期相当期）に属する資料と考えられる。その他に、旧地表面を形成していた第2層や耕作土の第3層からは、現代から近代にかけての陶磁器片（砥部、壺屋産）が僅かに検出されたものの攪乱層であることから本節での掲載を省略した。また、攪乱層以下の層位において貝類の出土は皆無であるため、本節での報告は105点の土器資料と1点の石器資料となる。

第1節 土器

今回の調査区において、第6層である灰色砂層を主体に縄文時代後期に相当する高宮暫定編年Ⅳ期（高宮、1978）に属すると考えられる土器が出土している。遺跡の南側（丘陵地）から北側（海岸部）に向かうに従い、土器の出土量は減少していく。前述の第6層からの出土がほとんどであるが、第6層の層界に近い第5層および第7層からも出土している。出土した土器を概観すると、無文の同部片が多数を占め、器形を窺える口縁部・有文資料は少量である。そのため分類基準は文様に拠るものが多い。

土器の出土状況は第1表のとおり総数量1,298点であるが、集計作業にあつたては20mm×20mm枠に収まる破片についてはカウントせず、それ以上の大きさの資料を集計の対象とした。そのため、集計された資料と未集計の資料の割合を把握する目的で重量比に換算した第2表の作成を試みた。それによると、出土土器の総重量15,006 gのうち約85%（12,789 g）が集計され、残りの約15%（2,217 g）が集計されなかったことになる。

第1類土器 伊波式土器に比定される土器。

伊波式土器は、石川県伊波貝塚出土の土器を標式とする。一般に深鉢形で、頸部から口縁部にかけて外反し、口縁部は通常4つの山形突起をなす。全体形として口縁部が開き底部がすばまる朝顔形を呈する平底の土器型式である。胎土には石英・チャートなどを含む。

本遺跡において伊波式土器と確認された資料は4点と少ない。細片資料であるため、器形による分類は行えないが、文様により3種類に分けることができる。

- I種： 山形口縁部直下に叉状工具による縦位区画文を施し、区画内には同叉状工具による羽状文を施すもの。（第13図1・2）
- II種： 叉状工具による横位の連点文を数条施すもの。（第13図3）
- III種： 先端が扁平な単篋工具による横捺刻文を横位に2条、山形頂部下に2条認められるもの。（第13図4）

第2類土器 萩堂式土器に比定される土器。

萩堂式土器は、北中城村萩堂貝塚出土の土器を標式とし、伊波式土器に後続する土器型式である。一般に深鉢形で、口径は胴の最大径と同じか幾分小さく、口縁部がしまる傾向にある平底の土器である。口縁の山形突起が瘤状に膨らむものと、瘤状突起を持たない平口縁のものがある。

表1 土器出土状況一覧

グリッド	層序	1層	2層	3層	4層	5層				6層				7層				8層	9層	小計
	部位	—	—	—	—	口縁部	胴部	底部	部位不明	口縁部	胴部	底部	部位不明	口縁部	胴部	底部	部位不明	—	—	
A-11										3	22									25
B-11										3	18				3					24
C-11										6										6
D-11											2			1						3
A-12										22	137	4	9	1	2					175
B-12										11	110	2	2							125
A-13										13	64									77
B-13										11	96	3	9		3		1			123
C-13										1	35									36
A-14											4									4
B-14										19	225	6								250
C-14										16	170	1	6							193
D-14							1			1	2									4
E-14																				0
A-15							1				1									2
B-15						2	12	1		12	148	1	1							177
C-15								1		4	36	1	1	1	4					48
B-16						2	2	1		2	12									19
B-17													1							1
小計						4	16	3		124	1082	18	29	3	12		1			1292
合計		0	0	0	0	23				1253				16				0	0	

表2 重量比における集計資料の割合

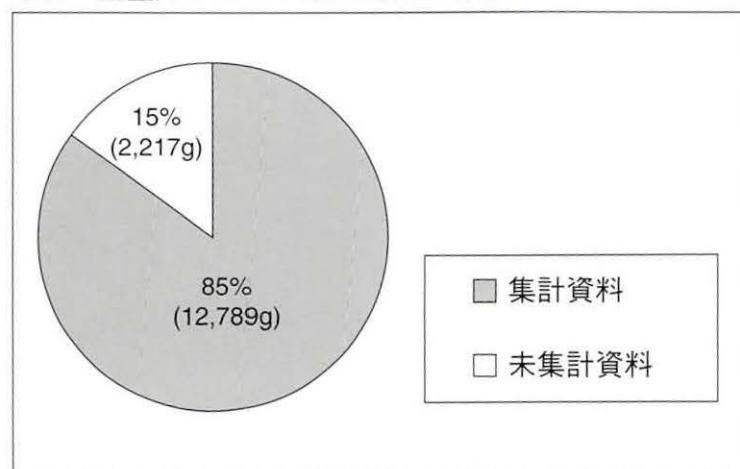


表3 部位別出土状況

部位別	土器片数量	割合
口縁部	131	10.13%
胴部	1110	85.91%
底部	21	1.62%
不明	30	2.32%

表4 層別出土状況

層別	土器片数量	割合
5層	23	1.78%
6層	1253	96.98%
7層	16	1.23%

瘤状突起の形態分類

これまでの調査・研究に拠ると荻堂式土器の瘤状突起はおおむね以下の3種に分けることができる(高宮,1980)。

- ① 瘤全体が円く膨らむもの。
- ② 瘤の外表面が縦型の凹部を形成するもの。
- ③ 瘤の外表面が縦長の平坦面をつくるもの。

本遺跡から出土した荻堂式土器の瘤状突起部を上記の3種に当てはめると、①の「瘤全体が円く膨らむもの」はみられない。②の「瘤の外表面が縦型の凹部を形成するもの」には第13図5～9が該当する。

さらに、③の「瘤の外表面が縦長の平坦面をつくるもの」には平坦面を持つという点において、第13図

10～12、第2図13～15が該当すると思われるが、若干の差異がみられる。そこで、③種を瘤状突起の肥厚が発達しているものと、肥厚が弱いものに細分した。前者をa後者をbとし、さらに文様種を組み合わせると下記のような分類になる。

②種：瘤の外面が縦型の凹部を形成するもの。

②種+押し引き文（単篋工具）・・・第13図5・8

②種+連点文（叉状工具）・・・第13図9

③種a：瘤状突起部の肥厚が発達し、外面に平坦面をつくるもの。

③種a+押し引き文（単篋工具）・・・第13図10～12

③種b：瘤状突起部の肥厚が弱く、外面に平坦面をつくるもの。

③種b+連点文（叉状工具）・・・第14図13

③種b+点刻文（叉状工具）・・・第14図14

③種b+刺突文（単篋工具）・・・第14図15

第2類土器における文様分類

I種 点刻文：口頸部外面に叉状工具を用い、横位の点刻文を数条施すもの。

第14図16は横位の点刻文を4条、同図17は2条施し下位は無文となる。同様に点刻文を施す資料には同図18～21があるが、細片資料であるため点刻文以下の文様構成については不明である。

II種 連点文：叉状工具を用い、口頸部外面に点刻を連結させた連点文を数条施すもの。

第15図22から第16図43に示した資料は、口頸部に連点文を持つ資料である。多くの資料は細片であるが、第15図33や第16図34の資料は第1文様帯に3条あるいは4条の連点文を施し、その下の第2文様帯に鋸歯文を加えるという文様構成を示している。第16図35～43の胴部資料から同様に「連点文+鋸歯文」の文様構成が推察される。

III種 沈線文：叉状工具を用い、横位に沈線を数条施すもの。

第17図44～46はいずれの資料も細片であるため、沈線以下の文様構成については不明である。

IV種 押し引き文：単篋工具あるいは半截竹管状工具を用い、篋を器面から離すことなく押し引きながら施文するもの。施文具の種類によりa・bに細分した。

a単篋工具（第17図47～第18図54）

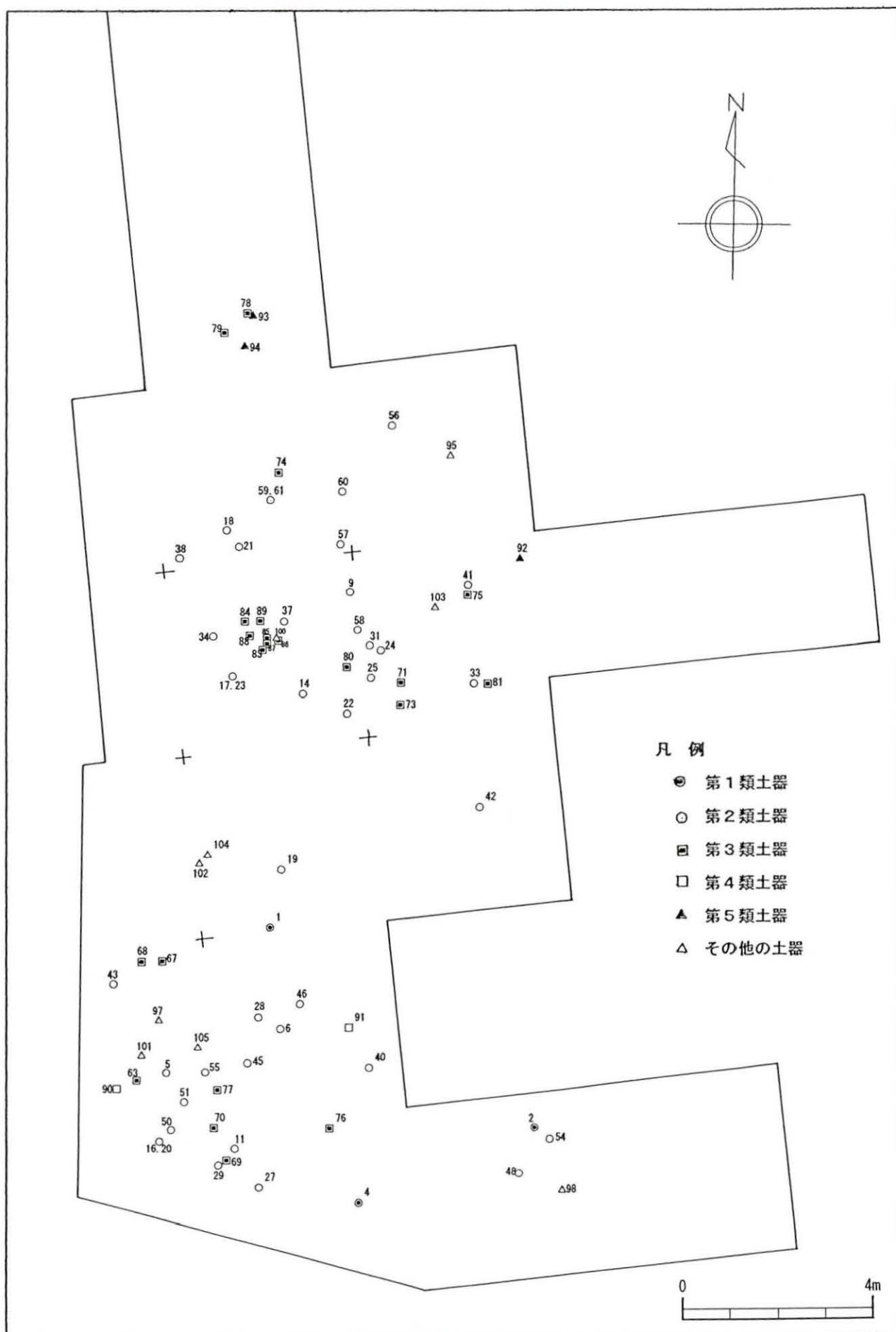
口頸部に押し引き文を数条施すものであるが、胴部資料から押し引き文の下に鋸歯文を交差させ、連結した菱形文を加える文様構成が窺える。その他に、第18図54は押し引き文の下に斜沈線を連続させる文様を施すものもある。

b半截竹管状工具（第18図56～58）

第18図56は半截竹管状工具を用い等間隔に押し引き文を施すが、同図57は施文する間隔を変え第1文様帯と第2文様帯の間に空白部分を持つ。

V種 沈線+凸帯文+鋸歯文（第18図59～61）

叉状工具を用いた沈線と凸帯文により3つの文様帯を構成するもの。第1文様帯は叉状工具により15mm前後の沈線を横位に施し、第2文様帯には刻みを持つ凸帯文を貼り付ける。第3文様帯には第1文様帯と同様の叉状工具を用いた沈線を鋸歯状に施す。



第12図 土器出土分布図

凸帯文をもつ点が大きな特徴であるが、叉状工具を用いた施文と器形から判断し本類に含めた。

第3類土器 大山式土器に比定される土器。

大山式土器は、宜野湾市大山に所在する大山貝塚出土の土器を標式とする。一般的に、単篋工具や半截竹管状工具を用い口頸部に数条の横捺刻文または押し引き文を施す。

I種 横捺刻文（第19図62～64）

口頸部に5mm前後の単篋あるいは半截竹管状工具を用い、水平方向に刻文を孤立的に数条施すもの。

II種 押し引き文（第19図69～70、第20図71～73）

横捺刻文と同様の施文具を用い、篋を器面から離すことなく押し引きながら文様を施すもの。第19図69～70、第20図71～73は3mm前後の単篋工具を用い、第19図70と第20図74は5mm前後の半截竹管状工具を用い文様を施している。

III種 爪形状刻文（第20図75～79）

半截竹管状工具をさらに半截したような先端部が僅かに弧状をなす単篋工具を用い、孤立的に刻文を数条施すもの。類例として久里原貝塚（1981）出土の土器が報告されている。

IV種 刺突文（第20図80～82）

単篋工具を用い口頸部に刺突文を数条施すもの。施文具の先端部の違いにより三角形状や円形の刻文が見られる。

V種 凸帯文（第21図83～89）

本種の土器は、前述のI～IV種に分類した単一文様を数条施し文様帯を構成する土器群と様相を異にするものである。本種の文様構成が大山式土器の型式概念に属するのか疑問がないわけではないが、伊平屋村久里原貝塚（1981）出土の大山式に類似の資料が存在することや、後述の肥厚口縁の土器群とも様相を異にすることから第3群V種と一応の分類を行った。口頸部に凸帯文を持ち、その上下に数種の施文具を用いた刻文や押し引き文などを施すものである。

第21図83と84は同一個体と考えられる資料であり、5つの文様帯が確認される。第1文様帯は口唇部外面に斜位（右下がり）の刻文。第2文様帯は先端幅が4mmの単篋工具を用いた斜位（右下がり）の刻文を1条。第3文様帯は凸帯文上に斜位（左下がり）の刻文。第4文様帯は第2文様帯と同様の刻文を2条施し、第5文様帯には僅かであるが横位の刻文が見られる。同図85～88の資料も凸帯文とその上下に叉状工具や単篋工具・半截竹管状工具など複数の施文具を用い、刻文や押し引き文を施す。同図89は胴部資料であるが、最下段の文様から本種に含まれるものと判断した。

第4類土器 室川式土器に比定される土器。

室川式土器は沖縄市字仲宗根原に所在する室川貝塚T-16・17地区出土の土器を標式とする。一般的に平口縁・平底の深鉢形をなす。室川式土器の最も大きな特徴は、口唇部を肥厚させ幅広く形成する点にある。文様は口唇部および口頸部に単篋工具・半截竹管状工具などを用い、横捺刻文や点刻文などを施す。

本類に属すると考えられる資料は、第21図90、第22図91に示した2点のみである。同図90の文様は不明瞭であるが、頸部に叉状工具を用いた縦位の点刻文が認められ、第22図91も同様の施文具を用いた横位の押し引き文を2条施し、それを区画するかのように縦位にも押し引き文が見られる。

第5類土器 カヤウチバンタ式土器に比定される土器。

カヤウチバンタ式土器は、国頭村カヤウチバンタ貝塚出土の土器を標式とする。当初の型式概念は植木鉢状に口縁部が肥厚する無文の土器であった（多和田,1956）が、大山貝塚や室川貝塚等の出土例により今日では有文土器も包括し扱われている。器形は平口縁で張りの弱い胴部をもつ平底の深鉢形をなす。文様は肥厚した有段口縁部に施文されるのが一般的である。

本遺跡からは3点の口縁部資料が出土しており、第22図92～94に示した。いずれの資料も肥厚した有段口縁部に3状の刻文を施すが、摩耗によるためなのか同図94の資料のように肥厚の弱いものも見られる。

その他の土器（第22図95～97、第23図98～105）

ここで扱う資料は、前述の第1類から第5類の分類に含まれない資料を一括して取り扱った。第22図95は凸帯文を有し、その上位に単篋工具を用い沈線による鋸歯文を施す。鋸歯文は第2類にみられる特徴であるが、第2類の鋸歯文が文様帯の最下段に施されるのに対し、95は文様帯の上位に施されている。類似する資料として賀川・多和田の報告（1959）に見ることができる。

第22図96・97は先端幅15mmの単篋工具を用いた押し引き文の上下に斜位の沈線を施す胴部資料である。類例資料として久里原貝塚出土の大山式土器（伊平屋村教育委員会編,1981）が挙げられるが、小破片のため分類を保留とした。

第23図98～100は無文の口縁部資料である。同図98は胴部から口縁部にかけ器厚が一定し、直に立ち上がる資料である。同図99は口縁部が肥厚し、同図100は頸部がすばまり口縁部が外反する無文資料である。

同図101～105は平底あるいは丸みを持つ底部資料であるが、第1類～第5類のいずれに属するものなのか不明である。

第2節 石器

今回の調査で出土した石器は、磨石片の1点のみである。第6層の集積遺構の近くから出土したものであり、石質は砂岩である。正面観から右側面と左側面上方に自然面を残すが、その他の面は全体的に研磨されている。中央部には浅く窪んだ敲打痕が残っている。残存部のサイズは、長さ13.5cm、幅13.7cm、厚さ8.2cm、重量1,515 gをなす。(第23図106)

参考文献

- 伊平屋村教育委員会編 1981 伊平屋村文化財調査報告書第1集『久里原貝塚』(沖縄)
- 伊藤慎二 1999「琉球縄文文化の基礎的研究」『國學院大學大学院研究叢書 文学研究科5』國學院大學大学院(東京)
- 伊是名貝塚学術調査団編 2001『伊是名貝塚—沖縄県伊是名貝塚の調査と研究—』勉誠出版(東京)
- 賀川光夫・多和田真淳 1959「沖縄宜野湾村大山貝塚調査概要」『文化財要覧1959年版』琉球政府文化財保護委員会
[再録 1978『沖縄文化財調査報告1956～1962』157頁 沖縄県教育委員会監修 那覇出版社(沖縄)]
- 松村 瞭 1920『琉球荻堂貝塚』東京帝国大学理学部 人類学教室研究報告 第3編 [復刻日本考古学文献集成 1983 第一書房(東京)]
- 沖縄考古学会編 1978『カラー百科シリーズ 石器時代の沖縄』新星図書(沖縄)
- 大山 柏 1922『琉球伊波貝塚発掘報告』[復刻日本考古学文献集成 1982 第一書房(東京)]
- 高宮廣衛 1974「いわゆるカヤウチバンタ式と宇佐浜式土器について」『沖縄国際大学文学部紀要』社会学科編2-1
[再録 1993『沖縄縄文土器研究序説』第一書房(東京)]
- 高宮廣衛 1978「沖縄諸島における新石器時代の編年(試案)」『南島考古第6号』11～22頁 沖縄考古学会(沖縄)
- 高宮廣衛・玉城朝健・平安秀子・東江千栄子 1978「室川貝塚第1～3次発掘調査概報」『冲国大考古2号』沖縄国際大学文学部考古学研究室(沖縄)
- 高宮廣衛・湖城清・嘉数卓・東江千栄子・玉城初子・阿利直治・玉城朝健 1980「室川貝塚第2～4次発掘調査概報」『冲国大考古4号』沖縄国際大学文学部考古学研究室(沖縄)
- 高宮廣衛・山内勝美・下地安弘 1981「室川貝塚第3～5次発掘調査概報」『冲国大考古5号』沖縄国際大学文学部考古学研究室(沖縄)
- 高宮廣衛 1980「伊波式土器と荻堂式土器」國分直一博士古希記念論集考古篇『日本民族文化とその周辺』新日本教育図書 [再録 1990『先史古代の沖縄』南島文化叢書12 第一書房(東京)]
- 多和田真淳 1956「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『文化財要覧1956年版』琉球政府文化財保護委員会 [再録 1978『沖縄文化財調査報告1956～1962』15頁 沖縄県教育委員会監修 那覇出版社(沖縄)]

表 5-1 土器観察一覧

図版 番号	分類	文様および器面調整	主な混和材 (鉱物・岩石片)	器面の色調	器厚 (mm)	出土 地点
第13図1 PL.7-1	第1類 Ⅰ種	山形突起の波頂部下に2条2組の縦位沈線で区画する。その左右には上段に2条1組の横位沈線。中段に同様の施文具を用い、横位を斜位の沈線を組み合わせ、羽状文状をなす。内外面ともにナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：にぶい橙 2.5YR6/4 内：赤 10R5/6	5~6.5	C-11 第5層
第13図2 PL.7-2	第1類 Ⅰ種	山形突起の波頂部下に2条2組の縦位沈線で区画する。その左右には上段に2条1組の横位沈線。中段に同様の施文具を用い、横位を斜位の沈線を組み合わせ、羽状文状をなす。内外面ともにナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート 千枚岩	外：にぶい赤 2.5YR5/4 内：明赤褐 2.5YR5/6	5~7.5	C-11 第5層
第13図3 PL.7-3	第1類 Ⅱ種	叉状工具による横位の連点文が2条認められる。内外面ともにナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：にぶい赤 5YR4/4 内：明赤褐 2.5R5/6	6.5~8	A-12 第6層
第13図4 PL.7-4	第1類 Ⅲ種	先端が扁平な単篋工具により横捺刻文を2条施し、山形頂部下にも縦位の刻文が2条認められる。内外面ともにナデ調整痕が見られる。	石英・長石	外：にぶい赤褐 2.5YR4/4 内：明赤褐 2.5YR5/6	7~8	B-11 第6層
第13図5 PL.7-5	第2類 ②種	瘤状突起部の外面に縦型の凹部を形成し、その下に単篋工具による押し引き文が2条認められる。胎土は脆く、外面はヘラ削り・ナデ調整痕。内面には指頭圧痕が残る。	石英・長石	外：明赤褐 5YR5/6 内：明赤褐 5YR4/6	6.5~14	A-12 第6層
第13図6 PL.7-6	第2類 ②種	瘤状突起部の外面に縦型の窪みを持つが、小破片のためその下位の文様については不明。内外面ともにナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：赤褐 2.5YR4/6 内：にぶい赤褐 2.5YR4/4	6.5~14	B-12 第6層
第13図7 PL.7-7	第2類 ②種	瘤状突起部の外面に縦型の窪みを持つが、小破片のためその下位の文様については不明。内外面ともにナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	内外：赤褐 2.5YR4/6	5~12	D-14 第6層
第13図8 PL.7-8	第2類 ②種	上記5と同様に瘤状突起部の外面に縦型の窪みを持ち、単篋工具による押し引き文が認められる。内外面ともにナデ調整が見られる。	石英 長石 チャート	内外：黒 7.5YR2/1	6~11	B-12 第6層
第13図9 PL.7-9	第2類 ②種	瘤状突起部の外面に縦型の窪みを持ち、その下位は叉状工具による連点文が認められる。胎土は脆く、外面はナデ、内面には刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：黒褐 2.5YR3/1 内：黒褐 7.5YR3/2	5~11	C-14 第6層
第13図10 PL.7-10	第2類 ③種a	瘤状突起部の肥厚が発達し、外面に平坦面を持つ。突起部とその下に、単篋工具を用い押し引き文を数条施す。内外面にはナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：黒褐 7.5YR3/2 内：赤褐 5YR4/6	6.5~14.5	A-13 第6層
第13図11 PL.7-11	第2類 ③種a	上記10と同様。外面はナデ、内面には刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：黒 10YR2/1 内：赤褐 2.5YR4/4	8~19	B-11 第6層
第13図12 PL.8-12	第2類 ③種a	瘤状突起部の肥厚が発達し、外面に平坦面を持つ。突起部とその下に、単篋工具を用い押し引き文を数条施す。内外面にはナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：黒 10YR1.7/1 内：にぶい赤褐 2.5YR4/4	7.5~16.5	不明

表 5 -2 土器観察一覧

図版 番号	分類	文様および器面調整	主な混和材 (鉱物・岩石片)	器面の色調	器厚 (mm)	出土 地点
第14図13 PL.8-13	第2類 ③種b	瘤状突起部の肥厚が弱く、外面に平坦面を持つ。口唇部と外面に又状工具を用い、連点文を施す。内外面にはナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：赤褐 5YR5/6 内：明赤褐 2.5YR5/6	6～10	A-13 第6層
第14図14 PL.8-14	第2類 ③種b	瘤状突起部の肥厚が弱く、外面の平坦面に又状工具を用い、点刻文を施す。内外面ともにナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：褐 1.5YR4/3	5.5～9.5	B-14 第6層
第14図15 PL.8-15	第2類 ③種b	瘤状突起部の外面および口唇部に単筵工具を用い、刺突文を施す。内外面ともにナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	内外：にぶい赤褐 2.5YR4/4	5～12.5	C-14 第6層
第14図16 PL.8-16	第2類 I 種	口頸部外面に又状工具を用いた横位の点刻文を4条施す。外面は磨滅が著しい。内面には刷毛目・ナデ・指頭圧痕が見られる。口径21.2cm	石英 長石 チャート	外：にぶい黄褐 10YR6/3 内：暗褐 7.5YR3/4	5～7	C-11 第6層
第14図17 PL.8-17	第2類 I 種	口頸部外面に又状工具を用いた横位の点刻文を2条施す。外面はナデ、内外面には刷毛目・ナデ調整痕が見られる。口径8.7cm	石英 長石 チャート 千枚岩	外：にぶい赤褐 5YR4/3 内：赤褐 5YR4/6	4～6	A-13 第6層
第14図18 PL.9-18	第2類 I 種	口頸部外面に又状工具を用いた横位の点刻文が2条認められる。外面は刷毛目・ナデ調整痕。内面にはナデ調整痕・指頭圧痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：赤褐 5YR4/6 内：赤褐 2.5YR4/6	5～6	B-15 第5層
第14図19 PL.9-19	第2類 I 種	口頸部外面に又状工具を用いた横位の点刻文が2条認められる。器面の磨滅が著しく不鮮明であるが、ナデ調整痕が僅かに見られる。口径＝10.3cm。	石英 長石 チャート	外：赤褐 2.5YR4/4 内：赤 10R4/6	6	B-13 第6層
第14図20 PL.9-20	第2類 I 種	小破片であるが、又状工具を用いた横位の点刻文が2条認められる。内外面にナデ調整痕が見られる。	石英・長石	内外：褐 7.5YR3/4	7～8.5	A-11 第6層
第14図21 PL.9-21	第2類 I 種	小破片であるが、又状工具を用いた横位の点刻文を施すものと考えられる。内外面には刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：褐 7.5YR3/4 内：灰褐 5YR4/2	4.5～5.5	B-15 第6層
第15図22 PL.9-22	第2類 II 種	又状工具を用い、点刻を連結させた連点文が2条認められる。胎土は脆く、内外面とも刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：にぶい黄褐 10YR5/2 内：にぶい赤褐 2.5YR4/3	5～6	B-14 第6層
第15図23 PL.9-23	第2類 II 種	又状工具を用い、点刻を連結させた連点文が3条認められる。内外面ともに刷毛目調整痕が見られる。	石英・長石	外：にぶい褐 7.5YR6/3 内：灰黄褐 10YR5/2	5.5～6	B-14 第6層
第15図24 PL.9-24	第2類 II 種	又状工具を用い、点刻を連結させた連点文が2条認められる。胎土は脆く、内外面とも刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート 千枚岩	外：褐 7.5YR4/3 内：褐 10YR4/4	5～8	C-14 第6層

表 5-3 土器観察一覧

図版 番号	分類	文様および器面調整	主な混和材 (鉱物・岩石片)	器面の色調	器厚 (mm)	出土 地点
第15図25 PL.9-25	第2類 Ⅱ種	叉状工具を用いた連点文が2条認められる。 内外面とも刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート 千枚岩	外：暗赤褐 5YR3/2 内：暗赤褐 5YR3/3	6～7.5	C-14 第6層
第15図26 PL.9-26	第2類 Ⅱ種	叉状工具を用いた連点文が2条認められる。 内外面ともナデ調整痕が見られる。	石英・長石	外：暗赤褐 2.5YR3/4 内：にぶい赤褐 2.5YR4/4	7.5～8	C-14 第6層
第15図27 PL.9-27	第2類 Ⅱ種	叉状工具を用いた連点文が4条認められる。 内外面ともにナデ調整痕が見られる。	石英・長石	外：褐 7.5YR4/4 内：褐 7.5YR4/3	5～6	B-11 第6層
第15図28 PL.10-28	第2類 Ⅱ種	叉状工具を用いた連点文が4条認められる。 内外面ともにナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：黒 7.5YR2/1 内：赤褐 2.5YR4/6	5～7	B-12 第6層
第15図29 PL.10-29	第2類 Ⅱ種	叉状工具を用いた連点文が4条認められる。 内外面ともにナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：暗赤褐 5YR3/3 内：にぶい赤褐 5YR4/4	5～6	A-11 第6層
第15図30 PL.10-30	第2類 Ⅱ種	叉状工具を用いた連点文が3条認められる。 外面はナデ、内面には刷毛目・ナデ調整痕 が見られる。	石英・長石	外：赤褐 5YR4/6 内：赤褐 2.5YR4/6	4.5～8	A-11 第6層
第15図31 PL.10-31	第2類 Ⅱ種	外器面の磨滅が著しいが、僅かに連点文が 2条施されるのが認められる。胎土は脆い。	石英・長石	内外：暗褐 10YR3/4	5～7	C-14 第6層
第15図32 PL.10-32	第2類 Ⅱ種	連点文が3条施されるが、2条目と3条目の 連点文はラインがくずれ鋸歯状をなす。胎 土は脆く、内外面は刷毛目・ナデ調整痕が 見られる。	石英 長石 チャート 千枚岩	外：褐 7.5YR4/4 内：にぶい赤褐 5YR4/4	5.5～7	A-13 第6層
第15図33 PL.10-33	第2類 Ⅱ種	第1文様帯は4条の連点文を施し、その下位 の第2文様帯に鋸歯文を施すが、孤立的に 施され連結しない。胎土は脆く、内外面と もナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート 千枚岩	内外：赤10R4/6 黒2.5Y2/1	4.5～7	C-14 第6層
第16図34 PL.10-34	第2類 Ⅱ種	第1文様帯は3条の連点文を施し、その下位 の第2文様帯に鋸歯文を施すが、孤立的に 施され連結しない。胎土は脆く、内外面と もナデ調整や工具による調整痕・指頭圧痕 が見られる。	石英 長石 チャート	内外：黒褐 10YR3/1	7～8	B-14 第6層
第16図35 PL.10-35	第2類 Ⅱ種	叉状工具による連点文と鋸歯文の文様構 成をなす。図面上では点刻文に見えるが、 第2類Ⅰ種の点刻文と比べ連点文的である ため本種に分類した。内外面ともナデ調整 痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：黒褐 10R3/2 内：赤褐 5YR4/6	5～8	B-13 第6層
第16図36 PL.10-36	第2類 Ⅱ種	不明瞭であるが、叉状工具を用いた連点文 を2条施し、その下に鋸歯文が見られる。内 外面には刷毛目・ナデ調整痕が見られ、内 面に指頭圧痕が残る。	石英 長石 チャート	外：黒褐 5YR3/1 内：にぶい赤褐 5YR4/4	6～7	A-12 第6層

表 5-4 土器観察一覧

図版 番号	分類	文様および器面調整	主な混和材 (鉱物・岩石片)	器面の色調	器厚 (mm)	出土 地点
第16図37 PL.10-37	第2類 Ⅱ種	叉状工具を用いた連点文と鋸歯文が施される。内外面にはナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：黒褐 10YR3/2 内：黒褐 7.5YR3/2	6~8	B-14 第6層
第16図38 PL.10-38	第2類 Ⅱ種	叉状工具を用いた連点文と鋸歯文が施される。外面にナデ調整、内面には刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：にぶい赤褐 5R4/4 内：明赤褐 2.5YR5/6	5~5.5	B-15 第6層
第16図39 PL.10-39	第2類 Ⅱ種	叉状工具による鋸歯文が施されるが、連結しない。上位の文様が連点文をなすのか不明であるが、推察にて本種に分類。内外面にはナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：赤 10R5/6 内：褐 7.5YR4/4	5.5~7	C-13 第6層
第16図40 PL.10-40	第2類 Ⅱ種	叉状工具による鋸歯文が施される。上位の文様種については不明。	石英 長石 チャート	内外：赤褐 2.5YR4/6	5.5~8	B-12 ? 層
第16図41 PL.10-41	第2類 Ⅱ種	叉状工具による鋸歯文が施される。上位の文様構成については不確かだが、連点文と推察し本種に分類。胎土は脆く、内外面には刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：黒褐 10YR3/2 内：暗赤褐 5YR3/3	8.5~9	C-14 第6層
第16図42 PL.10-42	第2類 Ⅱ種	連点文と鋸歯文の構成をなす。鋸歯文の間隔が密であり、連結しているように見える。内外面にはナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：にぶい赤褐 5YR4/4 内：明赤褐 2.5YR5/6	5.5~6	C-13 第6層
第16図43 PL.10-43	第2類 Ⅱ種	口頸部の文様は不確かであるが、僅かに連点文が確認され、その下に2~3mmの単筧工具を用いた鋸歯状の文様が見られる。内外面には刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 雲母	外：赤褐 5YR4/6 内：にぶい赤褐 5YR4/4	5.5~7	A-12 第6層
第17図44 PL.11-44	第2類 Ⅲ種	叉状工具を用いた中沈線が2条認められる。外面は磨滅が著しいが、内面にはハケ目・ナデ調整痕が残る。	石英 長石 千枚岩?	外：にぶい黄褐 10YR4/3 内：褐 7.5YR4/4	5~7	B-15 第6層
第17図45 PL.11-45	第2類 Ⅲ種	叉状工具を用いた2cm以上の長沈線が3条認められる。内外面とも磨滅が著しいが、外面には僅かにナデ調整が見られる。	石英 長石 チャート	外：灰褐 7.5YR4/2 内：黒褐 7.5YR3/2	6~7	B-11 第6層
第17図46 PL.11-46	第2類 Ⅲ種	不明瞭であるが、叉状工具を用いた沈線を施す。内外面とも磨滅が著しく、器面の調整痕は不明。	石英 長石 チャート	内外：灰10Y4/1 明黄褐 10YR6/6	4~7	B-12 第6層
第17図47 PL.11-47	第2類 Ⅳ種a	先端幅が約1.5mmの単筧工具を用いた押し引き文が3条認められる。外面は風化が著しいが、内面には刷毛目・ナデ調整痕が顕著に残る。	石英 長石 チャート	外：暗赤褐 5YR3/3 内：にぶい赤褐 2.5YR4/4	5~8.5	A-13 B-13 第6層
第17図48 PL.11-48	第2類 Ⅳ種a	先端幅が約2mmの単筧工具を用いた押し引き文が5条認められる。内外面とも磨滅が著しいが、僅かにナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：黒 2.5YR2/1 内：暗赤褐 5YR3/4	5.5~7	C-11 第7層

表 5-5 土器観察一覧

図版 番号	分類	文様および器面調整	主な混和材 (鉱物・岩石片)	器面の色調	器厚 (mm)	出土 地点
第17図49 PL.11-49	第2類 IV種a	第1文様帯には、先端幅が約2mmの単篋工具を用いた押し引き文が5条施され、その下位には菱形文と考えられる斜位の文様が認められる。外面は風化が著しいが、内面には刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：黒 5YR1.7/1 内：赤褐 5YR4/6	6~8	A-13 第6層
第17図50 PL.11-50	第2類 IV種a	先端幅が約1.5mmの単篋工具を用いた押し引き文が3条認められ、その下位に連結した鋸歯文を交差させた菱形文が見られる。内外面とも磨滅が著しいが、外面にナデ調整痕が残る。	石英 長石 チャート	外：にぶい赤褐 5YR5/3 内：明赤褐 2.5YR5/6	4.5~6	A-12 第6層
第17図51 PL.11-51	第2類 IV種a	先端幅が約1.5mmの単篋工具を用いた押し引き文が3条認められ、その下位に菱形文を施す。外面は磨滅が著しいが、内面には刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：黒 10YR2/1 内：赤褐 2.5YR4/6	5~6.5	A-13 第6層
第17図52 PL.11-52	第2類 IV種a	先端幅が約1.5mmの単篋工具を用いた押し引き文が2条認められ、その下位に菱形文を施す。外面は磨滅が著しいが、内面にはナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：黒褐 7.5YR3/2 内：明赤褐 5YR5/6	6~7	A-12 第6層
第17図53 PL.11-53	第2類 IV種a	先端幅が約2mmの単篋工具を用いた押し引き文が2条認められ、その下位に菱形文が施される。内外面とも風化が著しい。	石英・長石	内外：黒褐 10YR3/2	6~6.5	B-13 第6層
第18図54 PL.11-54	第2類 IV種a	先端幅が約2mmの単篋工具を用いた押し引き文が2条認められる。その下位に先端部が尖った工具を用い、斜位の沈線を施す。外面にはナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：赤褐 5YR4/6 内：にぶい赤褐 5YR4/4	5~6	B-11 第6層
第18図55 PL.11-55	第2類 IV種a?	上記54の文様構成に類似するが、横位の沈線の下位に単篋工具を用いた縦位の不揃いな沈線が施される。外面には僅かにナデ調整痕が見られるが、内面は風化が著しい。	石英 長石 チャート	外：赤褐 5YR4/6 内：明赤褐 5YR5/6	7	A-12 第6層
第18図56 PL.11-56	第2類 IV種b	他の資料に比べ、口縁部の外反が強い。口頸部に半截竹管状工具を用いた押し引き文が5条認められる。風化が著しいが、外面にはナデ、内面には刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英・長石	外：黒褐 10YR3/1 内：黒褐 10YR3/2	7~8	C-15 第7層
第18図57 PL.11-57	第2類 IV種b	半截竹管状工具を用いた押し引き文が3条認められるが、1条目と2条目の間にスペースを設けている。外面にはナデ調整痕が見られるが、内面は風化が著しい。 口径=15.0cm。	石英 長石 チャート	外：にぶい黄褐 10YR4/3 内：にぶい赤褐 5YR4/4	6.5~8	B-15 第6層
第18図58 PL.11-58	第2類 IV種b	上記57と同様の押し引き文が1条認められ、下位にスペースを持つとみられることや、断面観・器厚などから同一個体の可能性あり。内外面とも風化が著しい。	石英・長石	外：褐 10YR4/4 内：褐 7.5YR4/4	6~8	C-14 第6層
第18図59 PL.12-59	第2類 V種	文様は「沈線・刻み凸帯・鋸歯状の沈線」の3つの文様帯から構成される。第1文様帯と第3文様帯は叉状工具を用いて施される。内外面に刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：灰黄褐 10YR4/2 内：にぶい黄褐 10YR5/3	5.5~9	B-15 第6層
第18図60 PL.12-60	第2類 V種	文様構成は上記59と同様。内外面に刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：にぶい黄褐 10YR5/4 内：明赤褐 5YR5/6	5~9	C-15 第6層

表 5-6 土器観察一覧

図版 番号	分類	文様および器面調整	主な混和材 (鉱物・岩石片)	器面の色調	器厚 (mm)	出土地 地点
第18図61 PL.12-61	第2類 V種	文様構成は上記59・60と同様。内外面とも風化が著しいが、ハケ目調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：黒褐 10YR3/1 内：にぶい黄褐 10YR4/3	5～8.5	B-15 第6層
第19図62 PL.12-62	第3類 I種	先端幅が約5mmの単筵工具を用いた横捺刻文が3条施される。内外面には刷毛目調整痕が顕著に見られる。	石英 長石 チャート	外：黒褐10YR4/1～ にぶい褐色7.5YR5/4 内：明赤褐 5YR5/6	5～9	A-13 第6層
第19図63 PL.12-63	第3類 I種	上記62と同様の文様を施す。内外面とも風化が著しいが、内面に刷毛目調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：赤褐 5YR4/6 内：にぶい赤褐 5YR4/4	5.5～7	A-12 第6層
第19図64 PL.12-64	第3類 I種	先端幅が約5mmの単筵工具を用いた横捺刻文が3条施されるが、内外面とも風化が著しい。	石英 長石 チャート	外：赤褐 5YR4/8 内：明赤褐 5YR5/6	5.5～7.5	A-13 第6層
第19図65 PL.12-65	第3類 I種	押捺刻文が3条認められる。内外面とも風化が著しいが、外面に刷毛目調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：暗赤褐 5YR3/3 内：赤褐 5YR4/6	5～7	A-12 第6層
第19図66 PL.12-66	第3類 I種	押捺刻文が2条認められる。内外面にナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：灰褐 7.5YR5/2 内：にぶい黄褐 10YR5/4	6～8	A-12 第6層
第19図67 PL.12-67	第3類 I種	5mm幅の単筵工具を用いた横捺刻文が3条認められる。内外面とも風化が著しいが、僅かに刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：明赤褐 5YR5/6 内：にぶい褐 7.5YR5/4	5～7.5	A-12 第6層
第19図68 PL.12-68	第3類 I種	先端幅が約5mmの単筵工具を用いた横捺刻文が2条認められる。外面はナデ、内面には刷毛目調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：黒褐10YR3/1、 にぶい褐7.5YR5/4 内：明赤褐 5YR5/6	5.5～7.5	A-12 第6層
第19図69 PL.13-69	第3類 II種	3mm幅の単筵工具を用いた押し引き文が3条施される。外面には刷毛目・ナデ調整痕が見られるが、内面は風化が著しい。	石英 長石 チャート 千枚岩	外：にぶい赤褐 5YR5/4 内：明黄褐 10YR6/6	6～7	B-14 第6層
第19図70 PL.13-70	第3類 II種	4mm幅の半截竹管状工具を用いた押し引き文が2条施される。外面に刷毛目・ナデ調整痕が見られるが、内面は風化が著しい。	石英 長石 チャート	外：赤褐 5YR4/6 内：黒褐 10YR3/2	6～8	A-12 第6層
第20図71 PL.13-71	第3類 II種	3mm幅の半截竹管状工具を用いた押し引き文が4条認められる。内外面とも風化が著しい。	石英 長石 千枚岩	内外：褐 7.5YR4/4	8～8.5	C-14 第6層
第20図72 PL.13-72	第3類 II種	3mm幅の単筵工具を用いた押し引き文が3条認められ、内外面にはナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：にぶい赤褐 5YR4/4 内：褐 7.5YR4/4	6～6.5	B-14 第6層

表 5-7 土器観察一覧

図版 番号	分類	文様および器面調整	主な混和材 (鉱物・岩石片)	器面の色調	器厚 (mm)	出土 地点
第20図73 PL.13-73	第3類 Ⅱ種	3mm幅の単筵工具を用いた押し引き文が4条みとめられるが、3条目と4条目の間隔が広がる。内外面には刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：にぶい赤褐 2.5YR4/4 内：暗赤褐 5YR3/4	5～6	C-14 第6層
第20図74 PL.13-74	第3類 Ⅱ種	4mm幅の半截竹管状工具を用いた押し引き文が3条認められる。内外面にナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：にぶい赤褐 5YR4/3 内：にぶい褐 7.5YR5/4	7～8	B-12 第6層
第20図75 PL.13-75	第3類 Ⅲ種	先端部が僅かに弧状をなす単筵工具を用いた刻文が3条認められる。内外面にはナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	内外：黒褐 10YR3/1	5.5～6.5	C-14 第6層
第20図76 PL.13-76	第3類 Ⅲ種	上記75と同様の施文具を用いるため、爪形状の刻文をなす。刻文は3条施され、内外面にはナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：明赤褐 5YR5/6 内：にぶい赤褐 5YR4/4	7～8	B-12 第6層
第20図77 PL.13-77	第3類 Ⅲ種	爪形状の刻文が3条施され、外面には刷毛目・ナデ調整痕が見られるが、内面は風化が著しい。	石英 長石 チャート	外：褐 7.5YR4/4 内：赤褐 5YR4/6	7.5～9	A-12 第6層
第20図78 PL.13-78	第3類 Ⅲ種	爪形状の刻文が1条認められるが、施文が弱く不明瞭。内外面にはナデ調整痕が見られる。	石英・長石	外：にぶい赤褐 5YR5/4 内：にぶい赤褐 5YR4/4	6～7	B-16 第6層
第20図79 PL.13-79	第3類 Ⅲ種	爪形状の刻文が2条認められるものの、78と同様に施文が弱く不明瞭。内外面ともナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート 千枚岩	外：暗褐 7.5YR3/3 内：暗赤褐 5YR3/4	7	B-16 第6層
第20図80 PL.13-80	第3類 Ⅳ種	先端部の尖った単筵工具を用いた刺突文が4条施される。外面はナデ、内面には刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	内外：にぶい黄褐 10YR4/3	8～9	B-14 第6層
第20図81 PL.13-81	第3類 Ⅳ種	上記80と同様の施文具を用いた刺突文が4条認められ、内外面ともナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：明褐 7.5YR5/6 内：暗褐 10YR3/3	6～9	C-14 第6層
第20図82 PL.13-82	第3類 Ⅳ種	刺突文が3条認められるが、上記の80・81と異なり先端部が丸みをおびた施文具を用いている。内外面ともナデ調整痕が見られる。	石英 長石 雲母	外：にぶい黄褐 10YR5/4 内：浅黄 2.5Y7/4	6.5～7	C-14 第6層
第21図83 PL.14-83	第3類 Ⅴ種	単筵工具を用い、数種の刻文を施す。凸帯文を含め5つの文様帯が認められる。内外面にはナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：灰褐 7.5YR4/2 内：褐 7.5YR4/3	6～7	B-14 第6層
第21図84 PL.14-84	第3類 Ⅴ種	文様構成、器形、器厚から上記83と同一個体と考えられる。外面はナデ調整。内面には刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート 千枚岩	外：にぶい黄褐 10YR5/3 内：にぶい褐 7.5YR5/3	6～7	B-14 第6層

表 5-8 土器観察一覧

図版 番号	分類	文様および器面調整	主な混和材 (鉱物・岩石片)	器面の色調	器厚 (mm)	出土 地点
第21図85 PL.14-85	第3類 V種	刻み凸帯文の上下に又状工具を用いた点刻が認められる。内面に刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート 千枚岩	外：灰褐 7.5YR4/2 内：灰褐 7.5YR5/2	4.5~5	B-14 第6層
第21図86 PL.14-86	第3類 V種	小破片であるが、刻み凸帯文の上位に又状工具による点刻文が認められ、上記85と同一個体と考えられる。内面に刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート 千枚岩	内外：褐 7.5YR4/3	4.5~8.5	A-14 第6層
第21図87 PL.14-87	第3類 V種	刻み凸帯文の上下に半截竹管状工具を用いた押し引き文が認められる。内外面ともに刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート 千枚岩	外：褐 7.5YR4/3 内：にぶい褐 7.5YR5/3	4.5~8	A-14 第6層
第21図88 PL.14-88	第3類 V種	刻み凸帯文の上下に半截竹管状工具を用いた押し引き文が認められ、上記87と同一個体と考えられる。内外面ともに刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート 千枚岩	外：褐 7.5YR4/3 内：にぶい褐 7.5YR5/3	4~8	A-14 第6層
第21図89 PL.14-89	第3類 V種	文様帯の最下段に半截竹管状工具を用いた押し引き文が見られることから、上記88-89の同一個体と考えられる。内外面には、刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英・長石	外：にぶい赤褐 5YR4/3 内：褐 7.5YR4/3	4.5~7	A-14 第6層
第21図90 PL.14-90	第4類	口縁部が肥厚し、外反する。又状工具を用いた押し引き文が見られる。外面には刷毛目、内面にはナデ調整痕が見られる。口径=22.6cm	石英 長石 チャート	外：にぶい赤褐 2.5YR4/4 内：赤褐 5YR4/6	5~8	A-12 第6層
第22図91 PL.14-91	第4類	肥厚口縁部が外反し、又状工具を用いた押し引き文が見られる。内外面の風化が著しく、調整痕不明。口径=24.1cm	石英 長石 チャート	外：赤褐 2.5YR4/6 内：赤褐 2.5YR4/8	7~10	B-12 第6層
第22図92 PL.14-92	第5類	口縁肥厚部に単筵工具を用いた刻文を3条施す。外面はナデ、内面には刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	内外：褐 10YR4/6	6~8	C-14 第6層
第22図93 PL.14-93	第5類	上記92と同様に口縁肥厚部に刻文を3条施す。内外面にナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：にぶい赤褐 5YR4/4 内：暗赤-ブ 2.5YR3/3	7~9	B-16 第5層
第22図94 PL.14-94	第5類	上記92-93と同類の土器であるが、口縁部の肥厚が弱い。外面は磨滅・風化が著しく、内面にはナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：にぶい赤褐 2.5YR4/4 内：明黄褐 10YR6/8	6~7	B-16 第6層
第22図95 PL.15-95	類不明	凸帯文を有し、その上位に単筵工具を用いた長沈線を2条を施し、鋸歯状文を構成する。内外面とも刷毛目・ナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：暗褐 10YR3/3 内：暗赤褐 5YR3/3	6~13	C-15 第6層
第22図96 PL.15-96	類不明	有文胴部資料。1.5mm幅の押し引き文の下に斜沈線を対称に施す。内外面にナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：赤褐 2.5YR4/5 内：赤褐 2.5YR4/8	5~6	B-13 第6層

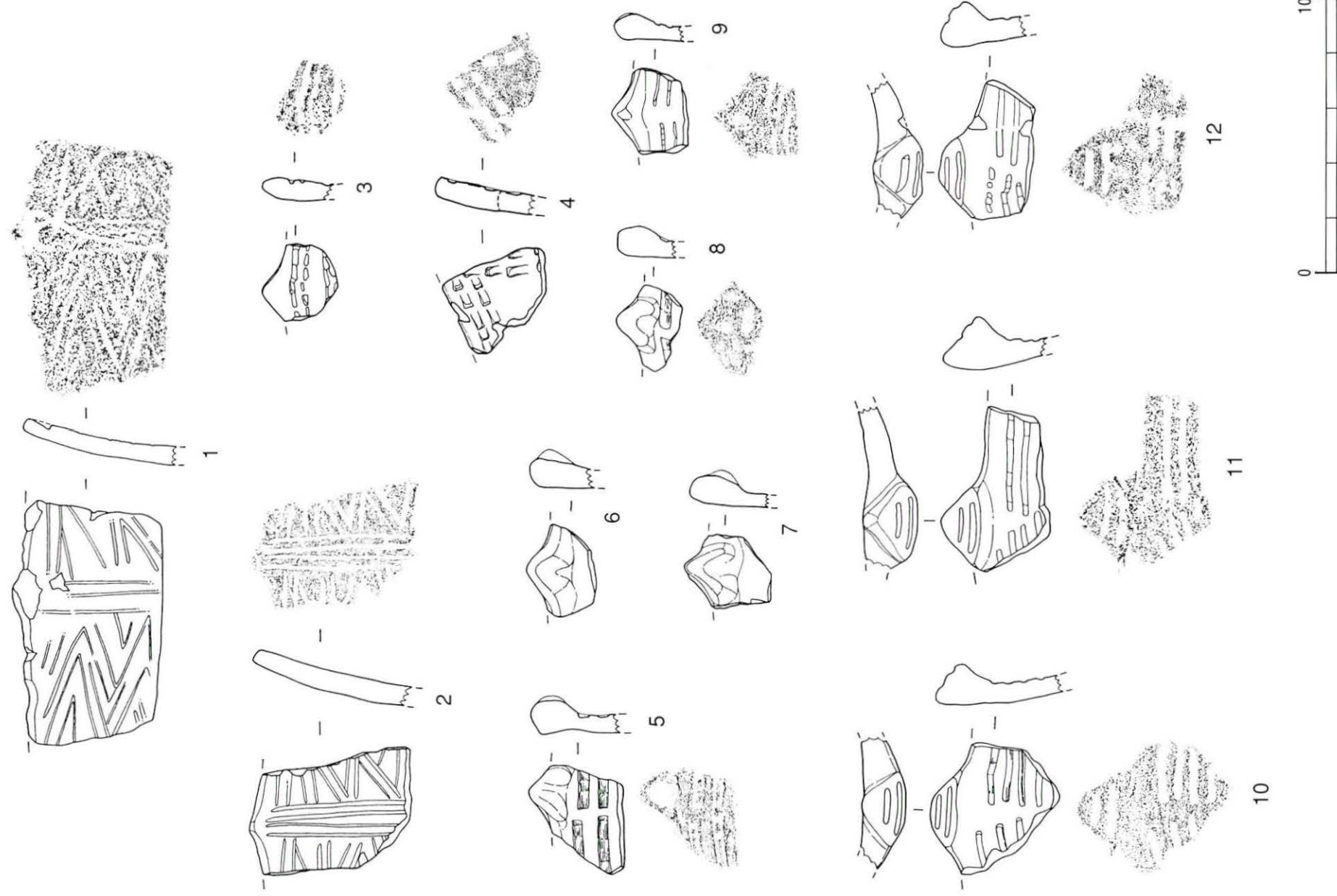
表 5 -9 土器観察一覧

図版 番号	分類	文様および器面調整	主な混和材 (鉱物・岩石片)	器面の色調	器厚 (mm)	出土 地点
第22図97 PL.15-97	類不明	有文胴部資料。1.5mm幅の押し引き文の上下に斜沈線を対称に施す。内外面にナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：明赤褐 2.5YR5/6 内：赤 10YR4/6	4～5	A-12 第6層
第23図98 PL.15-98	類不明	無文口縁部資料。内外面ともにナデ調整、指頭圧痕が見られる。	石英 長石 チャート	外：にぶい褐 7.5YR5/3 内：にぶい橙 7.5YR6/4	5～6	C-11 第7層
第23図99 PL.15-99	類不明	無文肥厚口縁部資料。内外面にはナデ調整痕が見られる。	石英 長石 チャート	内外：にぶい褐 7.5YR5/4	8～15	C-15 第6層
第23図100 PL.15-100	類不明	口縁部が外反する無文土器。内外面には刷毛目・ナデ調整痕および指頭圧痕が見られる。口径＝10.3cm。	石英 長石 チャート	外：灰褐 7.5YR5/2 内：にぶい赤褐 10YR4/2	5～7	B-14 第6層
第23図101 PL.15-101	類不明 底部	平底資料。外面にナデ調整痕が見られる。底径＝4.3cm。	石英 長石 チャート	外：にぶい赤褐 5YR4/4 内：赤褐 5YR4/6	11.5～8	B-13 第6層
第23図102 PL.15-102	類不明 底部	平底資料。内底面には刷毛目調整痕が顕著に見られる。底径＝7.2cm。	石英 長石 チャート	外：にぶい赤褐 2.5YR4/4 内：赤褐 2.5YR4/4	10～12	B-13 第6層
第23図103 PL.15-103	類不明 底部	平底資料。内底面に刷毛目調整痕が見られる。底径＝4.4cm。	石英 長石 チャート	外：にぶい赤褐 5YR4/4 内：褐 10YR4/4	6～10	C-14 第6層
第23図104 PL.15-104	類不明 底部	底径＝5.2cm。	石英 長石 チャート	内外：赤褐 2.5YR4/6	10～13	B-13 第6層
第23図105 PL.15-105	類不明 底部	底径が短く、丸みを持つ。外面にはナデ調整痕が見られる。底径＝3.2cm。	石英 長石 チャート	外：灰黄褐 10YR4/2 内：にぶい赤褐 2.5YR4/3	6.5～12	B-12 第6層

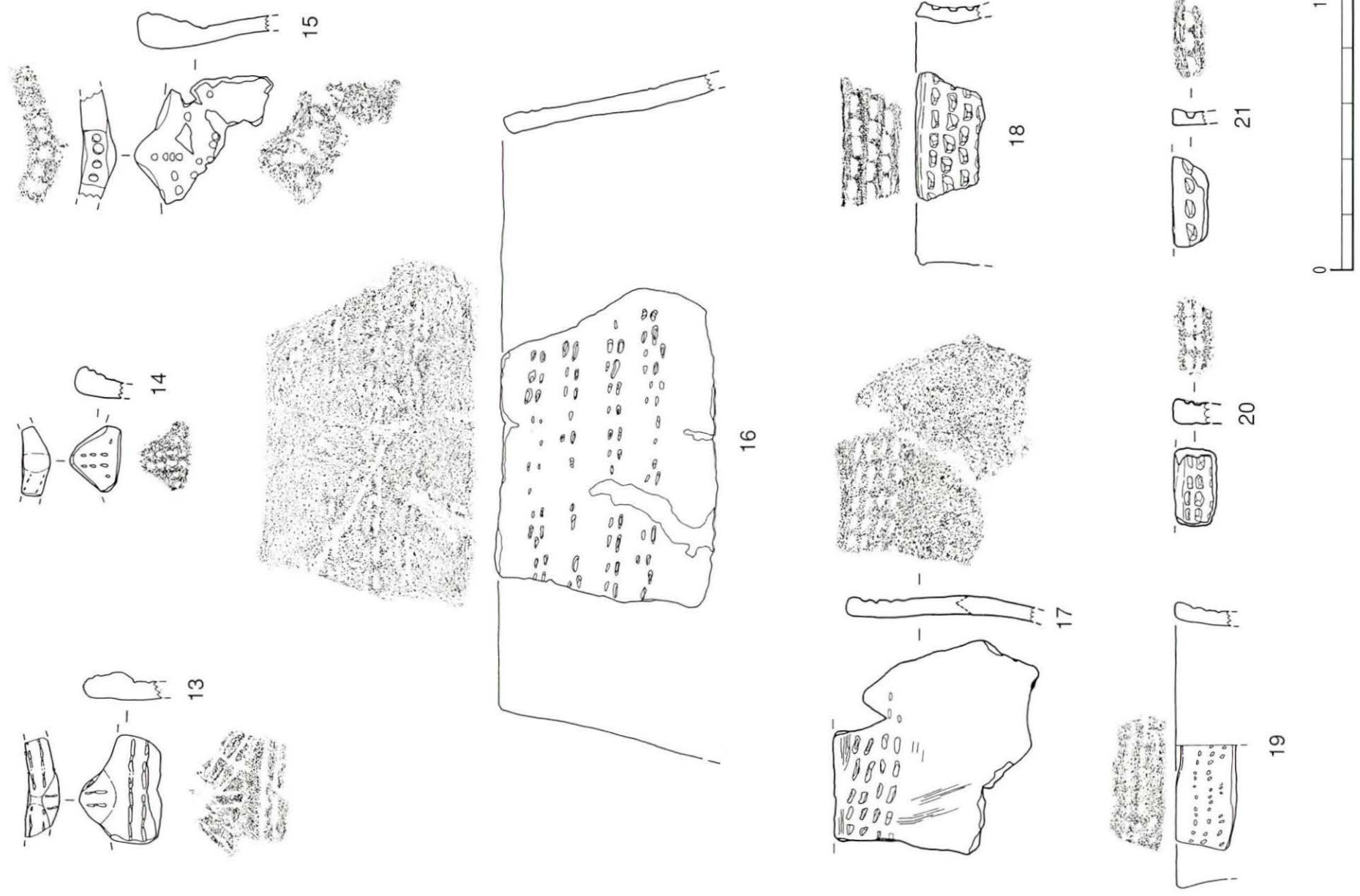
※1 土器観察一覧表中の「主な混和材（鉱物・岩石片）」については、大城逸朗氏（沖縄県立石川高等学校教諭）に同定して戴いた。

※2 土器の色調については、下記の文献を用い肉眼での識別を行った。

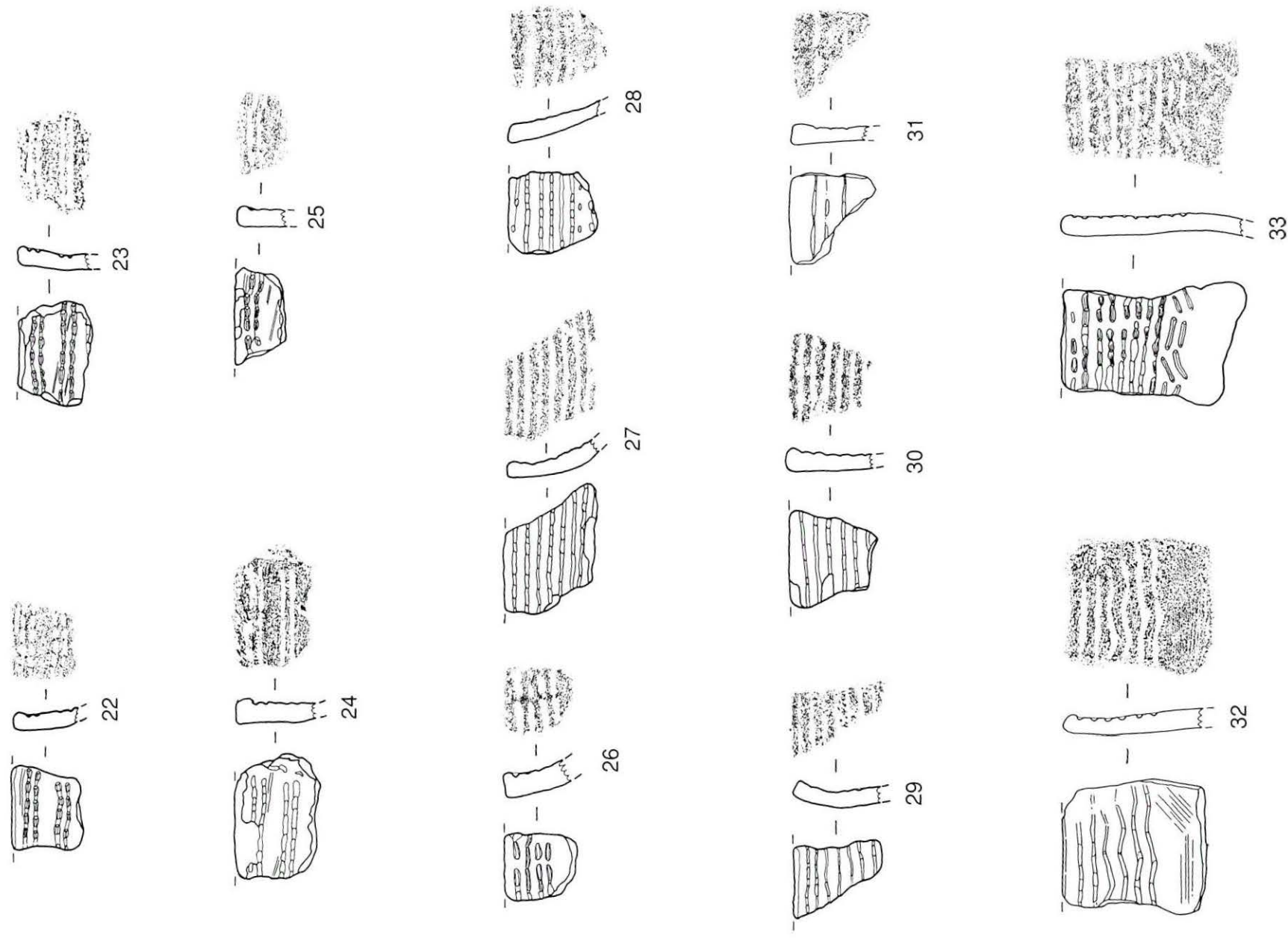
小山正忠・竹原秀雄編 2002『新版標準土色帖2002年版』日本色研事業株式会社（東京）



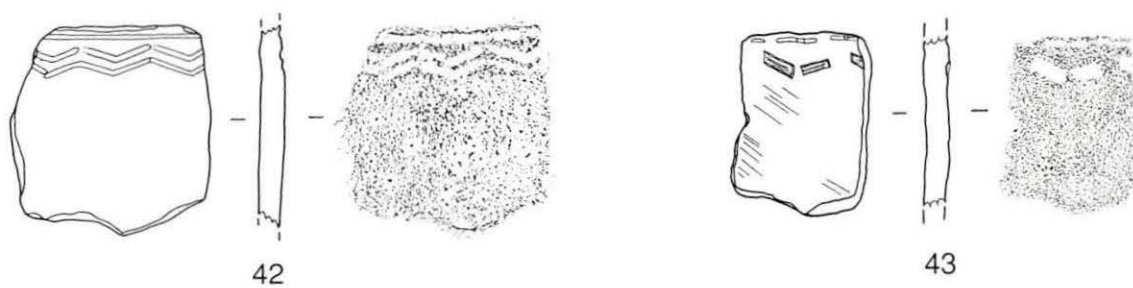
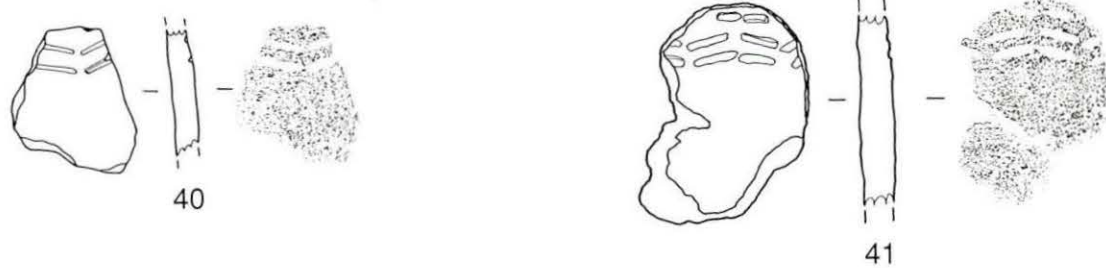
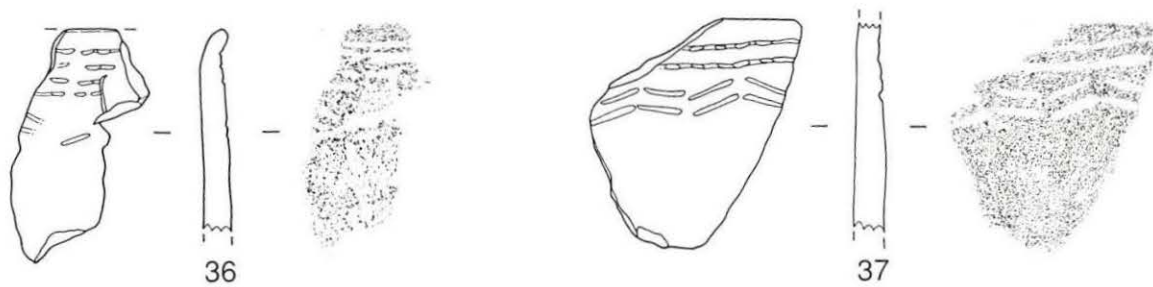
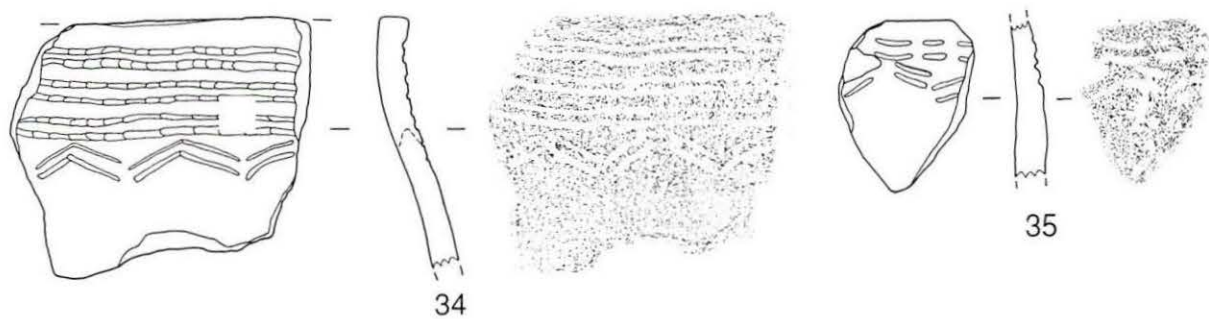
第13図 第1類土器 (1~4)、第2類土器 瘤状突起部 (5~12)



第14図 第2類土器 瘤状突起部 (13~15)、第2類Ⅰ種土器 (16~21)

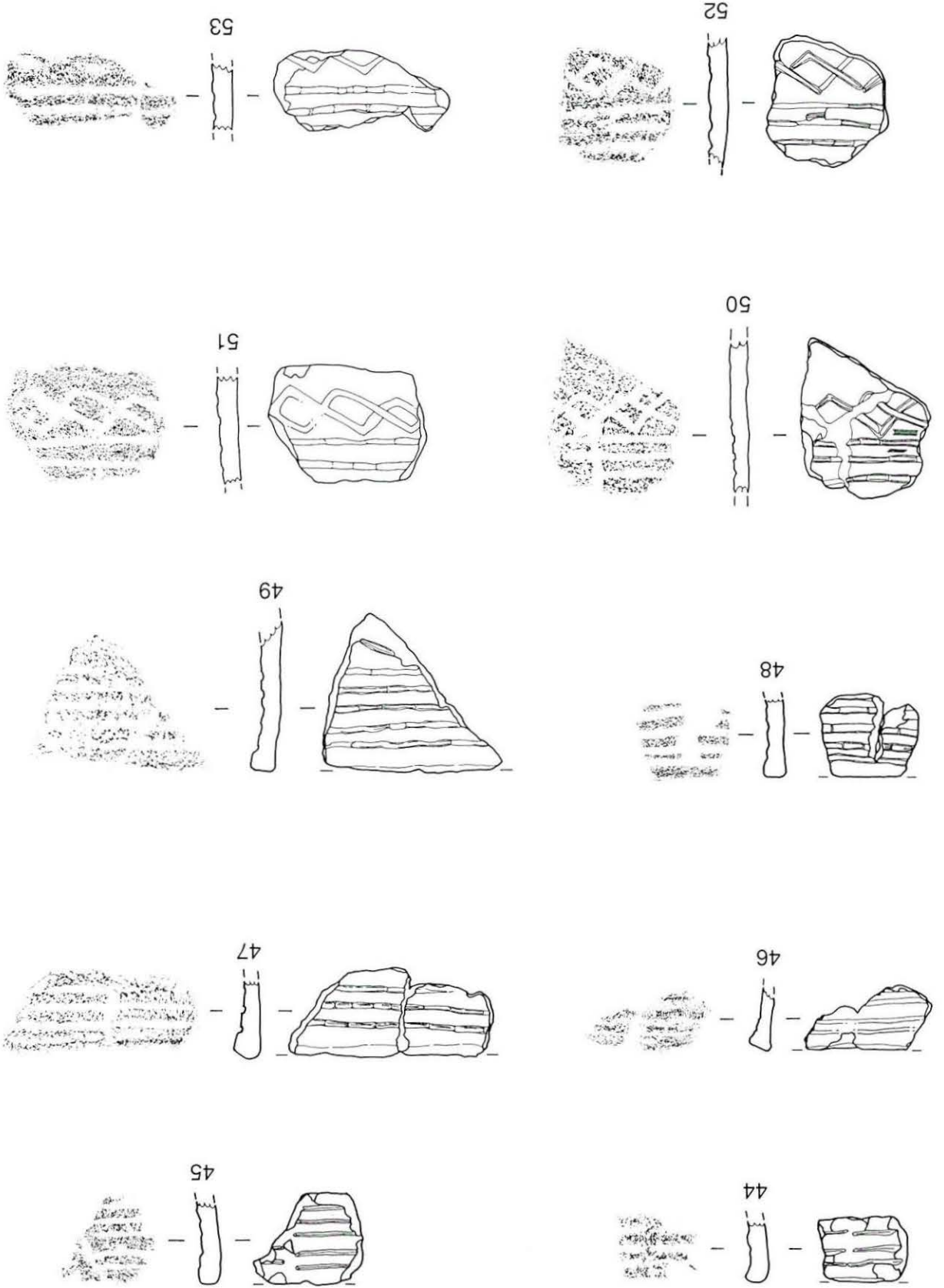


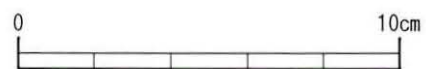
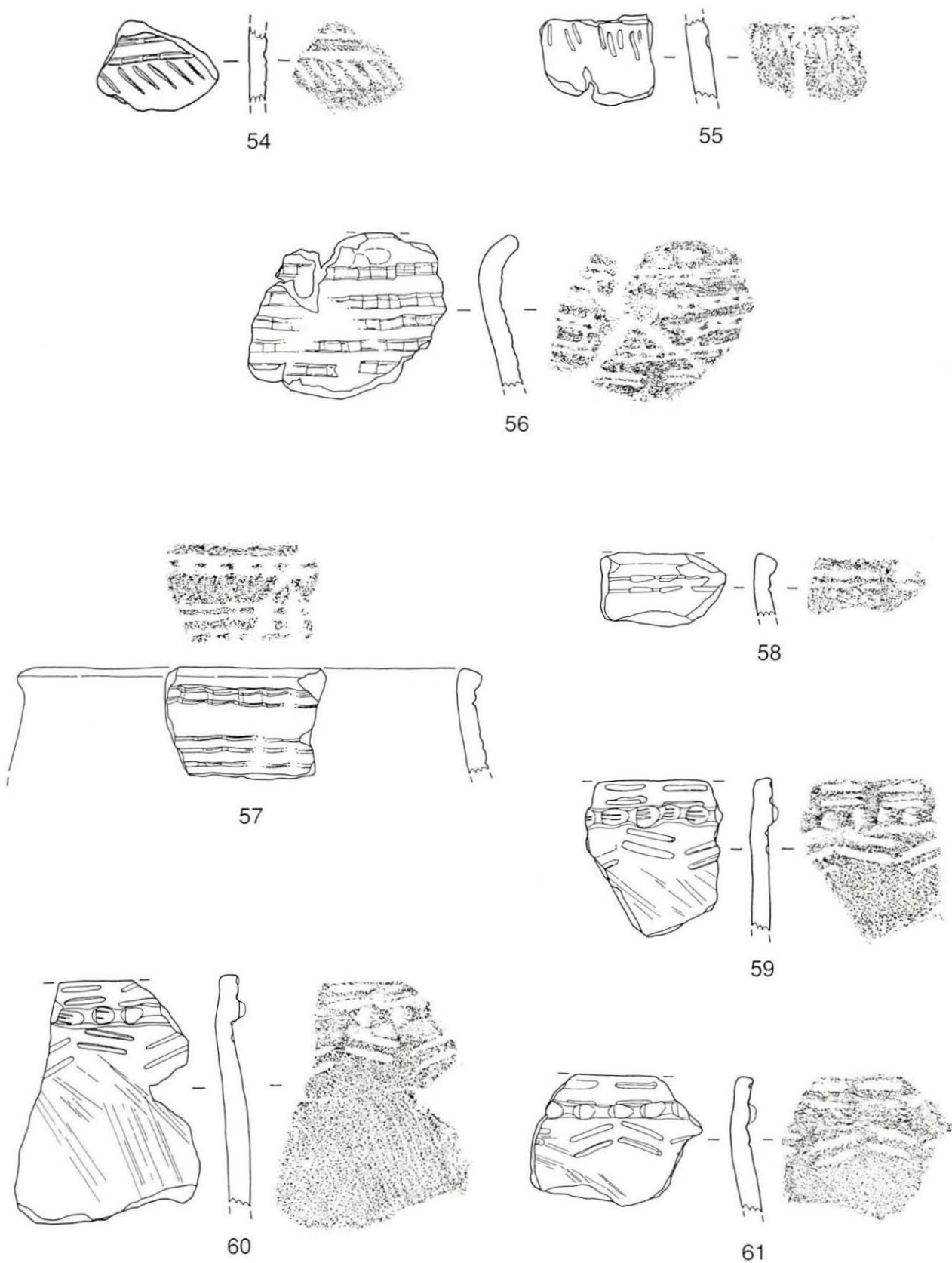
第15図 第2類II種土器 (22~33)



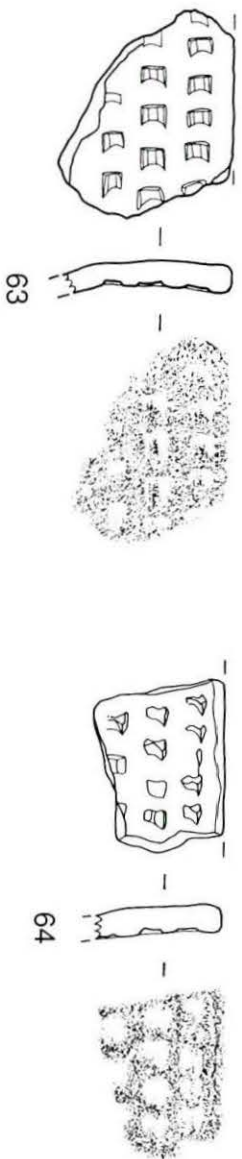
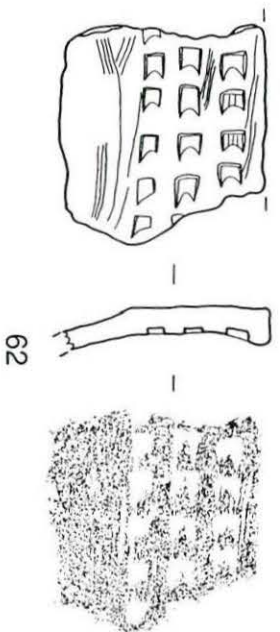
第16図 第2類II種土器 (34~43)

第17図 第2類Ⅲ種土器 (44~46)、第2類Ⅳ種土器 (47~53)

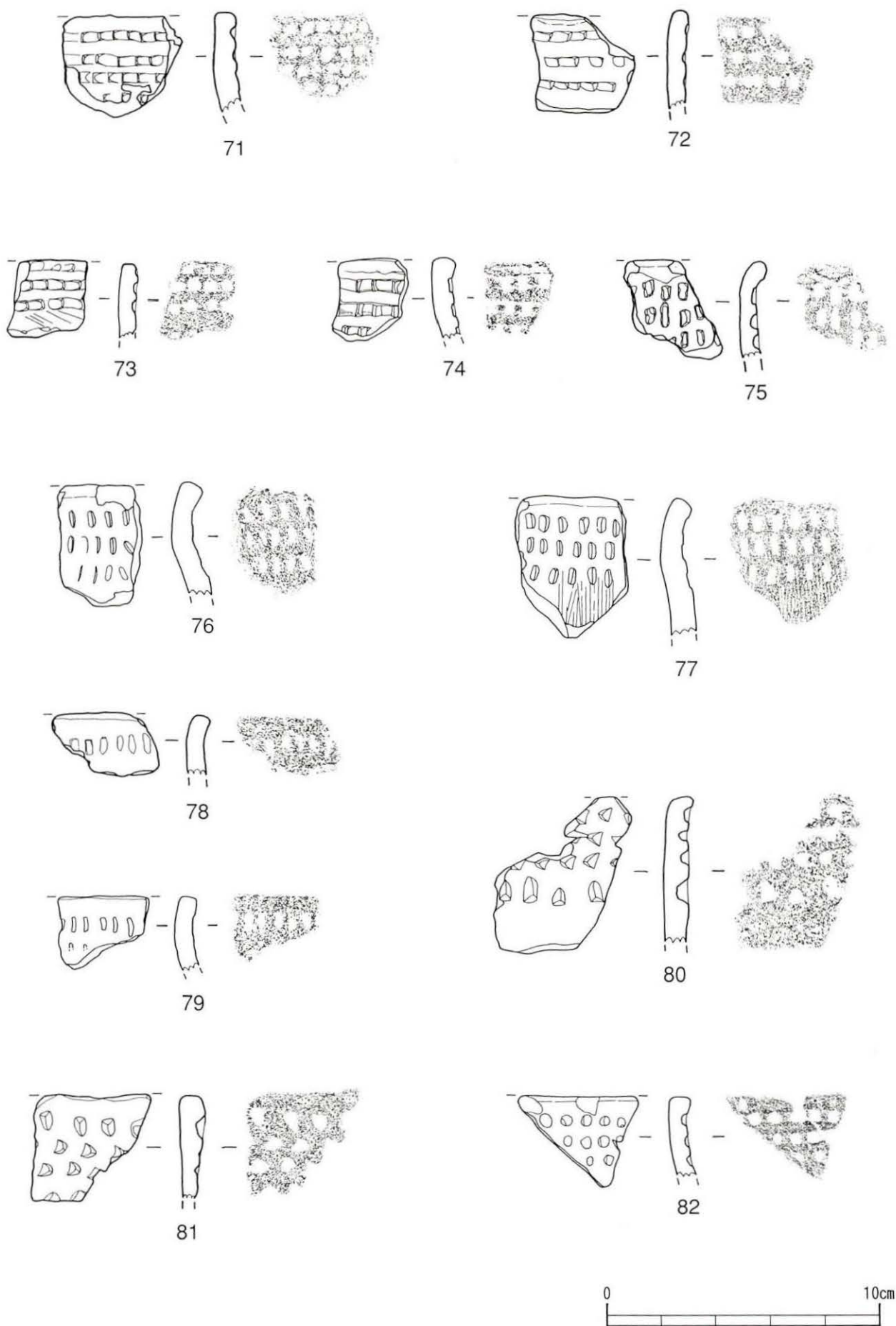




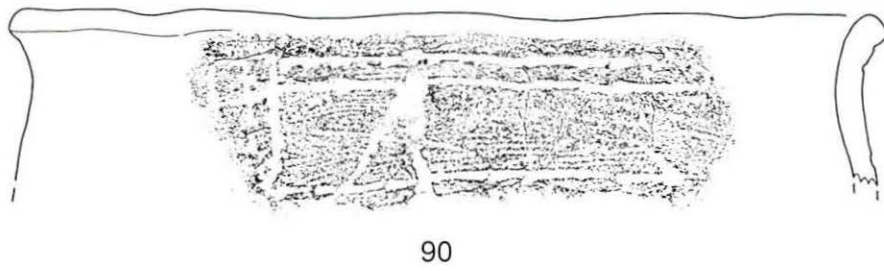
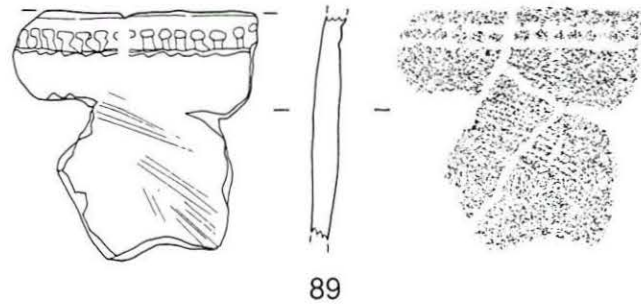
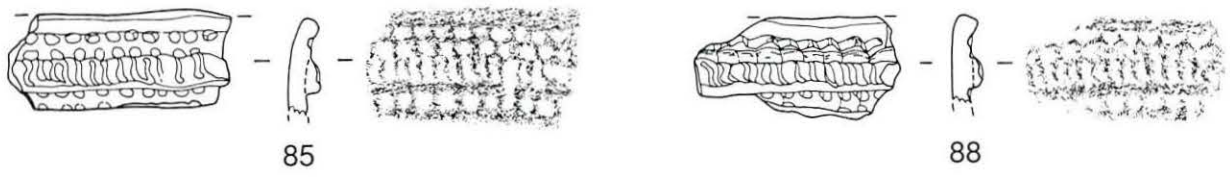
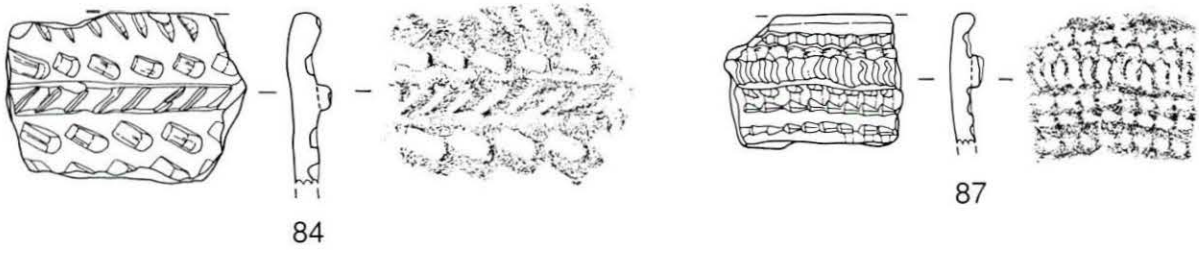
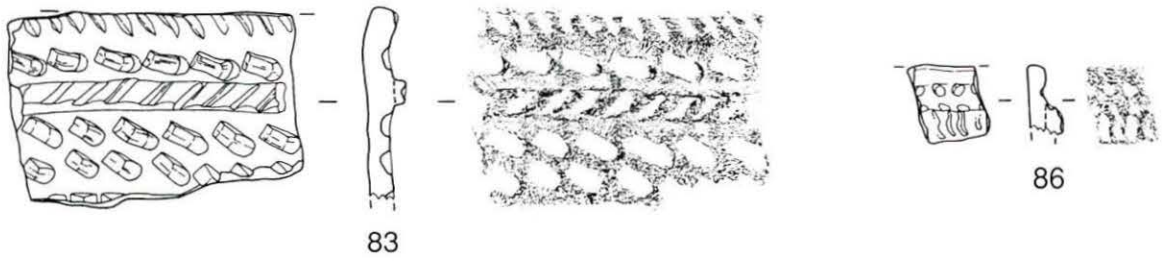
第18図 第2類Ⅳ種土器 (54~58)、第2類Ⅴ種土器 (59~61)



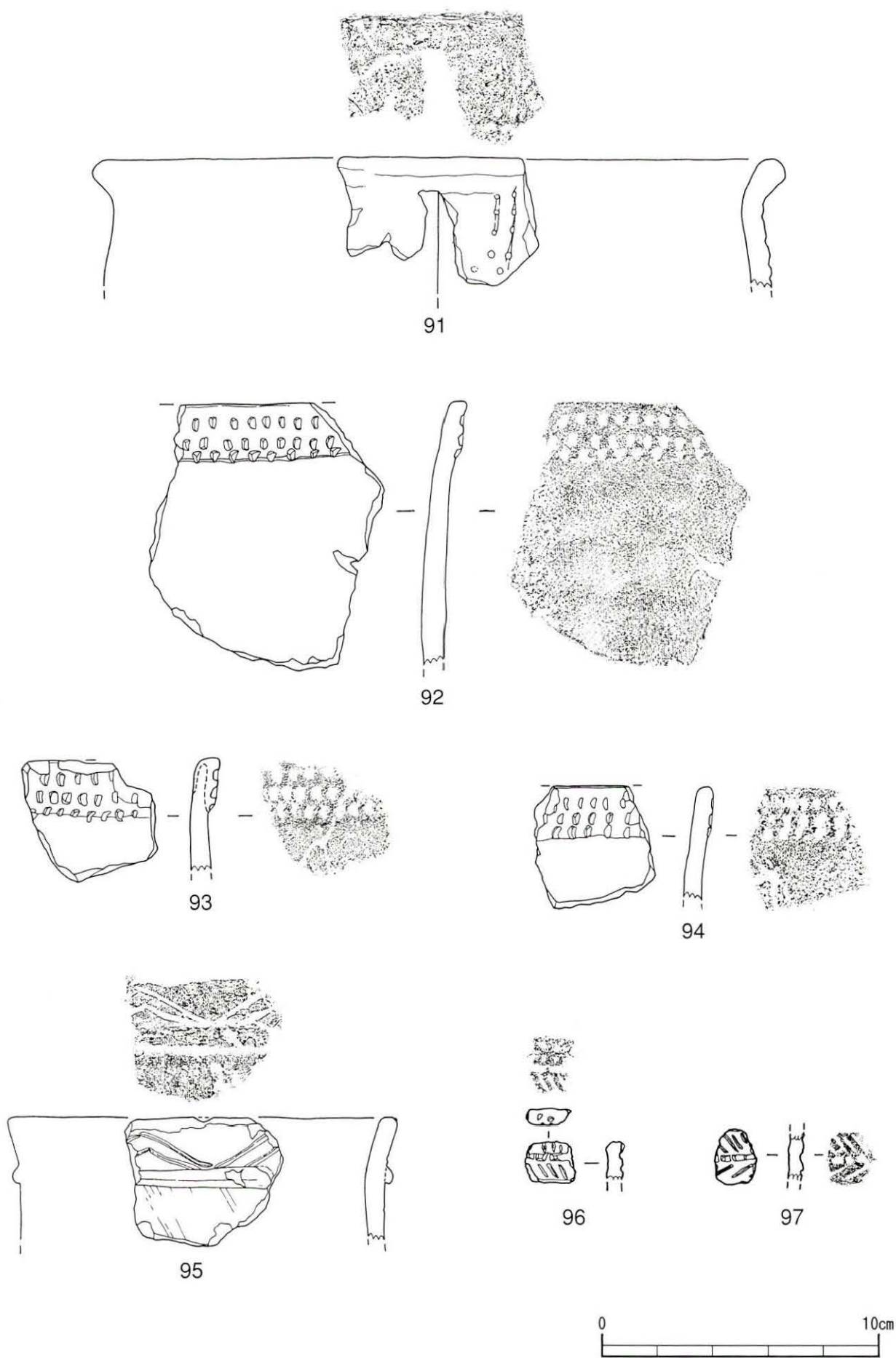
第19図 第3類Ⅰ種土器 (62~68)、第3類Ⅱ種土器 (69・70)



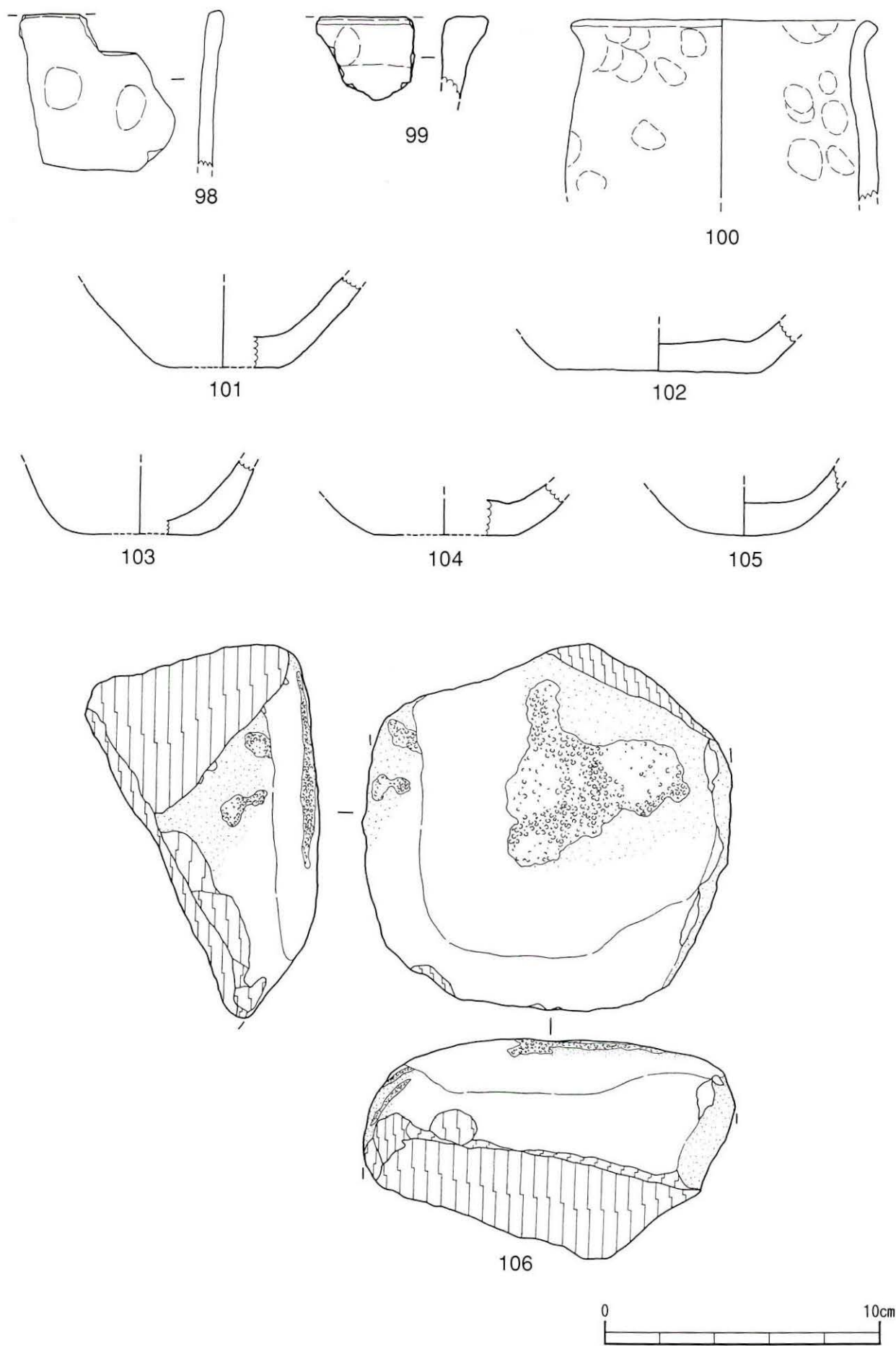
第20図 第3類Ⅱ種土器（71～74）、第3類Ⅲ種土器（75～79）、第3類Ⅳ種土器（80～82）



第21図 第3類V種土器（83～89）、第4類土器（90）



第22図 第4類土器 (91)、第5類土器 (92~94)、類不明土器 (95~97)



第23図 類不明土器 (98~100)、底部資料 (101~105)、石器 (106)

第Ⅵ章 総 括

今回の部瀬名南遺跡発掘調査は、市道・部瀬名線道路改良事業に伴う緊急発掘調査として実施されたものである。本遺跡は2000年に実施された部瀬名貝塚（国道部分）の調査に続き、翌年の2001年に調査が行われたわけであるが、1999年に実施された部瀬名貝塚の範囲確認を目的とした試掘調査までは遺跡としての存在が確認されておらず、試掘調査に際して新たに発見された遺跡である。

調査区は丘陵地の裾野に位置し、背後の谷間からは小川が流れているため、調査区への流水を防ぐための鋼矢板の設置作業から開始した。その後、1層の客土部分を除去し、旧地表面の2層から手掘りによる調査を進めた。2層・3層からは近世から現代にかけての遺物が出土したが、攪乱を受けており遺物の出土数も僅かであることから今回の報告では省略した。遺物包含層は6層を中心とし、5層の下位、7層の上位からも土器の出土がみられた。6層を主体に検出された土器群は、萩堂式・大山式土器が多数を占め、少数派として伊波式・室川式・カヤウチバンタ式土器がみられることから沖縄貝塚時代前期または高宮暫定編年Ⅳ期に位置づけられると考えられる。「第Ⅴ章 出土遺物」ではできるだけ多くの口縁部および有文資料の掲載に努めた結果、105点の土器資料と石器1点の報告となった。本遺跡の特徴として、土器以外の遺物が少ない点が挙げられる。石器は磨石片1点のみであり、通常これら人工遺物にともなうであろう貝類の出土が全く見られなかった。その他に、6層以下の層位において埋没林が検出されたが、人工遺物でないことから自然科学分析を委託した。自然科学分析結果の詳細な報告については「附章 自然科学分析」に委ねるが、埋没林の樹種同定結果からはサキシマスオウノキ・サガリバナ・ハマボウ節の3種類の広葉樹が確認されており、その他の分析結果も併せて当時の遺跡周辺の植生・立地環境が推測されている。

現在名護市内における遺跡の総数は、部瀬名南遺跡を含め79遺跡（遺物散布地を含む）を数えている。そのほとんどが沖縄貝塚時代後期からグスク時代・古琉球・近世の遺跡であるのに対し、沖縄貝塚時代中期以前の遺跡は10遺跡に止まる。遺跡の増加数を見ると、1982年の分布調査報告では70遺跡であったものが約20年後の現在では9遺跡増加していることになる。今回の部瀬名南遺跡も1979年から1981年の分布調査では確認されなかった遺跡である。これは分布調査が当時の開発予定地を優先して行った結果であることも要因の1つであろうが、比較的新しい沖縄貝塚時代後期以降の遺跡が表面調査で確認されやすいことに対し、沖縄貝塚時代中期以前の遺跡が地中深くに包蔵されているため確認されなかったことも示唆される。部瀬名南遺跡の発見例から今後の調査においても沖縄貝塚時代中期以前の遺跡が新たに発見される可能性があると考えられる。

最後に、本遺跡の発掘調査から資料整理・報告書作成について指導・助言を戴きました諸先生方、ならびに関係機関の方々に感謝を申し上げ結びとします。

参考文献

- 名護市教育委員会編 1982 名護市文化財調査報告-4『名護市の遺跡（2）』分布調査報告（沖縄）
- 名護市教育委員会編 1996『部瀬名貝塚』ブセナリゾート開発に伴う緊急発掘調査報告（沖縄）
- 名護市教育委員会編 2001 名護市文化財調査報告-14『部瀬名貝塚』国道58号・部瀬名線道路改良事業に伴う緊急発掘調査報告書（沖縄）



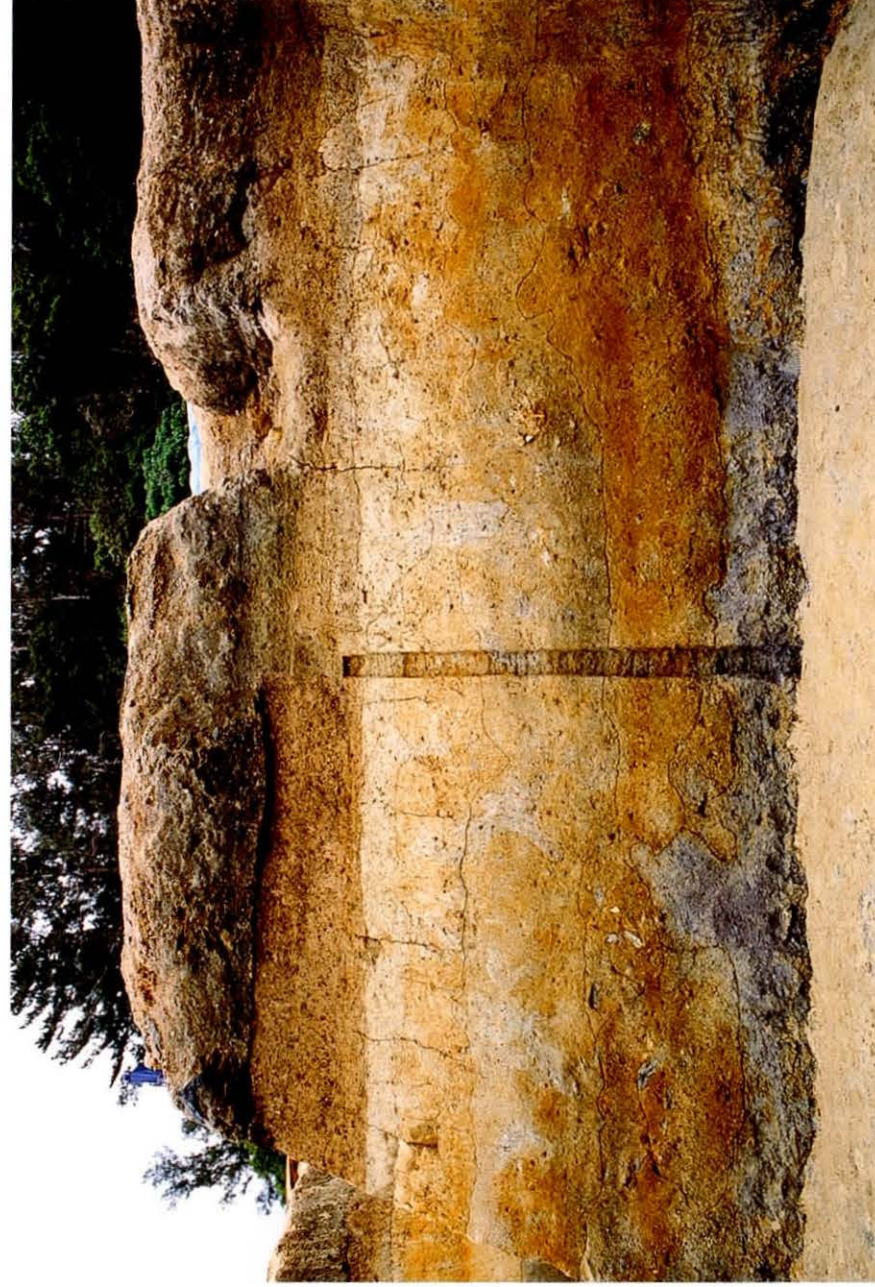
1. 部瀬名南遺跡遠景



2. B-13グリット第6層検出集石遺構



3. 集石遺構半截状況



4. C-13グリット東側断面図及び土壌サンプル採取状況



5. 集石遺構断面



6. B-11グリット東側断面



7. B-16グリット東側断面



8. C-13グリット南側断面



9. A・B-15グリット北側断面及び礫出土状況



10. C-15グリット北側断面



11. D・E-14グリット北側断面



12. B-15・16グリット東側断面



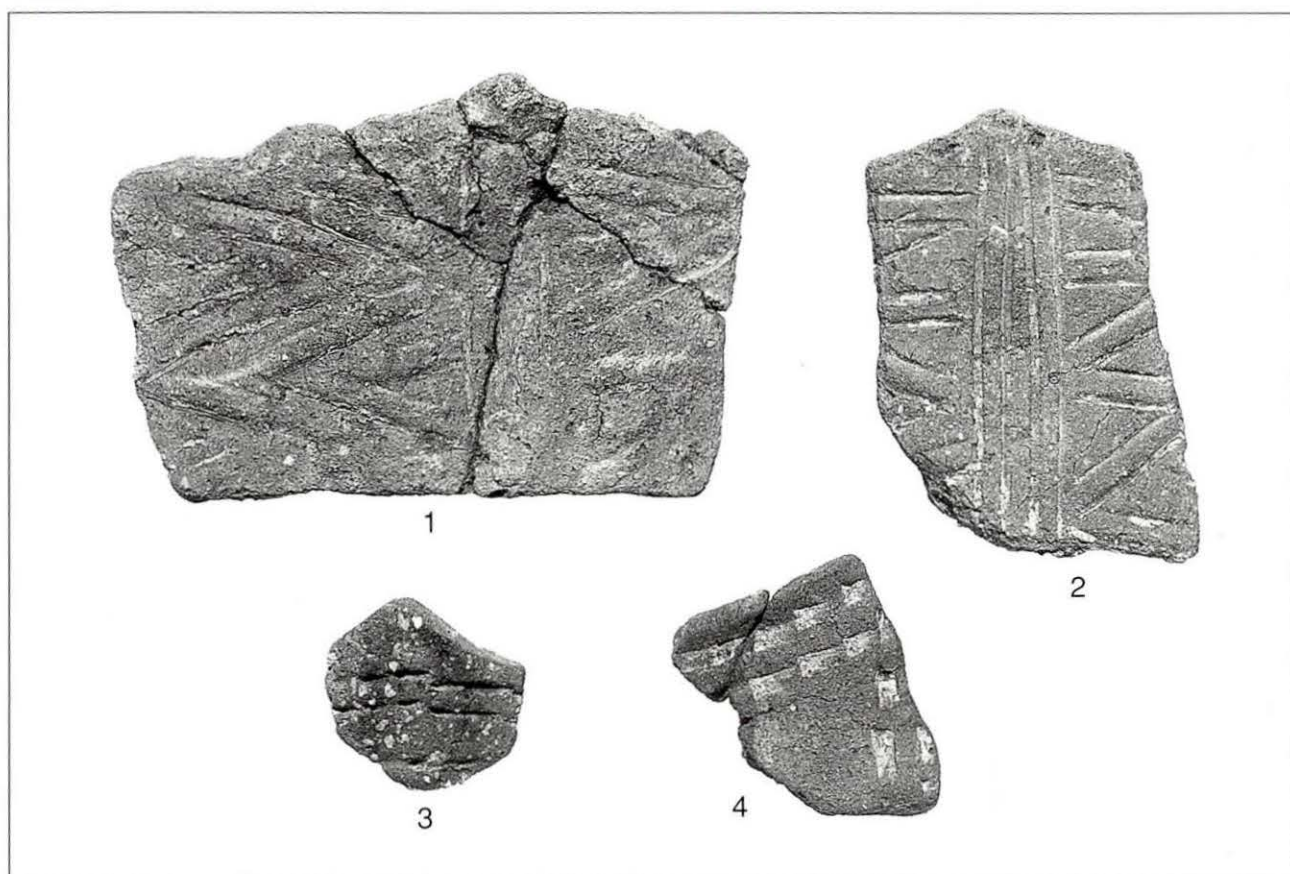
13. 発掘調査風景



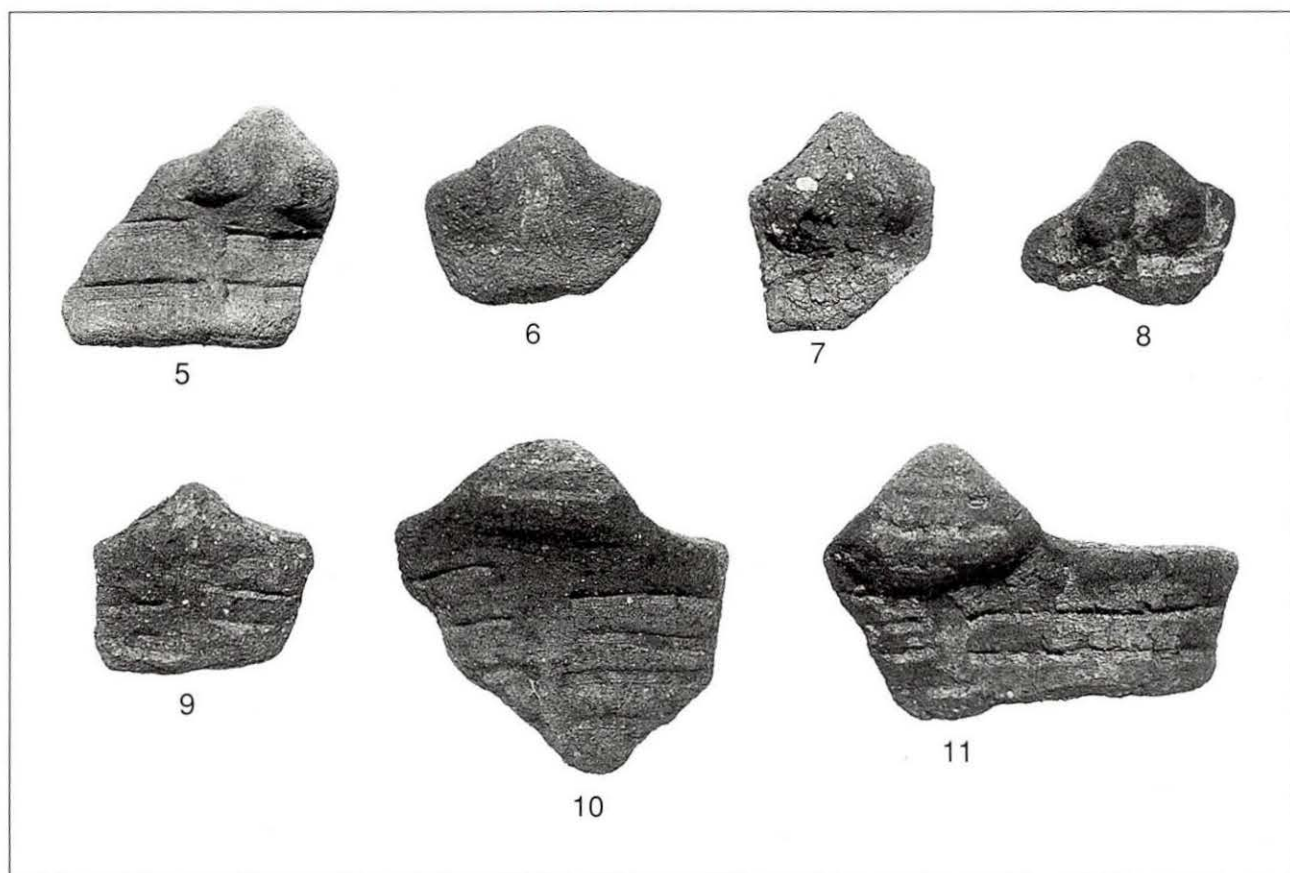
14. 第6層土器出土状況



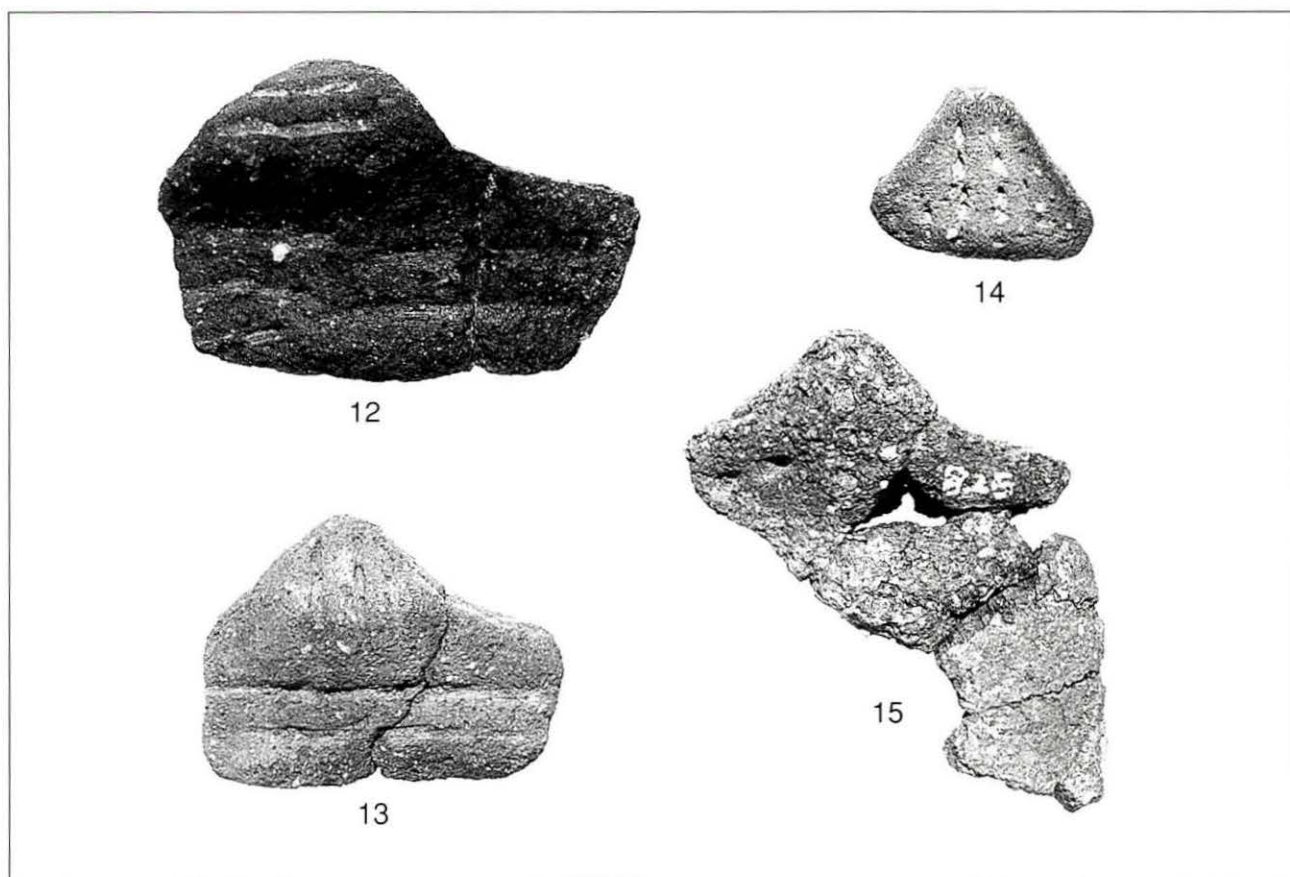
15. 発掘調査区域鳥瞰



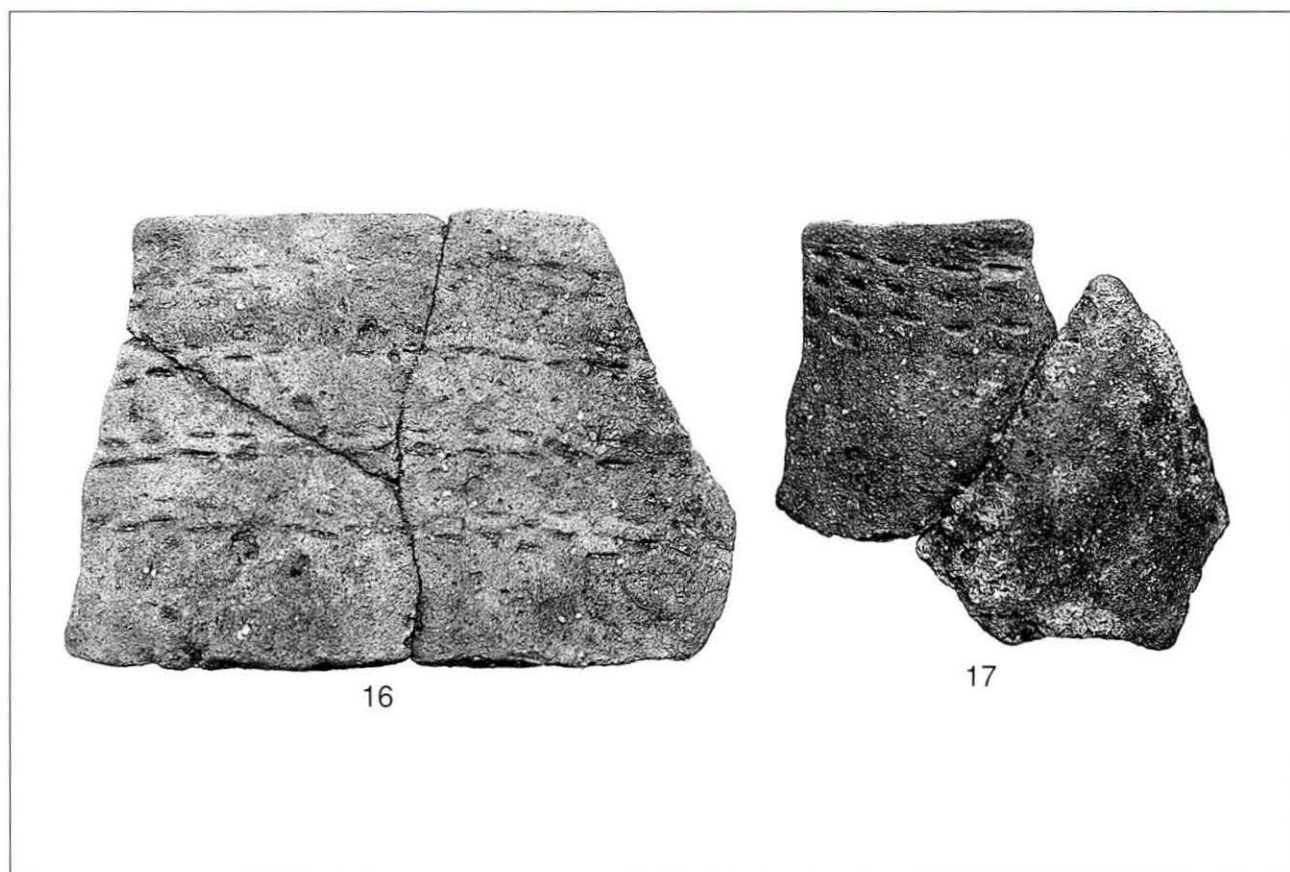
第1類土器 (1~4)



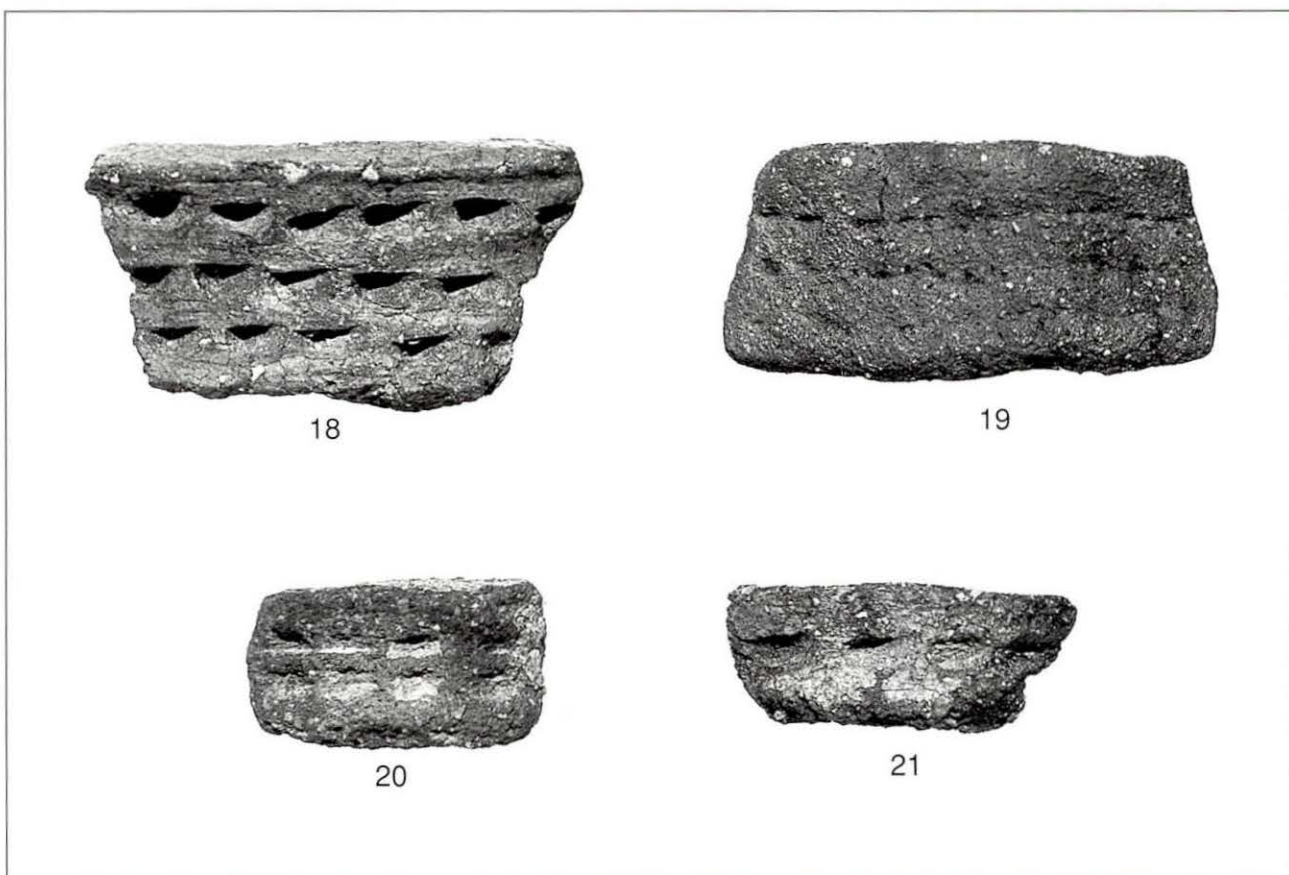
第2類土器 瘤状突起部 (5~11)



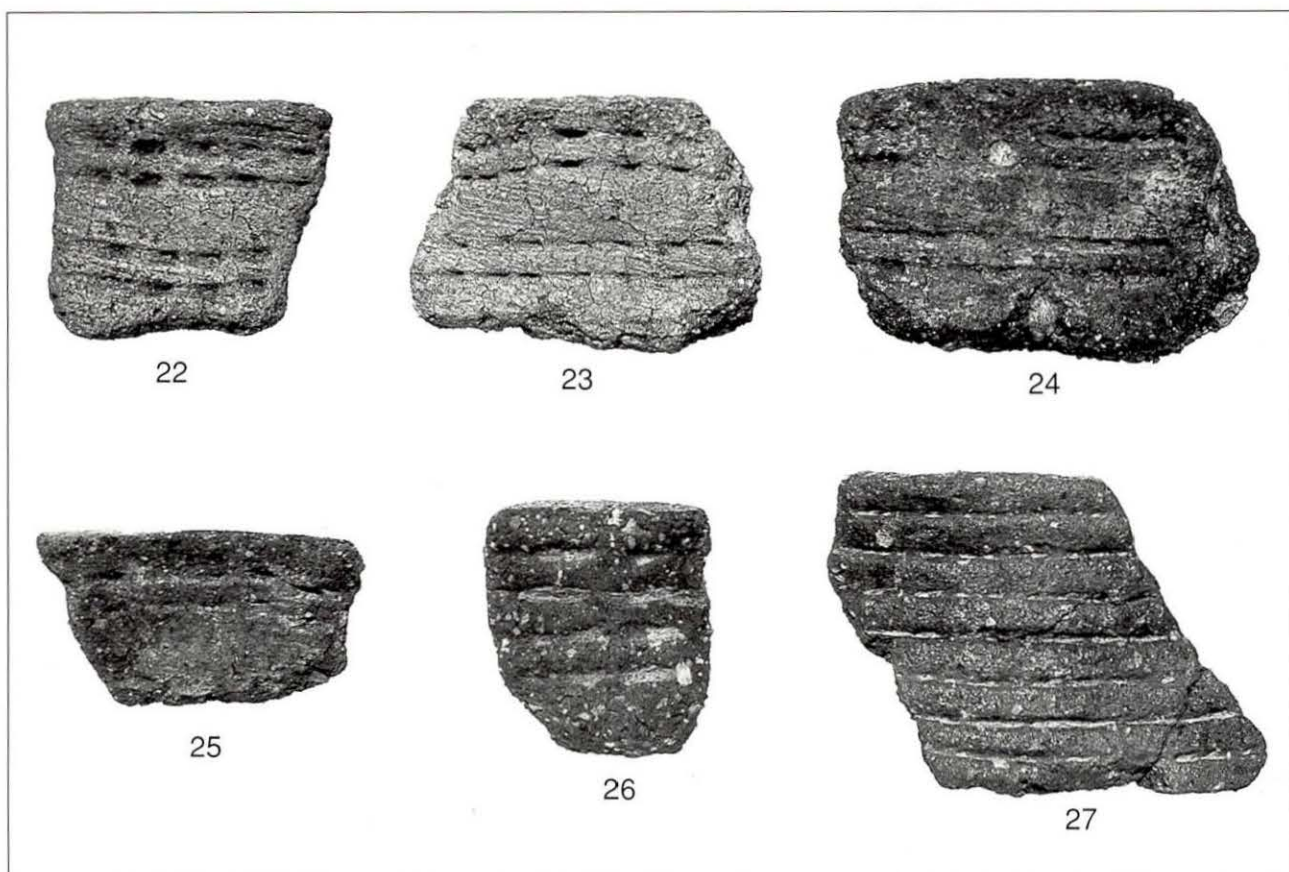
第2類土器 瘤状突起部 (12~15)



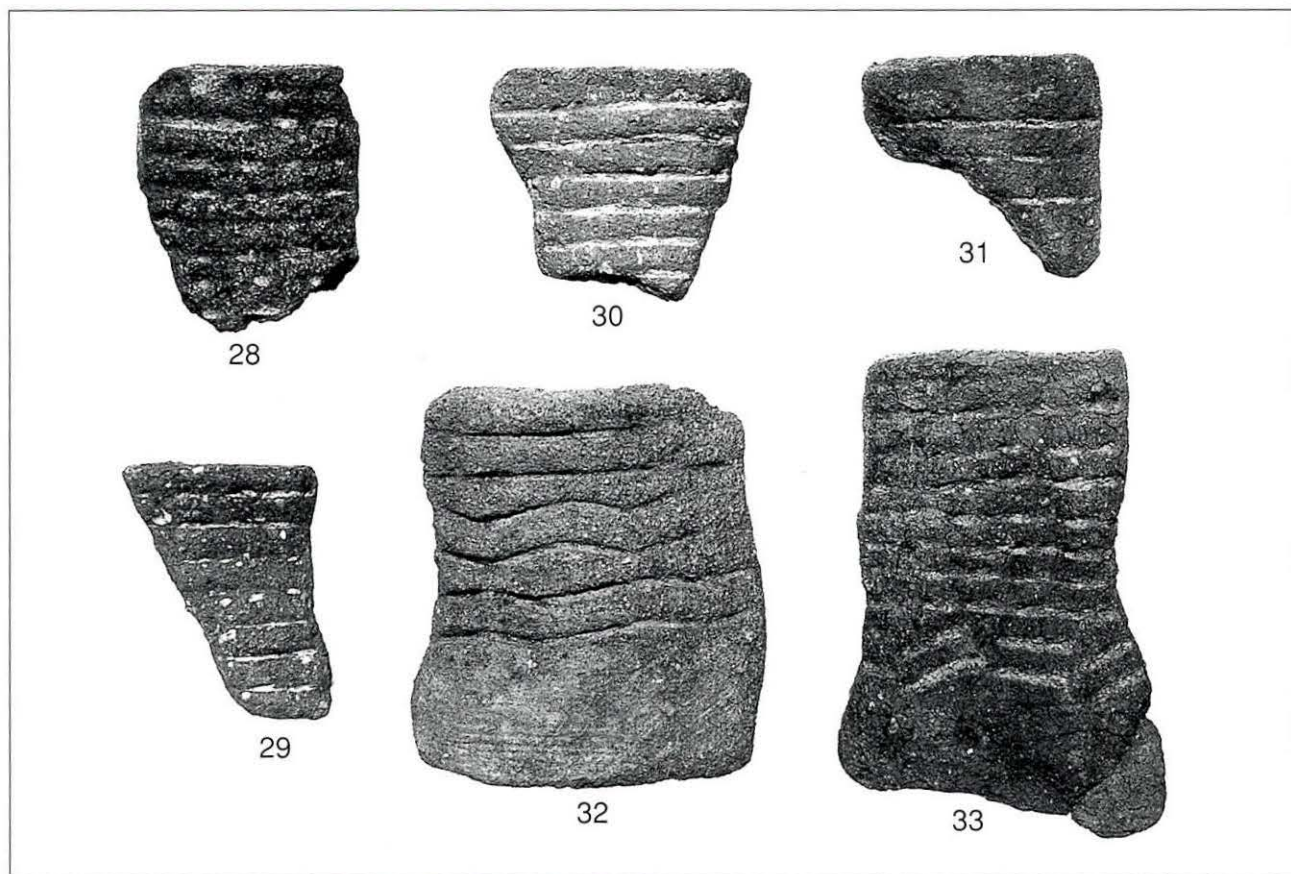
第2類土器 I 種土器 (16・17)



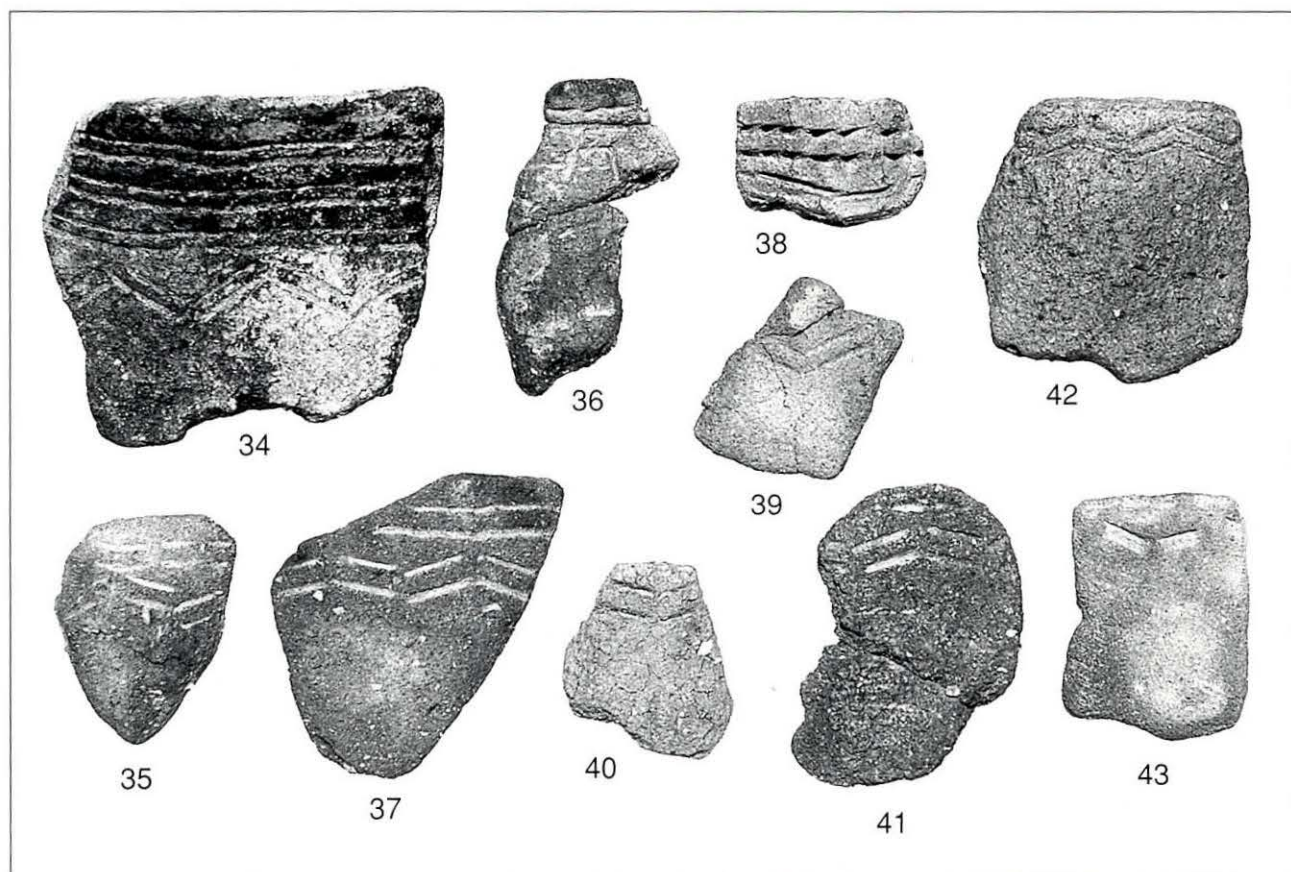
第2類Ⅰ種土器（18～21）



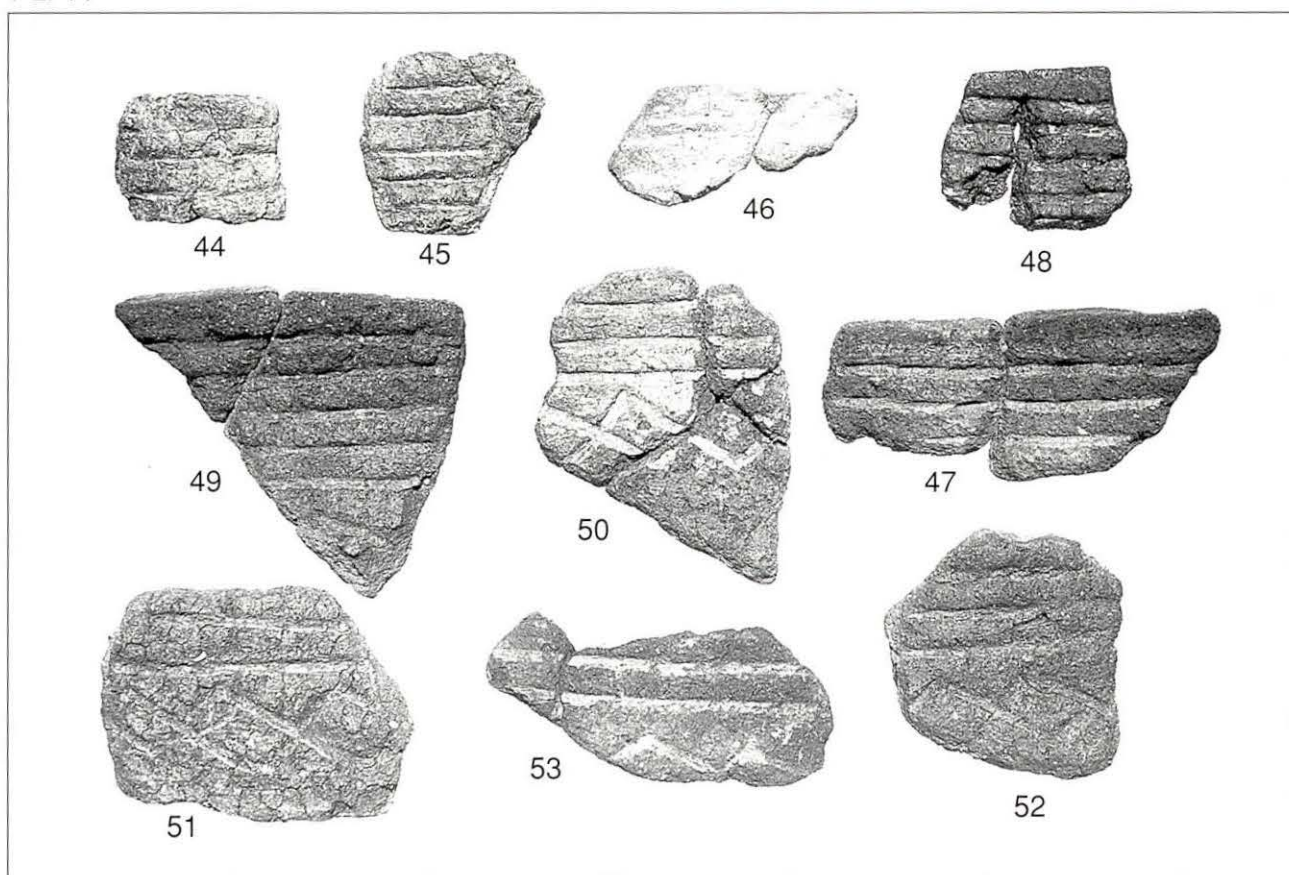
第2類Ⅱ種土器（22～27）



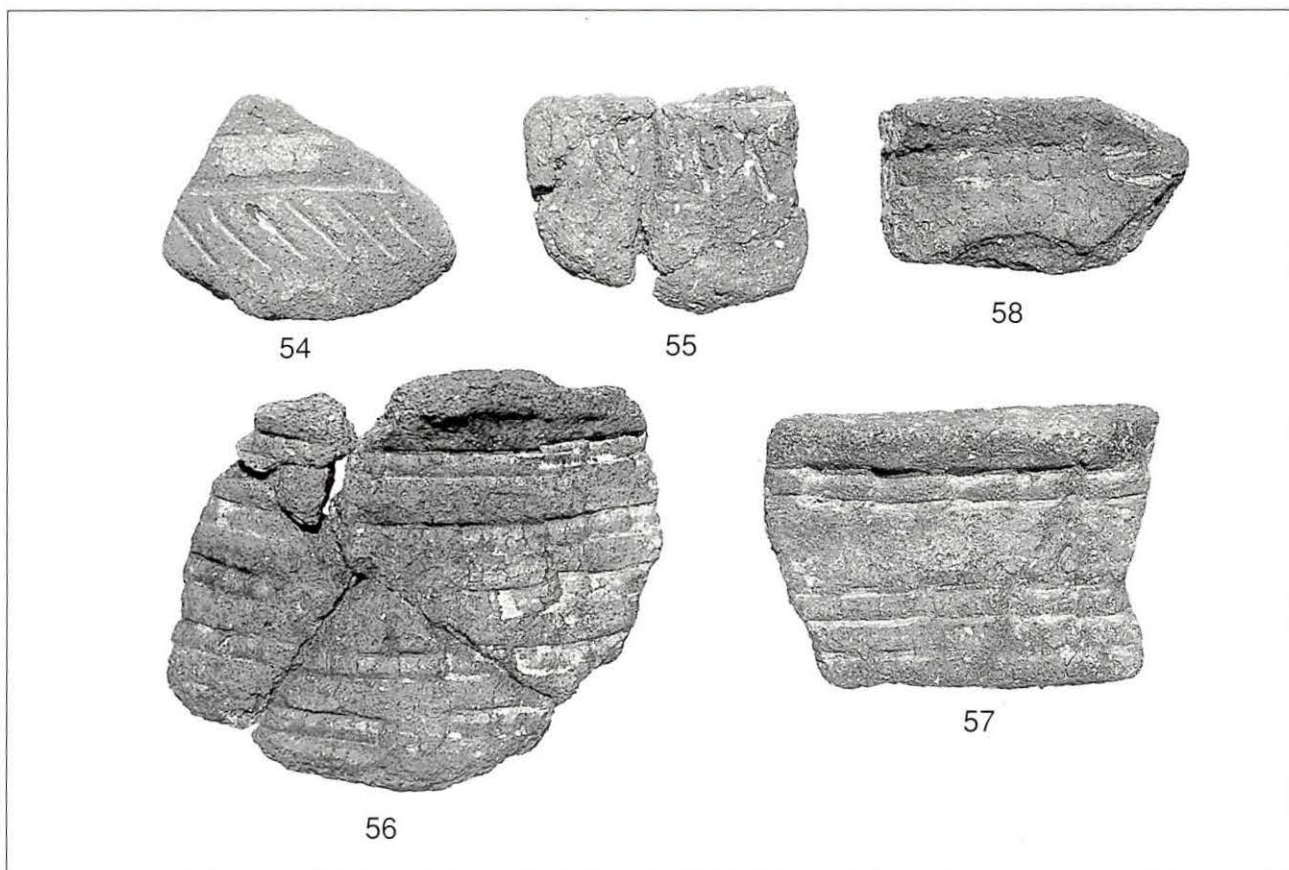
第2類Ⅱ種土器 (28～33)



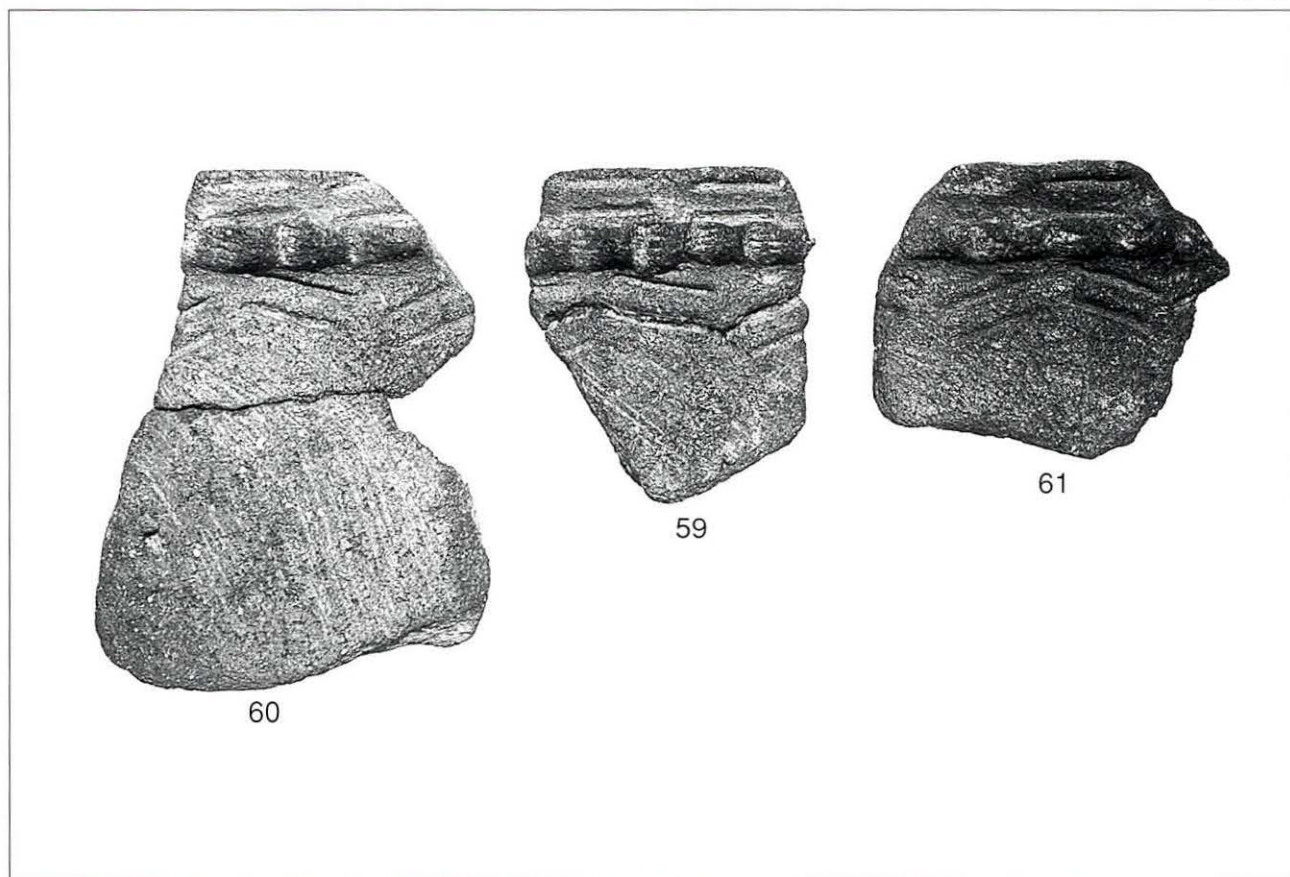
第2類Ⅱ種土器 (34～43)



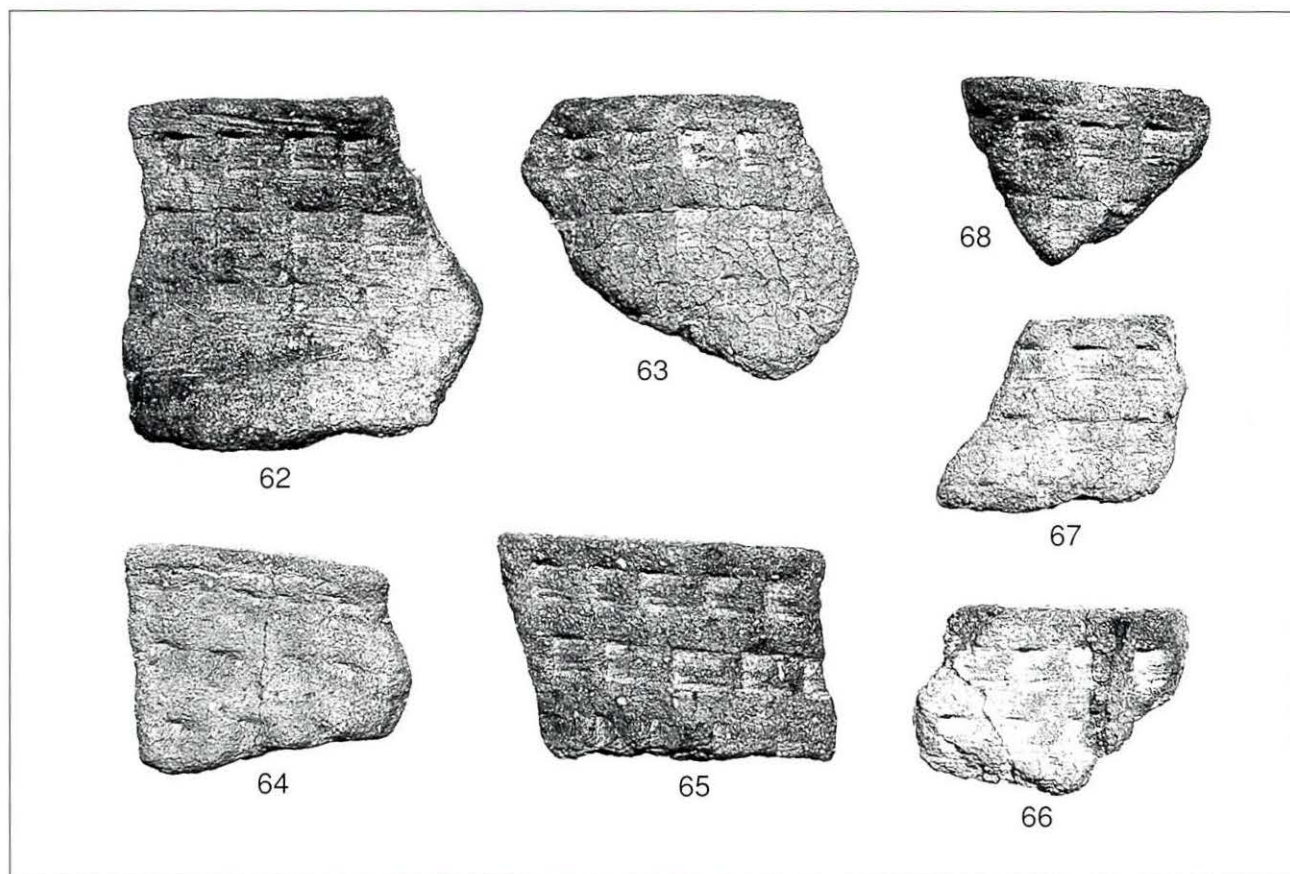
第2類Ⅲ種土器（44～46）第2類Ⅳ種土器（47～53）



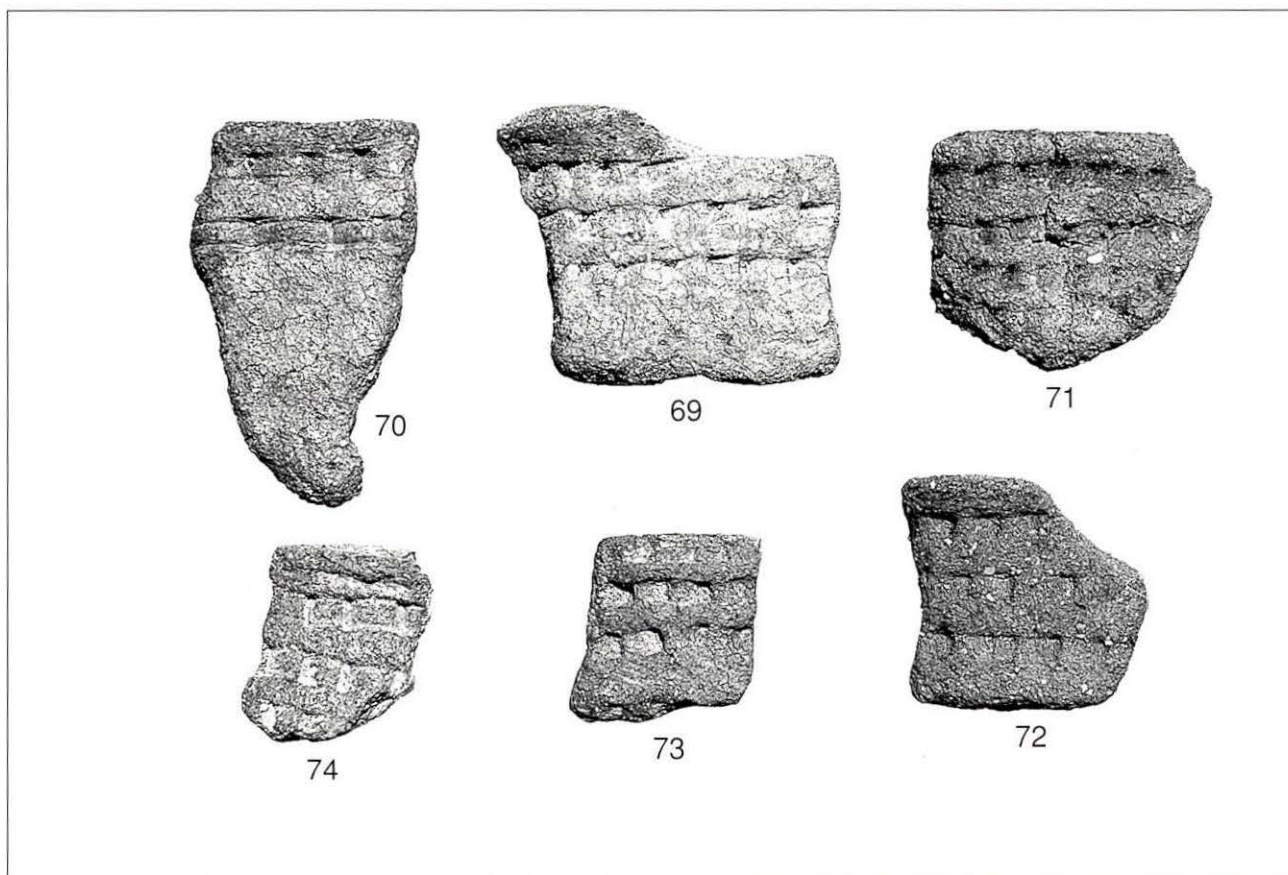
第2類Ⅳ種土器（54～58）



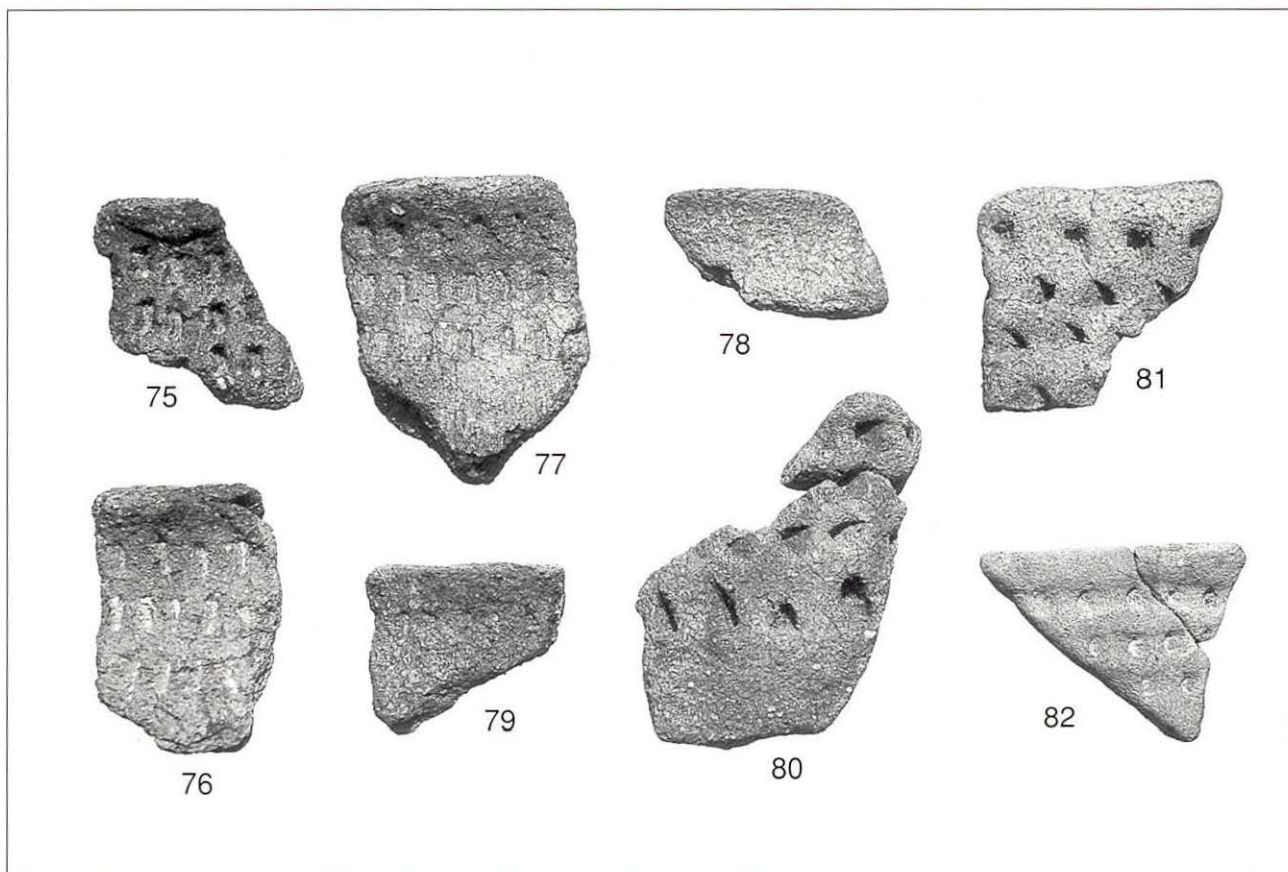
第2類Ⅴ種土器 (59～61)



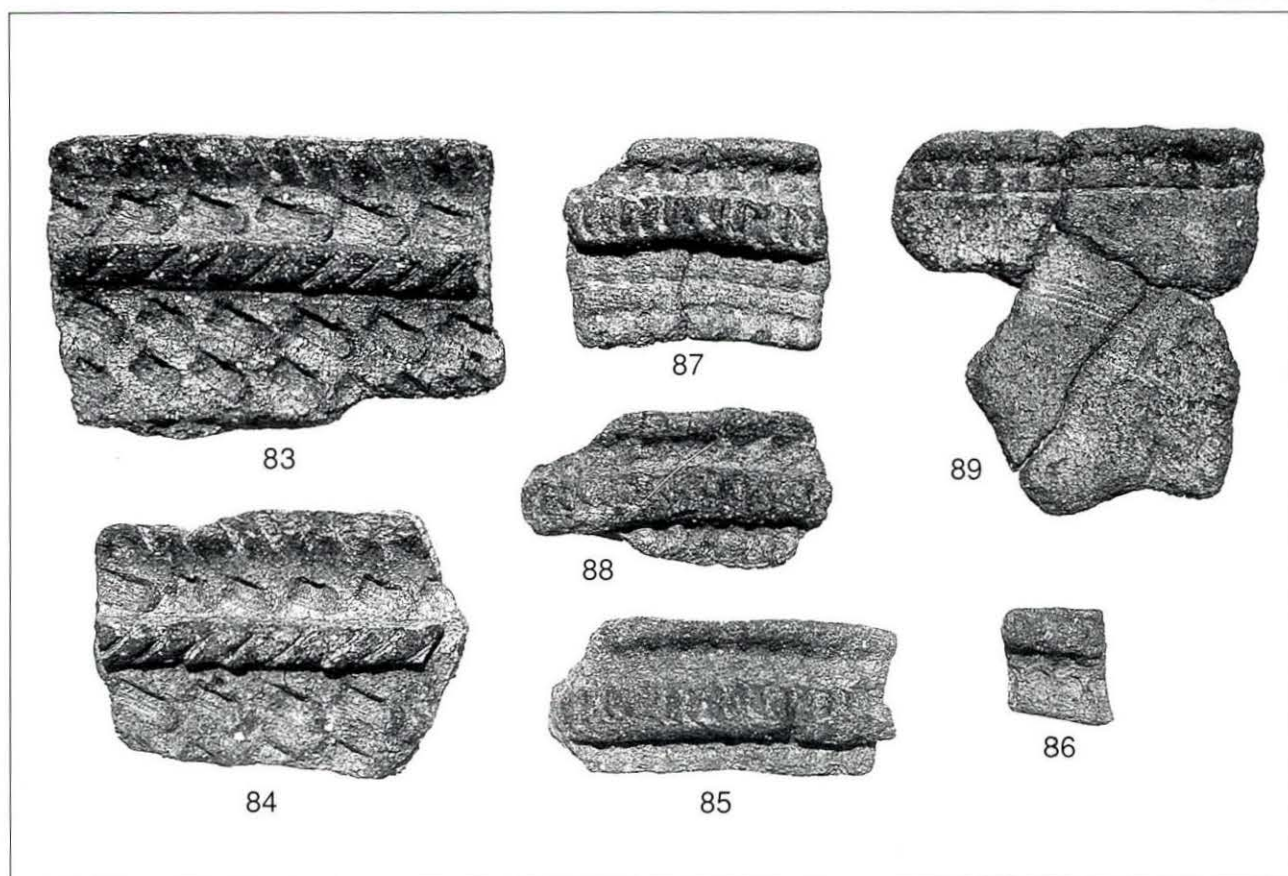
第3類Ⅰ種土器 (62～68)



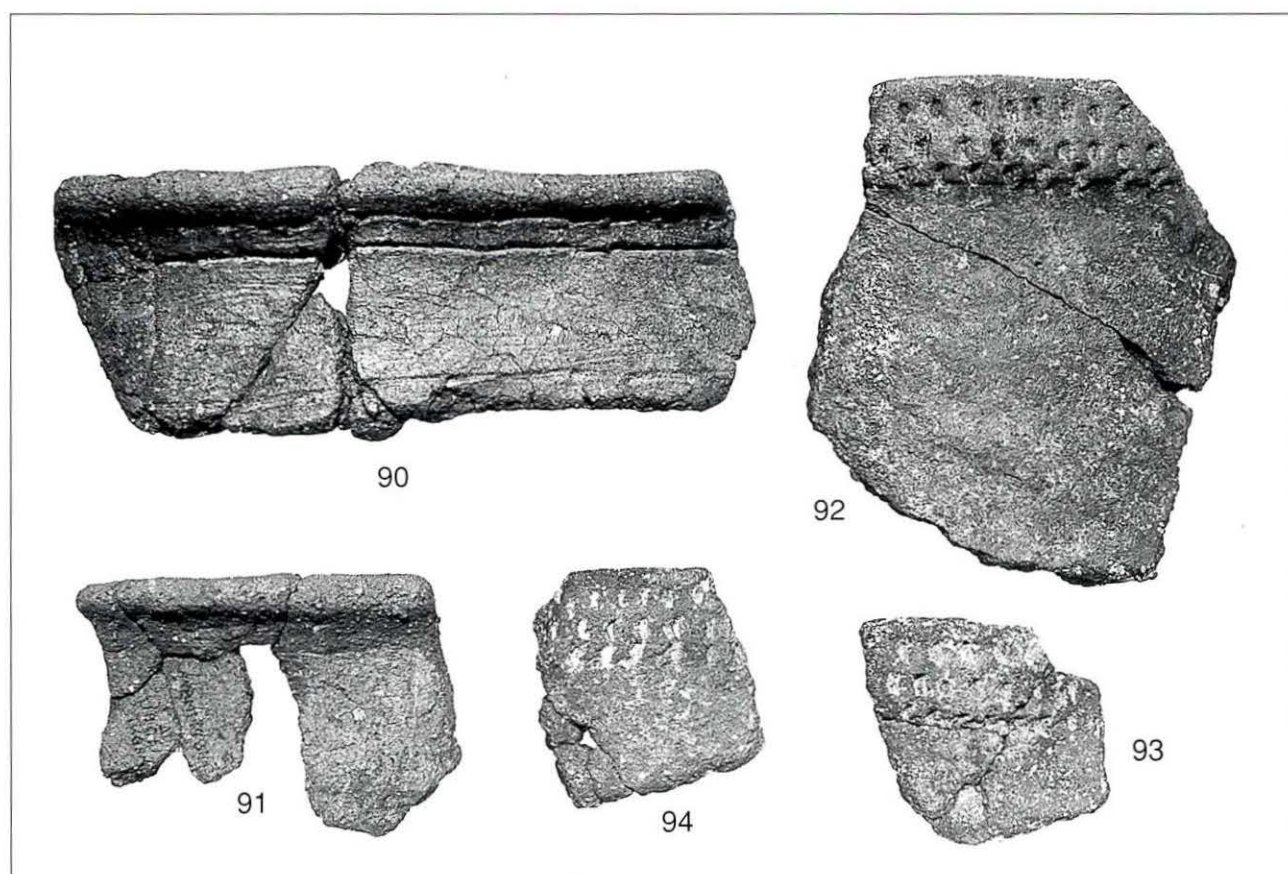
第3類II種土器 (69～74)



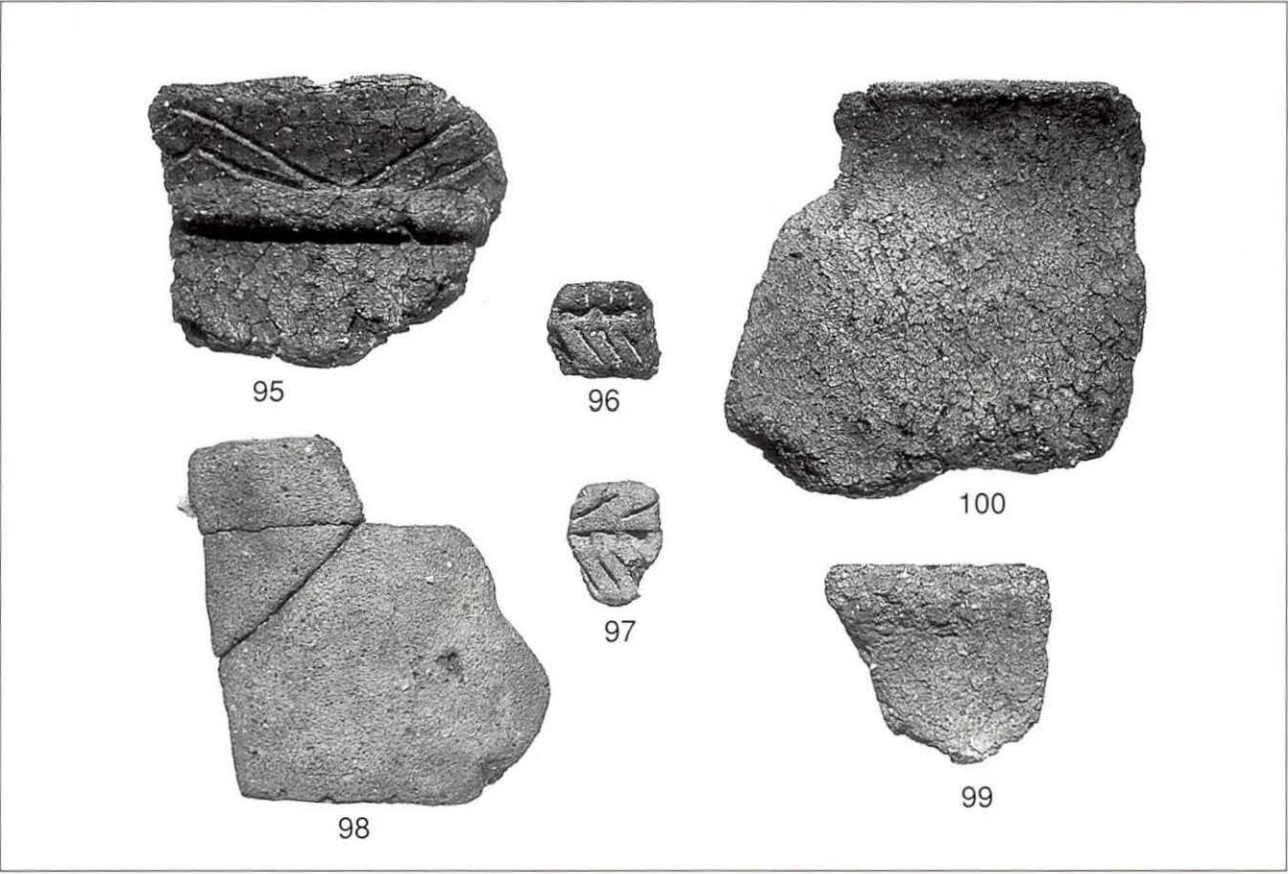
第3類III種土器 (75～79) 第3類IV種土器 (80～82)



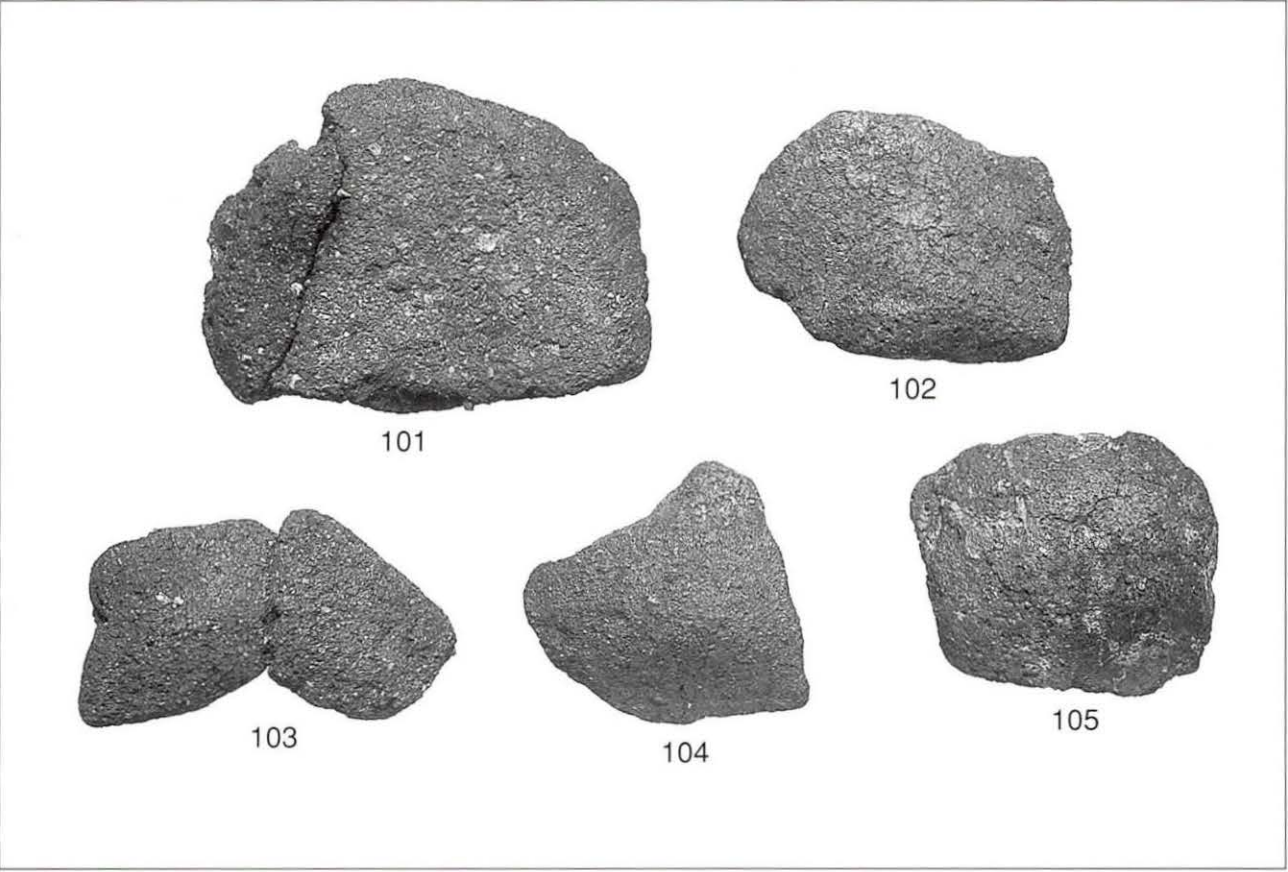
第3類V種土器 (83~89)



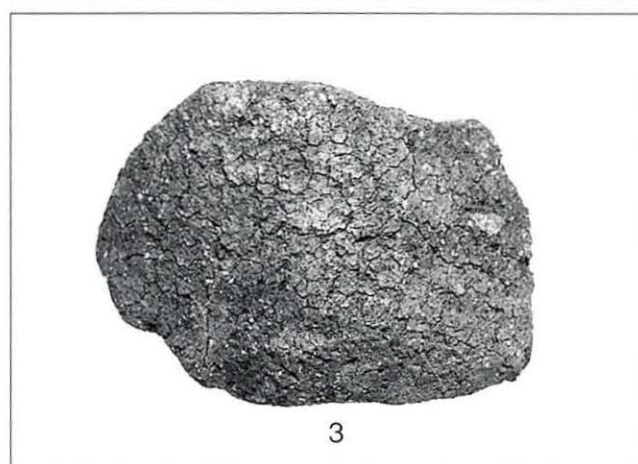
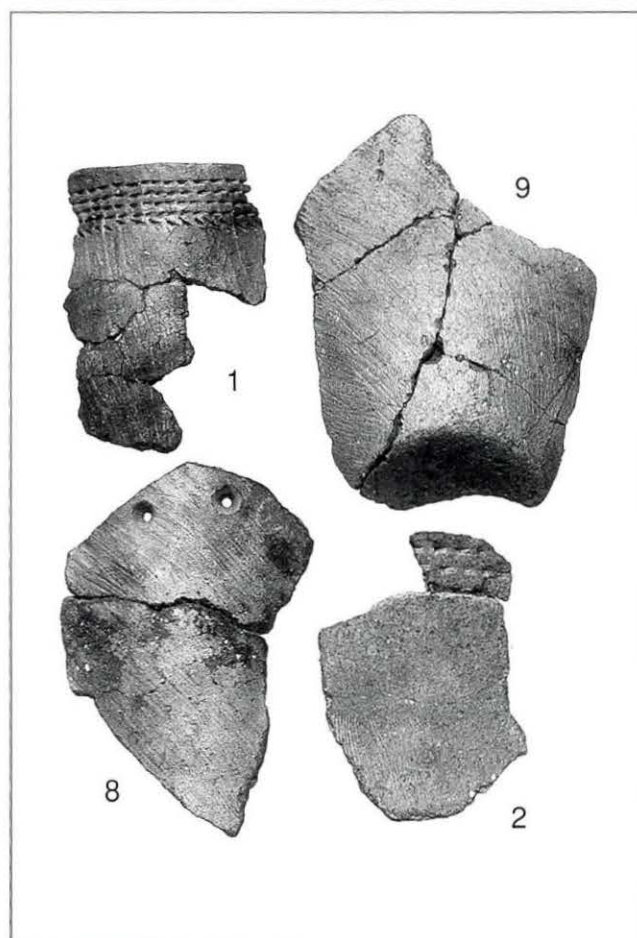
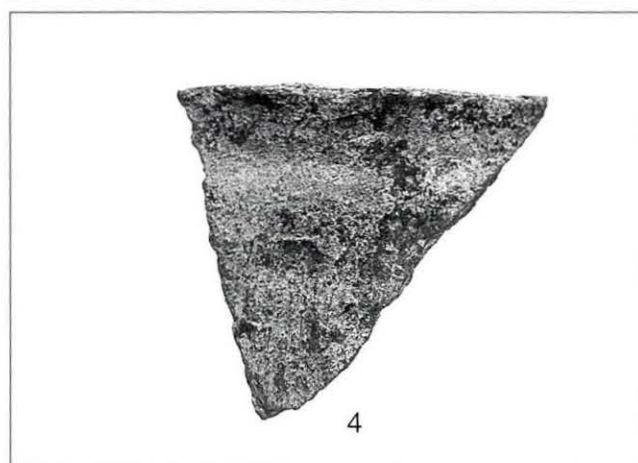
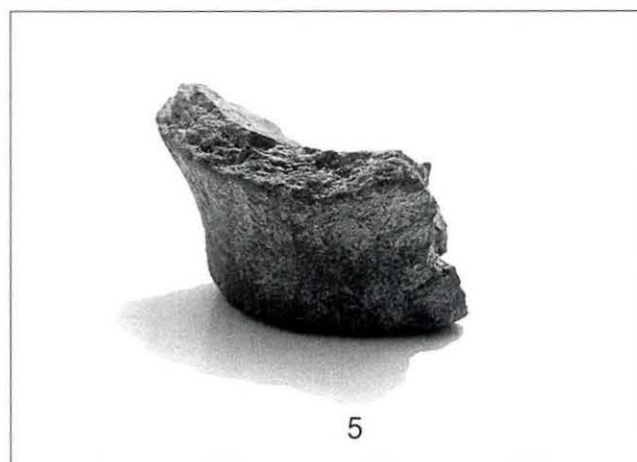
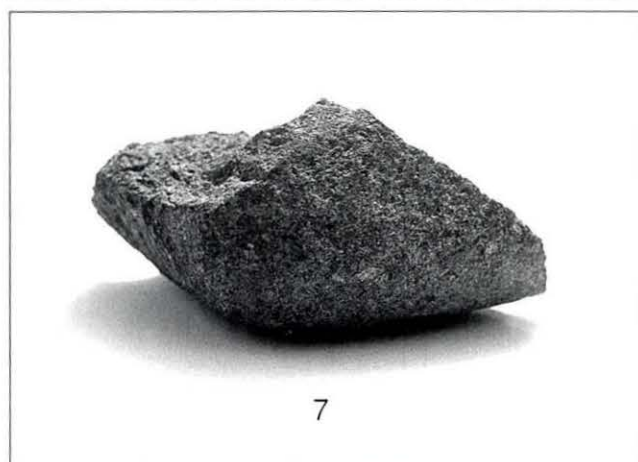
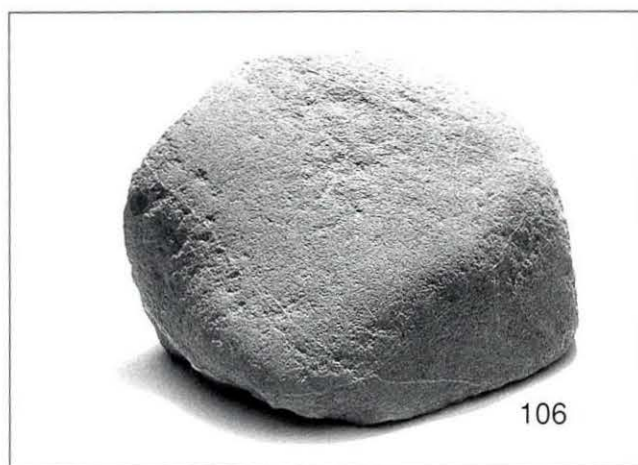
第4類土器 (90・91) 第5類土器 (92~94)



類不明土器（95～100）



底部資料（101～105）



石器 (106) ・試掘調査出土資料 (1~9)

附章 部瀬名南遺跡の自然科学分析

目次

はじめに	64
1. 遺跡周辺の地形・地質	64
2. 試料	64
3. 分析方法	65
(1) 放射性炭素年代測定	66
(2) 樹種同定	66
(3) 珪藻分析	66
(4) 花粉分析	66
(5) 植物珪酸体分析	66
(6) 微細遺物分析	66
4. 結果	67
(1) 放射性炭素年代測定	67
(2) 樹種同定	67
(3) 珪藻分析	67
(4) 花粉分析	68
(5) 植物珪酸体分析	69
(6) 微細遺物分析	69
5. 考察	70
(1) 放射性炭素年代から推定される調査区付近の地形変遷	71
(2) 堆積環境	71
(3) 周辺植生	71
引用文献	72

はじめに

沖縄県名護市に所在する部瀬名南遺跡では、これまでの発掘調査により、集石遺構や萩堂式土器や大山式土器といった遺物、さらに、基本層序の最下部からは埋没林と想定される木材などが認められている。また、本遺跡の周辺では、部瀬名南遺跡の北側の砂丘上で部瀬名貝塚の発掘調査が実施されており、貝の集積遺構や貝塚時代後期に比定される土器や石器、近世の陶磁器等が確認されている。

今回の分析調査は、部瀬名南遺跡における堆積環境や植生の変遷（特にイネ科草本からみた変遷）の推定を行うことを主目的として、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を実施する。また、埋没林と想定される木材については、年代観・構成する樹種、および当時の水域環境と周辺植生の推定を目的として、放射性炭素年代測定・樹種同定・珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析・微細遺物分析を実施する。

1. 遺跡周辺の地形・地質

部瀬名南遺跡は、部瀬名岬の南部に広がる低地の最も南側に位置し、調査区の背後は山地の急斜面が迫っている。部瀬名岬の地形は、目崎ほか（1978）によると、陸繋島と陸繋砂州および後背湿地からなるとされている。陸繋島は陸と繋がった島を指し、陸繋砂州は島と陸をつなぐ砂州であり、後背湿地は陸繋砂州の形成によって閉鎖された潟湖が湿地化したものである。すなわち、部瀬名岬は、もともと島であったが、島の背後の波静かな範囲に沿岸流や波によって運ばれた砂礫が堆積し、陸と繋がった地形であると考えられている。半島の西側の砂州の上には浜堤が形成されており、国土庁（1974）による地形分類では砂丘とされている。半島の東側の海岸を形成する砂州上には、浜堤・砂丘などは形成されていない。部瀬名南遺跡の発掘調査区の位置は、上記の地形分類図によれば、後背湿地内にあり、また部瀬名貝塚は半島西側の砂丘上に位置している。なお、部瀬名岬と同様の地形は、沖縄本島の海岸各地に認められる。最も規模が大きいものとしては、国頭村の辺土名付近にある赤丸岬とそれを頂点とする三角形の低地があり、これは辺土名トンボロ（トンボロとは陸繋砂州のこと）と呼ばれている。

発掘調査区の背後に広がる山地は、頁岩や千枚岩を主とする名護層とよばれる地質により構成されている（木崎編，1985）。部瀬名岬の陸繋島部分も同様の地質である。上述の国土庁の地形分類図によれば、海岸沿いの山地には砂礫層を堆積した海成段丘が形成されており、調査区背後の山地にも部瀬名原と呼ばれている開析された段丘地形が確認できる。ただし、この海成段丘については、詳細は不明であり、木庭（1980）によれば、沖縄本島の海成段丘の標高から更新世後期中位段丘下位面に対比されており、町田（2001）らによれば、同標高の海成段丘は最終間氷期の段丘に対比されている。

2. 試料

発掘調査区の層序については、C-13東壁地点の土層断面を対象とした。C-13東壁の層序は、現地調査を実施し、層序の観察から1～6層に分層した。1層は近代の攪乱層である。2層は灰白色のシルト質粘土で、チャートの礫が混じる。3層も2層と同じく灰白色のシルト質粘土で、上部では酸化鉄が顕著に認められる。また、中部には細～中礫が層状に入る。4層は灰色の細粒～中粒砂で、下部に行くにしたがって礫が多く混じる。本層より、沖縄貝塚時代前期に相当する伊波・萩堂式土器が検出されている。5層は褐色の中粒～粗粒砂で、粘板岩・千枚岩などに由来する礫が多く混じる。礫は下部に多く、局所的に濃集部が認められる。6層上部は淘汰の良い青灰色粗粒砂である。中～下部は青灰色シルト混

じり砂礫で、粘板岩の角礫が主体である。上部との境界は漸移的に変化し、明瞭ではない。試料は1層最下部～6層下部にかけて、5cm毎に連続的に試料採取を実施し、本地点より土壌37点（試料番号1～37）を採取した。

また、C-13東壁地点より連続する東側の断面において確認された4層以下の層に認められた杭材と想定される木材1点（試料名：埋没材1）と、発掘調査区南西隅付近の6層下位層準相当層に認められた木材3点（試料名：埋没材2～4）、およびそれら埋没材の下位に堆積するシルト質粘土（試料番号3'・4（下部））を2点採取した。

試料採取地点の模式柱状図と試料採取位置を図1に、分析項目の詳細を表1に示す。

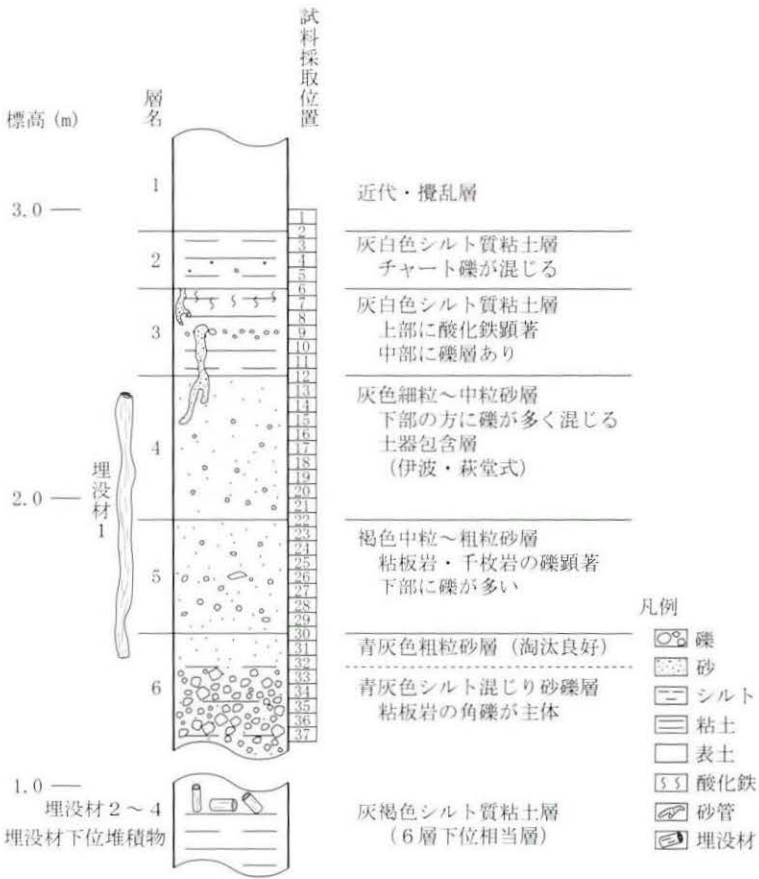


図1 C-13東壁地点模式柱状図および試料採取位置

3. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社 加速器分析研究所の協力を得た。なお、結果表中の同位体比は標準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した年代である。 $\delta^{13}\text{C}$ の値は、試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 原子比を質量分析器で測定し、標準にPDB（白亜紀のベレムナイト類の化石）を用いて算出した値である。今回の試料の測定年代は、この値に基づいて補正した年代である。

表1 分析試料一覧

地点・層位	試料種類	試料番号・試料名	^{14}C	P	D	PO	W	微細遺物	備考
C-13東壁	土壌	1							近代・攪乱層
	土壌	4		●	●	●			灰白色シルト質粘土層
	土壌	9		●	●	●			灰白色シルト質粘土層
	土壌	17			●	●			灰色細粒～中粒砂層
	土壌	24			●	●			褐色中粒～粗粒砂層
	土壌	31			●	●			青灰色粗粒砂層
4層 (基本層序)	木材	埋没材1	●				●		杭材？
発掘調査区 南西隅	木材	埋没材2	●				●		埋没材
	木材	埋没材3	●				●		埋没材
	木材	埋没材4	●				●		埋没材
	土壌	3'		●	●	●	(●)	●	灰褐色シルト質粘土
発掘調査区 南西隅 埋没材下位	土壌	4（下部）		●	●	●	(●)	●	灰褐色シルト質粘土

^{14}C : 放射性炭素年代測定 P: 花粉分析 D: 珪藻分析 PO: 植物珪酸体分析
W: 樹種同定, (●)は堆積物中より抽出 微細遺物: 洗い出しによる微細遺物（特に種子）の検出同定解析

（２）樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

（３）珪藻分析

試料を湿重で 7 g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象として 200 個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer and Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）などを参照する。

同定結果は、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。堆積環境の解析は、汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

（４）花粉分析

試料約 10 g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

（５）植物珪酸体分析

湿重 5 g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250KHz, 1 分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

（６）微細遺物分析

試料葉 500 g 秤量し、数%の水酸化ナトリウム水溶液を入れて放置し、試料を泥化させる。泥化した試料を 0.5 mm の篩を通して水洗し、残渣を集める。残渣を双眼実体顕微鏡で観察し、同定可能な植物遺体を抽出・同定する。

4. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表2に示す。発掘調査区内より採取された木材の測定年代値（補正年代値）は、杭材と想定される木材（埋没材1）は約1420年前、埋没材2は約2850年前、埋没材3は約3120年前、埋没材4は約3650年前の値を示す。

表2 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

地点・層位	試料番号 試料名	試料 種類	樹種	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 BP	Code. No.
4層（基本層序）	埋没林1	木材	サガリバナ	1490±100	-29.3	1420±100	IAA-10
発掘調査区 南西隅	埋没林2	木材	サキシマスオウノキ	2920±60	-29.6	2850±60	IAA-11
	埋没林3	木材	サガリバナ	3180±90	-28.6	3120±90	IAA-12
	埋没林4	木材	サキシマスオウノキ	3710±70	-28.8	3650±70	IAA-13
	3'	木材	サガリバナ	—	—	—	—
発掘調査区 南西隅 埋没林下位	4(下部)	木材	フヨウ属オオハマボウ節	—	—	—	—

(1)測定年代および補正年代は、1950年を基点に何年前であることを示した値。

(2)誤差は、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代。

(2) 樹種同定

結果を表2に示す。発掘調査区内より採取された木材6点の樹種は、広葉樹3種類（フヨウ属オオハマボウ節・サキシマスオウノキ・サガリバナ）に同定された。以下に、各種類の主な解剖学的特徴を記す。

・フヨウ属オオハマボウ節 (*Hibiscus* Sect. *Azanza*) アオイ科

散孔材で、径の大きい道管が単独または放射方向に2～3個が複合して散在する。分布密度は高くない。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性III型、1～3細胞幅、1～20細胞高で、やや階層状に配列し、時に上下に連結する。

・サキシマスオウノキ (*Heritiera littoralis* Dryand) アオギリ科サキシマスオウノキ属

散孔材で、道管は単独または2～4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は低い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列し、内部に黒色充填物が認められることがある。放射組織は異性III～同性、1～3細胞幅、1～15細胞高で、階層状に配列する。

・サガリバナ属 (*Barringtonia racemosa* (L.) Spreng.) サガリバナ科サガリバナ属

散孔材で、道管は単独または2～3個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減する。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔を有する。放射組織は異性II型、1～4細胞幅、1～100細胞高以上。軸方向柔細胞は接線状、周囲状。

(3) 珪藻分析

結果を表3に示す。C-13東壁における試料番号4・9・17・24・31からは、珪藻化石は全く産出されなかった。埋没材が認められた地点、およびその下位から採取された堆積物である試料番号3'・4

(下部)の2点からは、水域に生育する水生珪藻と陸上の好気的環境に生育する陸生珪藻とが産出する。水生珪藻では、有機汚濁の進んだ富栄養水域や多少の塩分（塩類）を含んだ水域に生育する *Nitzschia palea*、流水にも止水にも普通に生育する流水不定性の *Navicula symmetrica*、*Nitzschia clausii*、川のような流水域を最適生育域とする好流水性の *Navicula viridula*、*N. viridula* var. *rostellata*、陸生珪藻の中でも分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い陸生珪藻 A 群（伊藤・堀内、1991）の *Amphora montana* が産出した。このうち *Navicula viridula*、*N. viridula* var. *rostellata* は、河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、その環境を

表3 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	C-13東壁					埋没材 下位堆積物	
	塩分	pH	流水		4	9	17	24	31	3' (下層)	4
<i>Fragilaria brevistriata</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	1	-
<i>Nitzschia obtusa</i> var. <i>scalpelliformis</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	1
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.) W. Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	-	-	-	-	-	6	2
<i>Achnanthes minutissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	1	-
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	12	2
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	-	-	-	-	-	1
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	1	-
<i>Gyrosigma scalpoides</i> (Rabh.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	2	-
<i>Navicula angusta</i> Grunow	Ogh-ind	ac-il	ind	T	-	-	-	-	-	2	-
<i>Navicula symmetrica</i> Patrick	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	7	2
<i>Navicula viridula</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, U	-	-	-	-	-	4	1
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rostellata</i> (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, U	-	-	-	-	-	2	1
<i>Nitzschia clausii</i> Hantzsch	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	3	2
<i>Nitzschia nana</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB, S	-	-	-	-	-	1	-
<i>Nitzschia</i> sp.-1	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	1	6
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	2	2
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB, S	-	-	-	-	-	-	1
海水生種合計					0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種合計					0	0	0	0	0	7	3
淡水生種合計					0	0	0	0	0	38	18
珪藻化石総数					0	0	0	0	0	45	21

凡例

H. R. : 塩分濃度に対する適応性

Ogh-Meh : 淡水～汽水生種

Ogh-ind : 貧塩不定性種

Ogh-unk : 貧塩不明種

pH : 水素イオン濃度に対する適応性

al-il : 好アルカリ性種

ind : pH 不定性種

ac-il : 好酸性種

unk : pH 不明種

C. R. : 流水に対する適応性

l-ph : 好止水性種

ind : 流水不定性種

r-ph : 好流水性種

unk : 流水不明種

環境指標種群

K: 中～下流性河川指標種 (安藤, 1990)

S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上は Asai and Watanabe, 1986)

R: 陸生珪藻 (RB: B 群, RI 群、伊藤・堀内, 1991)

指標する中～下流性河川指標種群 (安藤, 1990) でもある。

(4) 花粉分析

結果を表4・図2に示す。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

C-13 東壁試料番号4では、シダ類胞子が非常に多く産出する。花粉化石についてみると、草本花粉にくらべ木本花粉の産出する割合が高い。木本花粉は、サカキカズラ属・シイノキ属～マテバシイ属が

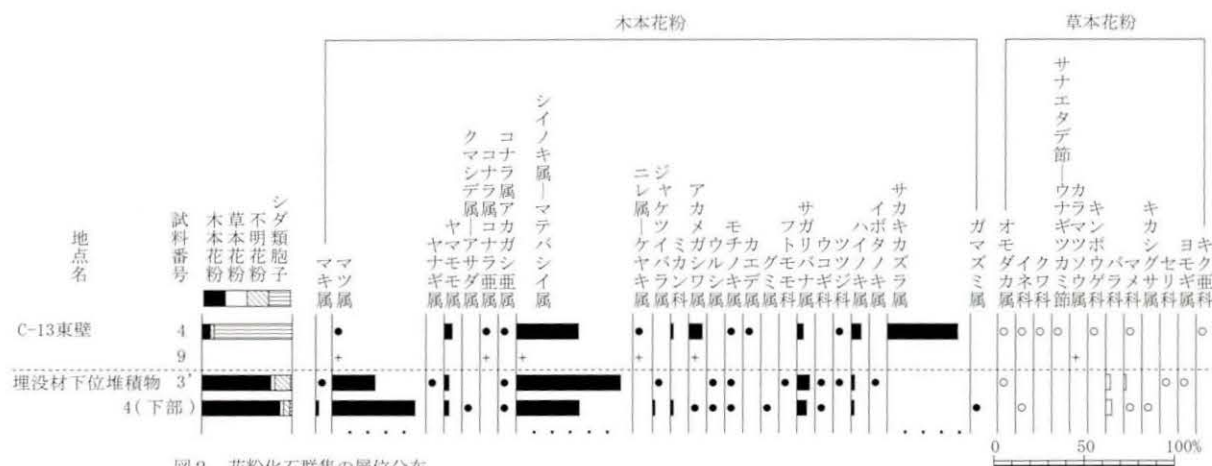


図2 花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

多産し、アカメガシワ属・ハイノキ属などを伴う。草本花粉は検出される種類数も少なく、イネ科・マメ科などがわずかに認められる程度である。試料番号9からは、花粉化石はほとんど検出されなかった。

埋没材3'・4（下部）土壌では、木本花粉の産出する割合が高い。シイノキ属-マテバシイ属・マツ属が多産し、サガリバナ属なども検出される。草本花粉ではバラ科、マメ科などが多少みられるが、総数に対しての割合は低い。

（5）植物珪酸体分析

結果を表5に示す。C-13東壁の試料番号4・9・17・24・31、および埋没材3'土壌では、植物珪酸体は全く産出しなかった。埋没材4（下部）土壌では、タケ亜科やウシクサ族などの機動細胞珪酸体がわずかに検出される。しかし、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。また、海綿骨針もわずかに認められる。

（6）微細遺物分析

結果を表6に示す。分析の結果、種実遺体は少なく、種類が特定できたものは4種類である。その他には材・菌核・昆虫・材などが若干みられた程度である。以下に検出された試料の形態的特長を示す。

・シイノキ属 (Castanopsis) ブナ科

種子が検出された。大きさは1cm程度。亜三角形で、先端部が尖る。表面に浅い筋が走る。全体的に保存が悪く、薄くなっている。

・カジノキ属 (Broussonetia) クワ科

種子が検出された。褐色。大きさは1mm程度。倒卵型、表面にはいぼ状の模様が粗く配列し、側面の隅に突起がみられる。

表5 植物珪酸体分析結果

種 類	C-13東壁					埋没材 下位堆積物	
	試料番号	4	9	17	24	31	4 3'（下部）
イネ科葉部短細胞珪酸体		-	-	-	-	-	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
タケ亜科		-	-	-	-	-	2
ウシクサ族		-	-	-	-	-	1
不明		-	-	-	-	-	2
合 計							
イネ科葉部短細胞珪酸体		0	0	0	0	0	0
イネ科葉身機動細胞珪酸体		0	0	0	0	0	5
総 計		0	0	0	0	0	5
その他							
海綿骨針		-	-	-	-	-	1

表4 花粉分析結果

種 類	C-13東壁		埋没材 下位堆積物	
	試料番号	4	5	4 3'（下部）
木本花粉				
マキ属		-	-	2 10
ツガ属		-	-	- 2
マツ属		2	1	51 264
スギ属		-	-	- 1
ヤナギ属		-	-	1 -
ヤマモモ属		9	-	6 16
クマシデ属-アサダ属		-	-	- 1
コナラ属コナラ亜属		1	1	- -
コナラ属アカガシ亜属		1	-	1 1
シイノキ属-マテバシイ属		69	1	122 201
ニレ属-ケヤキ属		1	1	- -
ジャケツイバラ属		-	-	1 8
ミカン科		3	-	- 9
アカメガシワ属		15	4	- 1
ウルシ属		-	-	2 1
モチノキ属		1	-	1 4
カエデ属		1	-	- -
グミ属		-	-	- 1
フトモモ科		-	-	2 -
サガリバナ属		7	-	15 31
ウコギ科		-	-	2 2
ツツジ科		1	-	1 -
ハイノキ属		11	-	4 10
イボタノキ属		-	-	1 -
サカキカズラ属		78	-	- -
ガマズミ属		-	-	- 3
草本花粉				
オモダカ属		1	-	1 -
イネ科		3	-	- 1
クワ科		1	-	- -
サナエタデ属-ウナギツカミ属		1	-	- -
カラマツソウ属		-	1	- -
キンボウゲ科		1	-	- -
バラ科		-	-	6 21
マメ科		4	-	3 1
キカシグサ属		-	-	- 2
セリ科		-	-	1 -
ヨモギ属		-	-	1 -
キク亜科		1	-	- -
不明花粉		96	1	48 47
シダ類胞子				
他のシダ類胞子		1939	-	5 11
イノモトソウ属		7	-	- 5
合 計				
木本花粉		200	8	212 566
草本花粉		12	1	12 25
不明花粉		96	1	48 47
シダ類胞子		1946	0	5 16
総計（不明を除く）		2158	9	229 607

表6 微細遺物分析結果

試料名	埋没材下位堆積物	
	4 3'（下部）	4 3'（下部）
シイノキ属	破2	-
カジノキ属	1	-
コバンモチ	1	-
エゴノキ属	破3	破3
不明	破	5
材	破	破
菌核	-	1
昆虫	破	破

・コバンモチ (*Elaeocarpus japonicus* Sieb. et Zucc.)

ホルトノキ科ホルトノキ属

核が検出された。黒褐色、側面観は一端がやや平坦な楕円形。横断面は円形。長さ9mm、幅5mm、厚さ6mm程度。表面は浅く細い溝が縦横に走り、不規則な網目模様をなす。起伏に富む。

・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

核の破片検出された。灰黒色。側面観は楕円形、上面観は円形。長さ1cm程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に浅い溝がある。核は厚く硬い。

5. 考察

(1) 放射性炭素年代から推定される調査区付近の地形変遷

発掘調査区背後の部瀬名原の段丘は、最終間氷期に形成された可能性がある。これは、最終間氷期(約12万年前)に山地斜面が波により削られて平坦面が形成され、その後の海退と地盤の隆起により段丘化したということを意味する。すなわち、約12万年前以降、段丘の高度が上がり、段丘は開析されて小さな谷が入り、谷の一部は沢となり海へ注ぐようになる。一般的には、最終間氷期以降の海退は、約18000年前頃と考えられている最終氷期最盛期まで続き、それ以降は海進(いわゆる縄文海進)に転じる。おそらく海退時には、調査区付近には何らかの海浜地形が形成されたであろうが、その後の海進によりそれらの地形は失われたと考えられる。

現在見られる地形は、その過程から現在形成中のものではなく、相対的に海面が現在より高位の時期に形成されたと考えられている(目崎ほか, 1978)。日本列島各地の調査例では、約6000年前に海進最盛期が推定されることが多い(海津, 1994)が、南西諸島においては、約3500年前に海面が最も高くなり、その後約1700年前までの期間は、海水準は安定していたと考えられている(木庭, 1990)。したがって、部瀬名岬の陸繋砂州や陸繋島の形成は、この時期に進んだと考えられる。今回の木材の放射性炭素年代測定により得られた年代値は、約3600年前から1400年前までを示している。この時期は、上記の海水準の安定期にほぼ重なっており、これは後述する埋没材の生育していた頃の環境とされる湿地が陸繋砂州の形成に伴い、その後背に形成された湿地であったことを示唆する。

その後、1400年前以降のある時期に、海成段丘を構成する斜面表層の堆積物、あるいは沢によって海成段丘平坦面を構成する砂礫層が比較的短期間に後背湿地に流れ込み、調査区付近の湿地が埋没・消滅したと考えられる。この湿地を埋積した層序が、C-13東壁の層序断面で確認された砂礫層に相当する。砂礫層中には、山地を構成する名護層に由来する粘板岩の角礫が多量に含まれ、またその中に段丘礫層に由来すると考えられる円礫も認められており、その層相は上記の埋積過程を示唆している。なお、この砂礫層が、放射性炭素年代測定で約1400年前の年代値を示した木材(埋没林1)を、直接埋積する状況も現地調査にて確認している。

ところで、本遺跡における発掘調査では、この砂礫層中位、約1400年前の木材を埋積した砂礫層から荻堂式土器や大山式土器が出土している。これは、上記の地形形成過程を考慮すると、土器を含む堆積物(包含層か)が二次的に堆積したことは明らかであり、おそらく、周辺の手成段丘上に当該期の遺跡が分布している可能性があり、砂礫層中から出土した土器はこれらに遺跡に由来すると考えられる。また、これら土器が使用された当時は、発掘調査区のある手成段丘下には湿地が広がっていたことが推測される。

(2) 堆積環境

C-13 東壁地点における珪藻分析・植物珪酸体分析の結果、いずれの試料からもこれら化石は認められなかった。試料採取地点の層相から堆積速度が速いことが想定されることから、取り込まれる化石も少なかったものと思われる。また、堆積後は地表にさらされていることから、風化作用を受けやすかったと考えられる。熱帯や亜熱帯などの高温多湿の環境下においては、強い風化作用のため造岩鉱物の大半は分解し、塩基や珪酸のかかなりの部分が溶脱するとされている（松井，1988）。このことから、本地点での無化石の要因として、堆積過程や珪酸の溶脱作用などが考えられる。

埋没材が認められた地点の下位の堆積物から産出する珪藻化石の生態的な特徴に注目すると、陸生珪藻と水生珪藻が混在する。さらに水生珪藻では、富栄養な環境に生育する種や流水不定性種、中～下流性河川指標種などが検出されている。このことから、埋没材が生育していた環境として、海成段丘の形成されている丘陵から沢が流れ込むような砂州の後背湿地が想定できる。これは前述した地形形成過程や、後述する植物化石からみた環境とも調和的である。

(3) 周辺植生

発掘調査区南西端部付近の6層下位層準相当層に認められた木材の樹種同定結果からは、サキシマスオウノキ・サガリバナ・ハマボウ節の3種類の広葉樹が認められた。また、花粉分析の結果からもサガリバナ属が検出されている。これらは、いずれも河川や海岸の後背湿地に生育する種類である。この他に、花粉分析から認められたマツ属・ジャケツイバラ属・アカメガシワ属・ハイノキ属・サカキカズラ属や、微細遺物検出同定から認められたカジノキ属・コバンモチ・エゴノキ属などは、明るく開けた場所を好み、海岸や林縁部に多く生育する種類で、これらは現存植生においても認められる種群である（宮脇編著，1989）。草本類では、イネ科（タケ亜科などを含む）・バラ科・キカシグサ属などが認められていることから、遺跡内やその周囲にこれらの草本類が生育していたと思われる。

以上の結果から、本遺跡周辺の海岸や後背湿地には、マツ属（おそらくリュウキュウマツ）・ジャケツイバラ属・アカメガシワ属・サキシマスオウノキ・サガリバナ・ハマボウ節（おそらくはオオハマボウ）・カジノキ属・コバンモチ・ハイノキ属・エゴノキ属・サカキカズラ属などが生育し、遺跡内やその周囲にはバラ科・キカシグサ属などが生育していたと推定される。

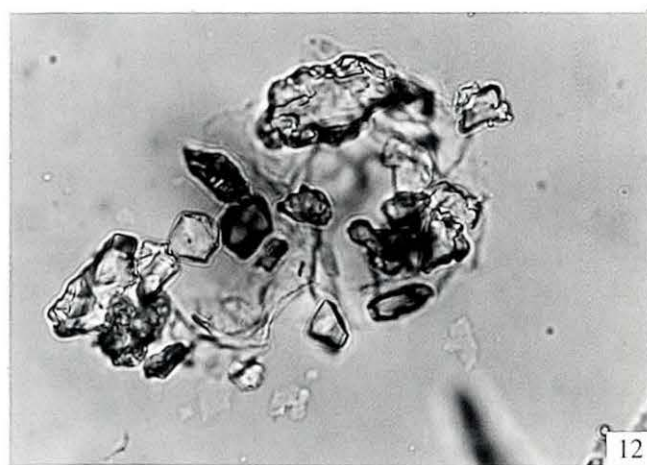
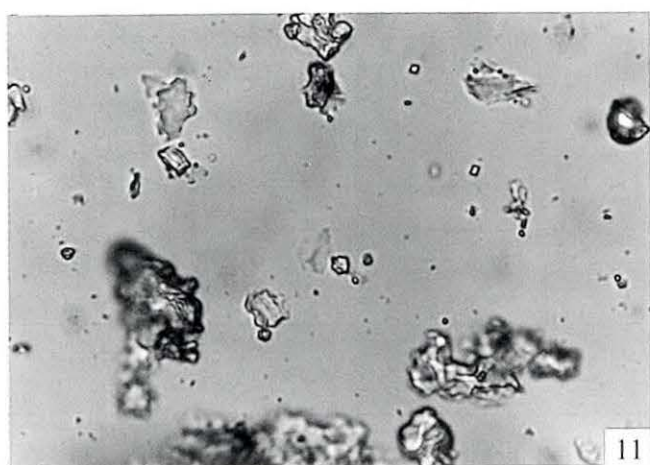
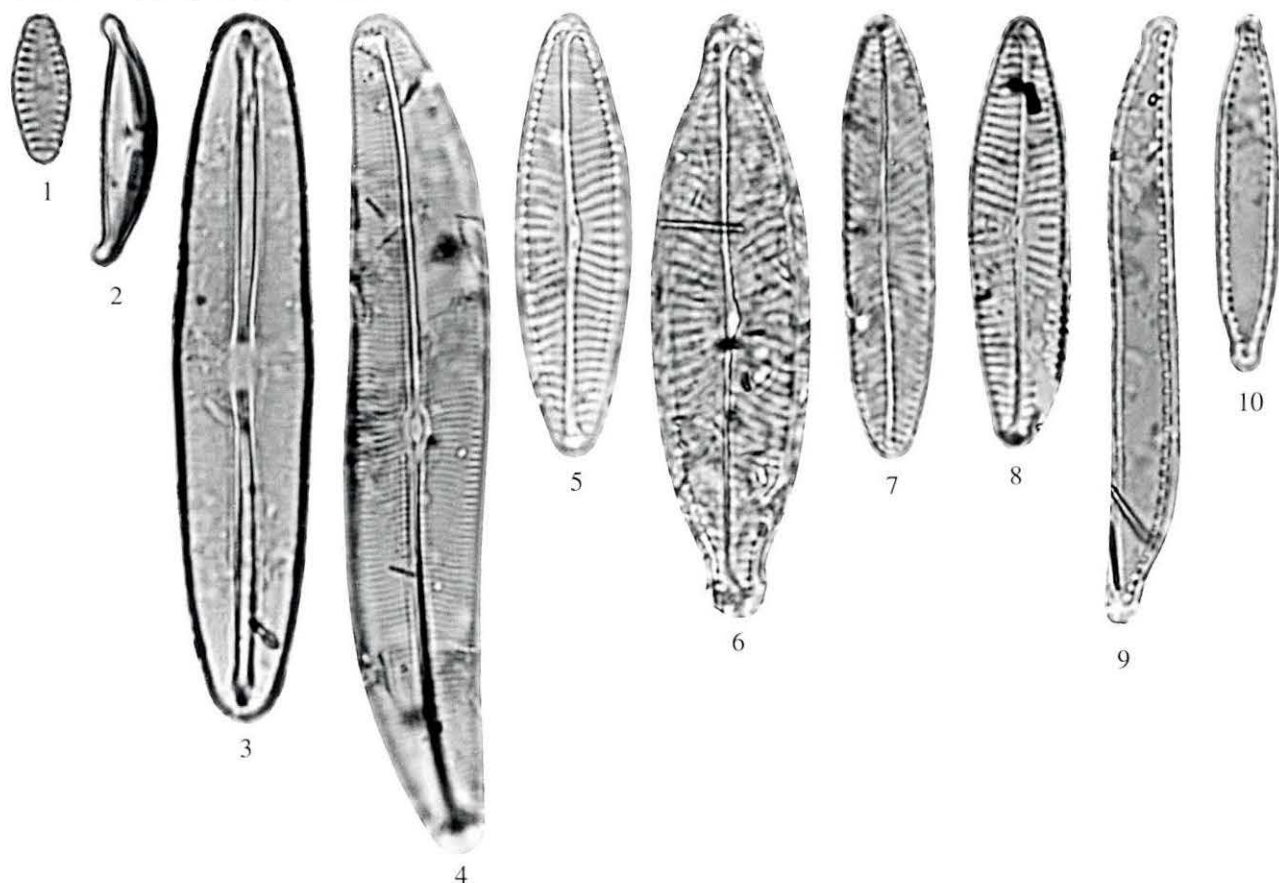
なお、サキシマスオウノキやサガリバナを主体とする湿地林については、現在では西表島のごく限られた地域にしか認められない（宮脇編著，1989）。これは、生育に適した湿潤な沖積低地が、早くから水田耕作地として開墾されてきたことに起因すると考えられる。ただし、サキシマスオウノキについては、国頭村阿波の県指定天然記念物の個体、慶佐次のマングローブ林の内陸部に生育している個体、名護市宇江間の個体など、海岸付近を中心に単木で点在して（宜野湾市教育委員会，1987）おり、当時の本島中北部の沖積低地には、これらを主体とする湿地林が分布していた可能性も推測される。

広域な周辺植生についてみると、花粉分析からシイノキ属・マテバシイ属が多く認められ、微細遺物検出同定からもシイノキ属の種実遺体が検出されている。シイノキ属は内陸部に安定した森林を作る種類で、海岸なども含めて広く分布する。このことから当時の内陸部には、シイ類を主体とした照葉樹林が広がっていたことが推測される。なお、黒田・小澤（1996）・黒田（1998）によれば、シイ類やカシ類など照葉樹林は、沖縄本島では、完新世に入ると急激に分布を拡大したとされており、これらの照葉樹林は、現在でも沖縄本島中北部の内陸部を中心に広く分布している（宮脇編著，1989）。

引用文献

- 宜野湾市教育委員会（1987）宜野湾市文化財調査報告書第9集 植生. 56p. .
- 木崎甲子郎編著（1985）琉球弧の地質誌. 278p. , 沖縄タイムス社.
- 木庭元晴（1980）琉球層群と海岸段丘. 第四紀研究, 18, p. 189-208.
- 木庭元晴（1990）琉球列島第四紀のサンゴ礁形成と島弧変動. サンゴ礁地域研究グループ編 日本のサンゴ礁地域1 熱い自然—サンゴ礁の環境誌, p. 155-175, 古今書院.
- 黒田登美雄・小澤智生（1996）花粉分析からみた琉球列島の植生変遷と古気候. 地学雑誌, 3, p. 328-342.
- 黒田登美雄（1998）南西諸島の植生史. 「図説 日本列島植生史」, 安田喜憲・三好教夫編, p. 162-175. 朝倉書店.
- 町田 洋（2001）徳之島, 与論島, 久米島, 宮古島, 石垣島. 小池一之・町田 洋編「日本の海成段丘 アトラス」, CD-ROM3枚+122p. , 東京大学出版会.
- 松井 健（1988）土壌地理学序説. 316p. , 築地書館.
- 目崎茂和・我那覇 念・広山 実（1978）沖縄島北部の海浜地形. 琉球列島の地質学研究, 3, p. 215-225.
- 宮脇 昭編著（1989）日本植生誌 沖縄・小笠原. 675p. , 至文堂.
- 海津正倫（1994）沖縄低地の古環境学. 270p. , 古今書院.

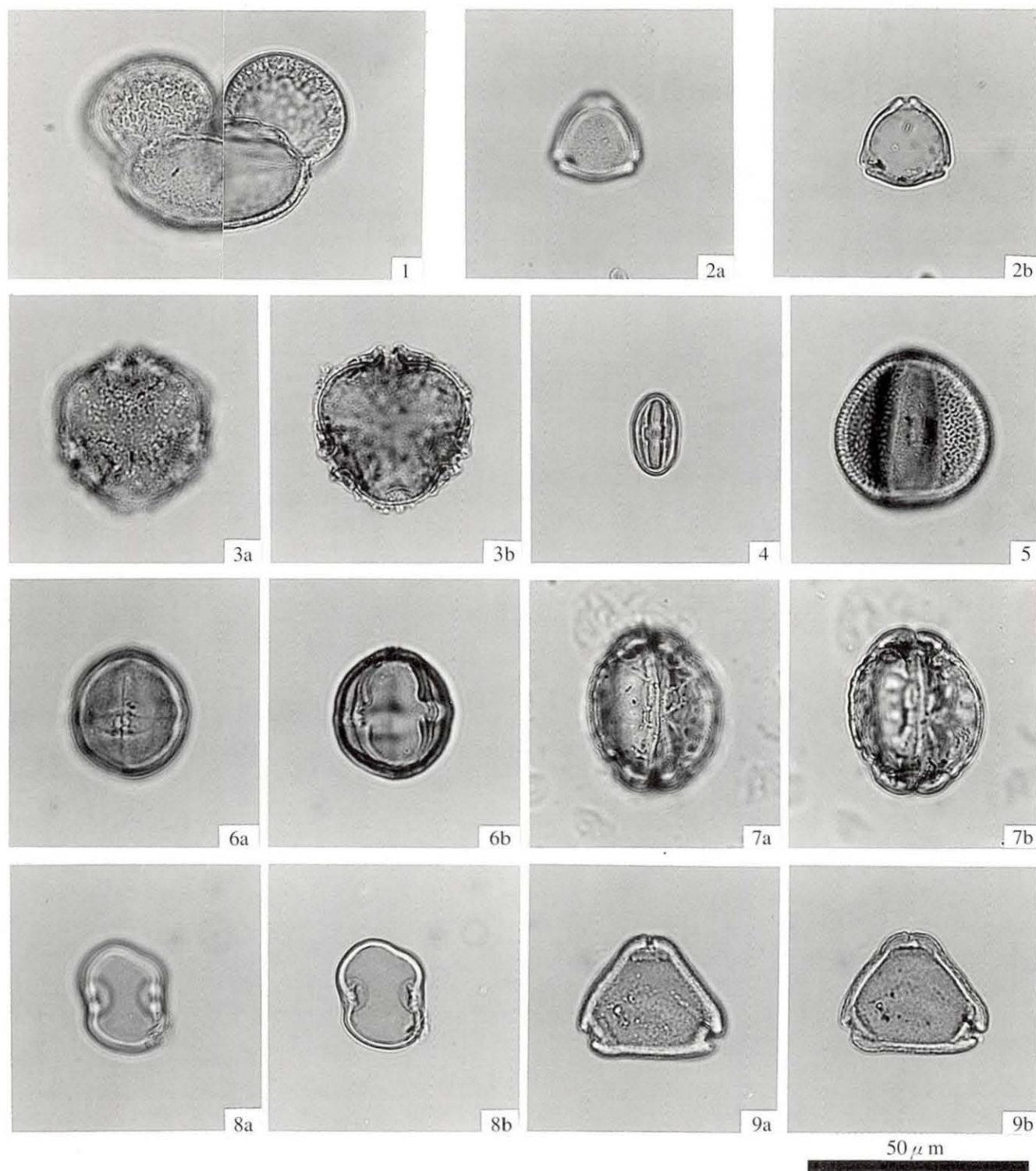
図版1 珪藻化石・植物珪酸体分析プレパラート内の状況



10 μ m 50 μ m
(1-10) (11,12)

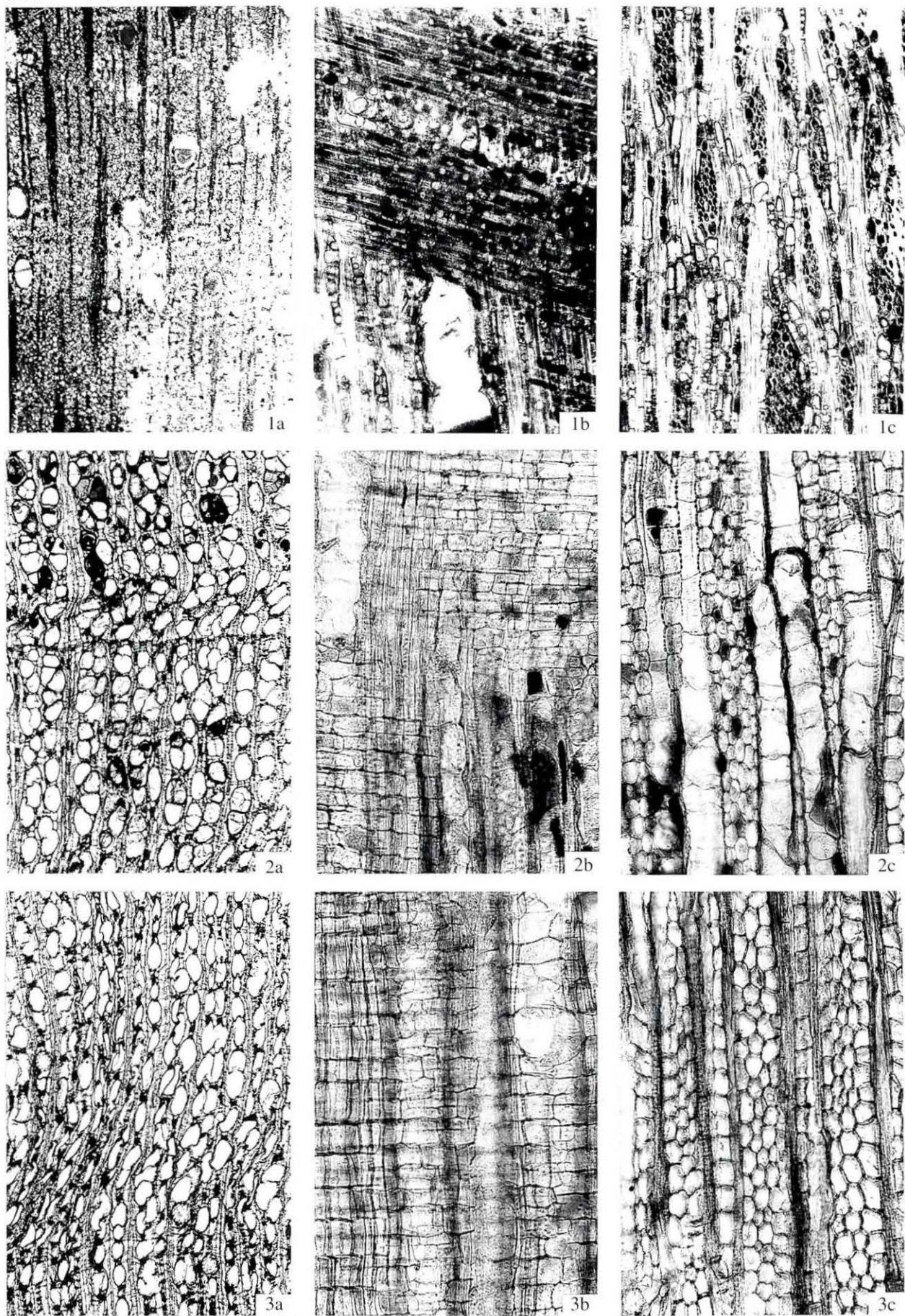
1. *Fragilaria construens* fo. *venter* (Ehr.) Hustedt (埋没材下位堆積物;4(下部))
2. *Amphora montana* Krasske (埋没材下位堆積物;3')
3. *Frustulia vulgaris* (Thwait.) De Toni (埋没材下位堆積物;3')
4. *Gyrosigma scalpoides* (Rabh.) Cleve (埋没材下位堆積物;3')
5. *Navicula viridula* (Kuetz.) Kuetzing (埋没材下位堆積物;4(下部))
6. *Navicula viridula* var. *rostellata* (Kuetz.) Cleve (埋没材下位堆積物;4(下部))
7. *Navicula symmetrica* Patrick (埋没材下位堆積物;3')
8. *Navicula angusta* Grunow (埋没材下位堆積物;3')
9. *Nitzschia clausii* Hantzsch (埋没材下位堆積物;4(下部))
10. *Nitzschia palea* (Kuetz.) W.Smith (埋没材下位堆積物;3')
11. 植物珪酸体分析プレパラート内の状況写真 (C-13東壁;31)
12. 植物珪酸体分析プレパラート内の状況写真 (埋没材下位堆積物;4(下部))

図版2 花粉化石



- | | |
|------------------------------|----------------------------------|
| 1. マツ属 (埋没材下位堆積物;4(下部)) | 2. ヤマモモ属 (埋没材下位堆積物;4(下部)) |
| 3. ジャケツイバラ属 (埋没材下位堆積物;4(下部)) | 4. シイノキ属—マテバシイ属 (埋没材下位堆積物;4(下部)) |
| 5. ジャケツイバラ属 (埋没材下位堆積物;4(下部)) | 6. アカメガシワ属 (埋没材下位堆積物;4(下部)) |
| 7. サガリバナ属 (埋没材下位堆積物;4(下部)) | 8. サカキカズラ属 (C-13東壁;4) |
| 9. ハイノキ属 (埋没材下位堆積物;4(下部)) | |

図版3 木材(1)



1. フヨウ属ハマボウ節 (埋没材4(下部))

2. サガリバナ (埋没材3)

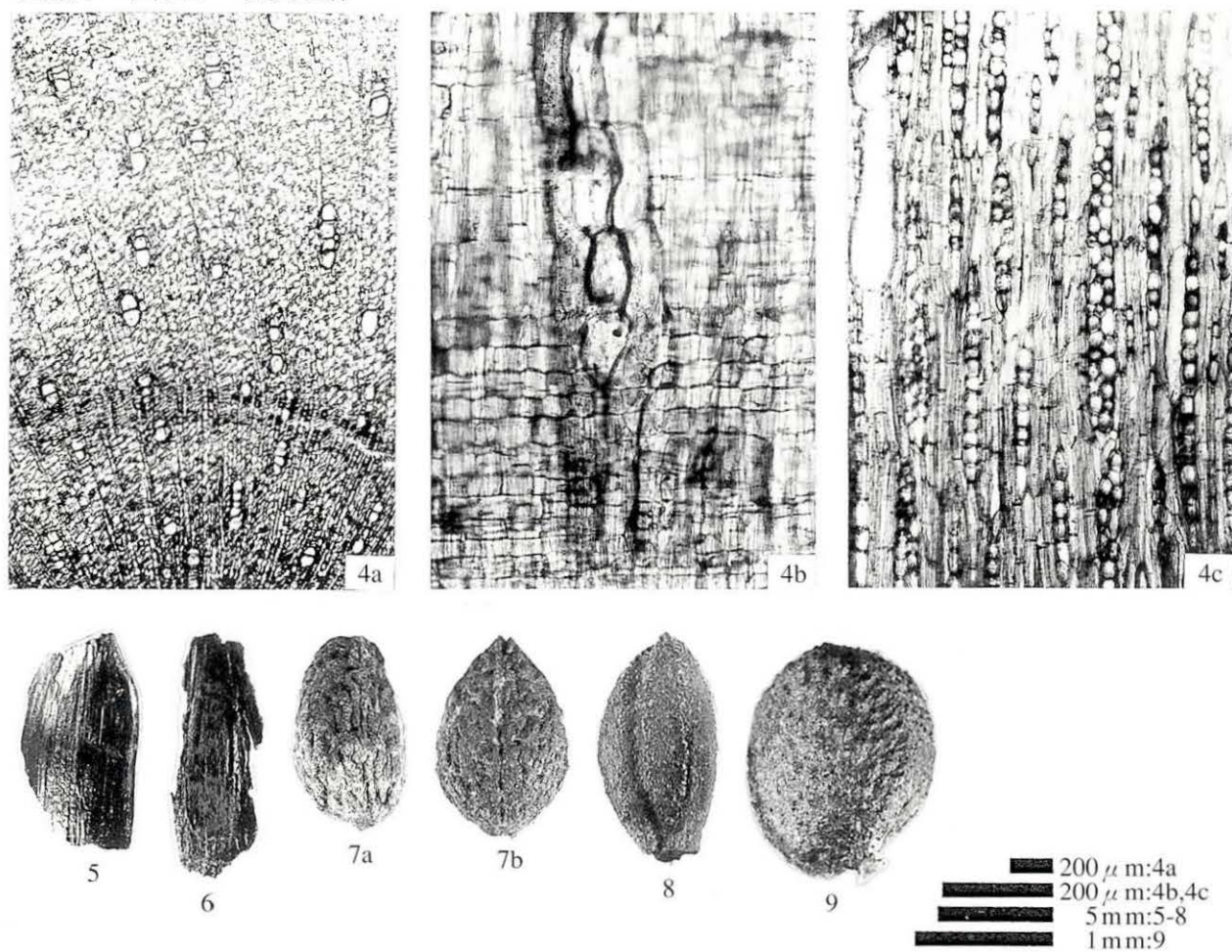
3. サガリバナ (埋没材1)

a:木口, b:柁目, c:板目

200 μ m:a

200 μ m:b,c

図版4 木材(2)・種実遺体



4. サキシマスオウノキ (埋没材2) a : 木口, b : 胚目, c : 板目
 5. シイノキ属 (埋没材下位堆積物;3') 6. シイノキ属 (埋没材下位堆積物;3')
 7. コバンモチ (埋没材下位堆積物;3') 8. エゴノキ属 (埋没材下位堆積物;3')
 9. カジノキ属 (埋没材下位堆積物;3')

名護市文化財調査報告－15

部 瀬 名 南 遺 跡

－ 市道・部瀬名線道路改良事業に伴う緊急発掘調査報告 －

発行年 平成14年（2002年）3月29日

発 行 名護市教育委員会

編 集 名護市教育委員会 社会教育課文化財係

〒905－8540 名護市港一丁目1番1号

TEL 0980－53－5429

印 刷 沖縄高速印刷株式会社

〒901－1111 南風原町字兼城577番地

TEL 098－889－5513
